

興道寺廃寺発掘調査報告書

2016

美浜町教育委員会



興道寺廃寺周辺空中写真（南から撮影）



興道寺廃寺空中写真（左下は興道寺遺跡土井ノ上 1 区調査地）



再建期金堂基壇北辺・西辺（西から撮影）



再建期金堂基壇北辺（北から撮影）



再建期金堂基壇北面階段（北から撮影）

卷頭図版4



創建期金堂基壇東辺土層断面（南から撮影）



創建期金堂基壇版築（基壇断面）



再建期塔基壇西辺（南から撮影）



創建期講堂基壇北辺（南から撮影）

卷頭図版 6



再建期中門基礎（南から撮影）



SD110101・再建期整地盤（南から撮影）

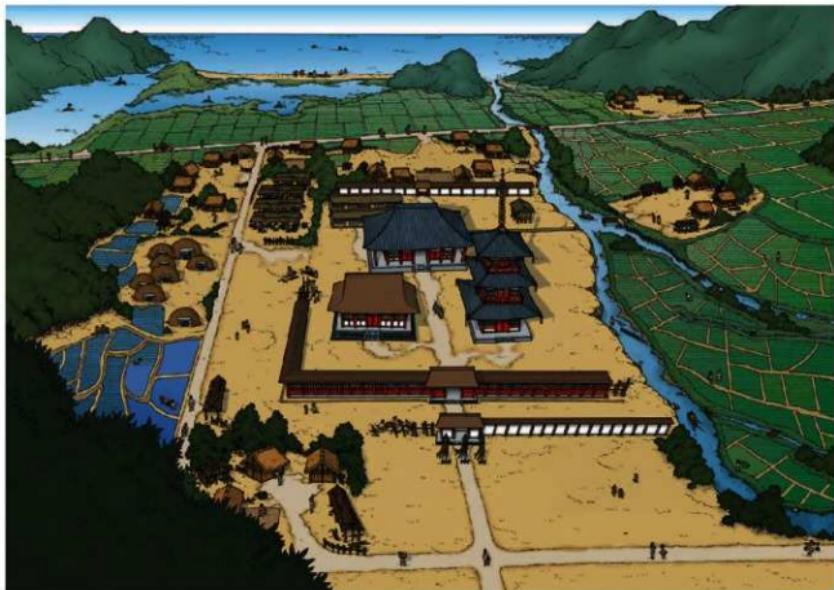


再建期南門基壇北東隅部石積み（北から撮影）



寺城西限構（SD160202）（北から撮影）

卷頭図版 8



興道寺廃寺周辺古代景観復元イラスト図



興道寺廃寺出土軒丸瓦Ⅰ型式



興道寺廃寺出土軒丸瓦Ⅱ型式



興道寺廃寺出土軒丸瓦Ⅲ型式

例　　言

- 1 本書は、美浜町教育委員会が国庫補助金（文化庁 国宝重要文化財等保存整備費補助金）の交付を受けて実施した、美浜町内所在の興道寺廃寺の発掘調査報告書（総括編）である。
- 2 第14～16次調査に関する現地調査および整理作業、報告書作成は、平成24年度から同27年度までの4年間において実施し、その成果を本書に収録した。
- 3 調査体制は以下のとおりである。

調査主体者

大同 保（美浜町教育委員会教育長、平成24～27年度）

調査事務局

窪 安和（美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財室長、平成24・25年度）

塩浜洋一（美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財室長、平成26・27年度）

松葉竜司（美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財室 主査（学芸員））

調査担当者　松葉竜司

- 4 現地調査は松葉が担当した。
- 5 本書の構成は、興道寺廃寺第14～16次調査報告と興道寺廃寺発掘調査の総括編からなる。
- 6 遺物実測図の縮尺は本文中に示す。図中の遺物断面は須恵器・陶磁器を黒塗り、土師器・製塙土器を白抜き、塑像螺髪をトーンとした。
- 7 本書収録の第2～5図、第7図、第10図に使用した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万分1 正式図および数値地図25000（地図画像）を複製したものである（承認番号 平27情復、第1121号）。また、写真2～4に収録した空中写真は、国土地理院長の承認を得て、米軍撮影の空中写真を複製したものである。
- 8 本書の執筆、編集は松葉が行った。
- 9 現地調査・報告書作成で下記の機関・機関にご指導、ご協力を賜った。（敬称略）

金沢市教育委員会、倉吉市教育委員会、国土地理院、古代寺院史研究会、琴浦町教育委員会、島根県教育委員会、鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センター、鳥取市教育委員会、長門市教育委員会、羽咋市教育委員会、浜田市教育委員会、文化庁文化財部記念物課、福井県教育庁生涯学習・文化財課、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、福井県立若狭歴史博物館、福井県立歴史博物館、八頭町教育委員会、米子市教育委員会、若狭考古学研究会、若狭町教育委員会

鯨本眞由美（福井県立若狭歴史博物館）、荒井秀規（藤沢市教育委員会）、石田由紀子（奈良文化財研究所）、市大樹（大阪大学）、今村昌子（美浜町文化財保護委員会）、上野晃（若狭考古学研究会）、近江俊秀（文化庁）、梶原義実（名古屋大学）、門井直哉（福井大学）、亀田修一（岡山理科大学）、北村圭弘（滋賀県教育委員会）、葛原秀雄（高島市教育委員会）、工藤俊樹（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）、久保智康（福井県文化財保護審議会委員）、小林裕季（財團法人滋賀県文化財保護協会）、近藤康司（堺市教育委員会）、酒井健治（福井県立若狭歴史博物館）、坂井秀弥（奈良大学）、柴原永連男（大阪市立大学）、芝田寿朗（福井県立若狭歴史博物館）、清野孝之（奈良文化財研究所）、清野陽一（奈良文化財

研究所)、竹内亮(日本学術振興会)、竹原伸二(枚方市教育委員会)、田辺信義(美浜町文化財保護委員会) 简井崇史(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、堂野前彰子(明治大学)、中大輔(國學院大學)、中川佳三(福井県教育庁文化課)、中野知幸(羽咋市教育委員会)、永井邦仁(愛知県埋蔵文化財センター)、西島伸彦(小浜市教育委員会文化課)、西山要一(奈良大学)、仁科章、菱田哲郎(京都府立大学)、古川登(福井市教育委員会)、本多達哉(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、松川雅弘(小浜市役所)、水野和雄、三舟隆之(東京医療保健大学)、三好清超(飛騨市役所)、山口悦子(美浜町文化財保護委員会)、山口遼介(岡崎市教育委員会)、吉川真司(京都大学)、吉田真由美(鈴鹿市考古博物館)、吉永莊志(島根県立古代出雲歴史博物館)、渡辺丈彦(慶應義塾大学文学部)、(所属は本報告刊行時のものである)

10 出土遺物・記録類は、美浜町教育委員会 学校教育課が保管している。

目 次

巻頭図版

例 言

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 美浜町の地勢と地形・地質概況	1
第2節 興道寺廃寺周辺の地理的環境	5
第3節 興道寺廃寺周辺の歴史的環境	17
第4節 興道寺廃寺における既往の調査研究	27
第2章 調査の経緯・経過と調査の概要	47
第1節 調査に至る経緯と経過	47
第2節 調査に対する指導、評価	52
第3節 普及啓発事業の実施	55
第4節 発掘調査の体制、方法	57
第5節 総括報告書の作成方針と作成方法	61
第3章 既往の発掘調査と第14～16次調査の遺構・遺物	63
第1節 既往の発掘調査における検出遺構と出土遺物	63
第2節 既往の発掘調査の内容	76
第3節 興道寺廃寺第14～16次調査	85
第4章 興道寺廃寺の遺構	147
第1節 興道寺廃寺の伽藍域	147
第2節 興道寺廃寺の寺域	196
第3節 興道寺廃寺の寺域外	218
第5章 興道寺廃寺の遺物	221
第1節 土器	221
第2節 瓦	224
第3節 寺院関係遺物	244
第4節 金属遺物	247
第5節 自然遺物	251

第6章 総 括	253
第1節 興道寺廃寺の伽藍域と寺域	253
第2節 興道寺廃寺の出土遺物	264
第3節 興道寺廃寺の変遷	268
第4節 興道寺廃寺の成立と存続の背景	271
第5節 興道寺廃寺をとりまく景観	279
第6節 まとめ	284
報告書抄録	294
写真図版	

写真図版

挿 図 目 次

第1図	美浜町位置図	2
第2図	興道寺廃寺位置図	3
第3図	興道寺廃寺周辺地形分類図	6
第4図	興道寺廃寺周辺地質分類図	7
第5図	興道寺廃寺付近におけるボーリング調査の柱状図	8
第6図	興道寺廃寺周辺地形横断図	9
第7図	興道寺廃寺周辺地形図	12
第8図	興道寺廃寺周辺地籍図	13・14
第9図	興道寺廃寺現況地形測量図	15・16
第10図	興道寺廃寺周辺遺跡分布図	18
第11図	南伊夜山遺跡出土銅鐸実測図	20
第12図	藤ノ木遺跡堅穴建物跡・出土遺物実測図	21
第13図	松原遺跡製塙炉・出土遺物実測図	22
第14図	興道寺窯出土須恵器実測図	22
第15図	獅子塚古墳墳丘・石室・出土遺物実測図	23
第16図	興道寺遺跡土井ノ上1区廃棄土坑SX2出土土器実測図	25
第17図	耳川流域における駅路復元図	26
第18図	昭和39年4月発行『美浜町文化財調査台帳』	28
第19図	昭和54年4月発行の『美浜町文化財調査台帳』	29
第20図	水野と雄氏資料紹介軒瓦実測図	31
第21図	福井県教育委員会試掘調査出土土器実測図	32
第22図	福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(1)	34
第23図	福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(2)	35
第24図	福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(3)	36
第25図	福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(4)	37
第26図	福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(5)	38
第27図	福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(6)	39
第28図	個人採集瓦実測図(1)	40
第29図	個人採集瓦実測図(2)	41
第30図	個人採集瓦実測図(3)	42
第31図	興道寺廃寺採集土器実測図	42
第32図	興道寺廃寺採集瓦実測図	43
第33図	興道寺廃寺発掘調査位置図	50
第34図	興道寺廃寺金堂・講堂基壇遺構平面図	67
第35図	興道寺廃寺塔基壇・伽藍東限遺構平面図	68
第36図	興道寺廃寺中門・南門基壇遺構平面図	69
第37図	興道寺廃寺伽藍北限遺構平面図	70
第38図	興道寺廃寺伽藍東限遺構平面図	71
第39図	興道寺廃寺寺域北側遺構平面図	72
第40図	興道寺廃寺寺域北限遺構平面図	73
第41図	興道寺廃寺寺域外北方遺構平面図	74
第42図	興道寺廃寺出土瓦凸面叩き目拓影	75
第43図	第14次調査1トレンチ遺構平面図	89
第44図	第14次調査1トレンチ遺構土層断面図1	90
第45図	第14次調査1トレンチ遺構土層断面図2	91
第46図	第14次調査1トレンチ出土遺物実測図	92
第47図	第14次調査2・3トレンチ遺構平面図	93
第48図	第14次調査2トレンチ遺構土層断面図	94
第49図	第14次調査3トレンチ遺構土層断面図	95

第50図	第14次調査3トレンチ出土遺物実測図	96
第51図	第14次調査4トレンチ造構平面図	98
第52図	第14次調査4トレンチ造構土層断面図	99
第53図	第14次調査4トレンチ出土遺物実測図	100
第54図	第14次調査5トレンチ造構平面図	102
第55図	第14次調査5トレンチ造構土層断面図	103
第56図	第14次調査5トレンチ出土遺物実測図	104
第57図	第14次調査6トレンチ造構平面図	105
第58図	第14次調査6トレンチ造構土層断面図	106
第59図	第15次調査1トレンチ造構平面図	108
第60図	第15次調査1トレンチ造構土層断面図1	109
第61図	第15次調査1トレンチ造構土層断面図2	110
第62図	第15次調査1トレンチ出土遺物実測図	111
第63図	第15次調査2トレンチ造構平面図	113・114
第64図	第15次調査2トレンチ造構土層断面図1	115
第65図	第15次調査2トレンチ造構土層断面図2	116
第66図	第15次調査2トレンチ出土遺物実測図	118
第67図	第15次調査3トレンチ造構平面図	119・120
第68図	第15次調査3トレンチ造構土層断面図1	121
第69図	第15次調査3トレンチ造構土層断面図2	122
第70図	第15次調査4・5トレンチ造構平面図	125・126
第71図	第15次調査4トレンチ造構土層断面図	127
第72図	第15次調査5トレンチ造構土層断面図1	129
第73図	第15次調査5トレンチ造構土層断面図2	130
第74図	第15次調査5トレンチ出土遺物実測図	132
第75図	第16次調査1トレンチ造構平面図	133・134
第76図	第16次調査1トレンチ造構土層断面図1	135
第77図	第16次調査1トレンチ造構土層断面図2	136
第78図	第16次調査1トレンチ出土遺物実測図	139
第79図	第16次調査2トレンチ造構平面図	140
第80図	第16次調査2トレンチ造構土層断面図	141
第81図	第16次調査2トレンチ出土遺物実測図	142
第82図	第16次調査3トレンチ造構土層断面図	143
第83図	金堂基壇平面図	149・150
第84図	金堂基壇土層断面図	151
第85図	金堂基壇北面階段平面図・立面図	152
第86図	金堂基壇北側塑像螺髮出土位置図	153
第87図	塔基壇平面図	159・160
第88図	塔基壇土層断面図1	161
第89図	塔基壇土層断面図2	162
第90図	講堂基壇平面図	165・166
第91図	講堂基壇土層断面図	167
第92図	伽藍北限平面図	168
第93図	伽藍北限土層断面図	170
第94図	中門基壇平面図	173・174
第95図	中門基壇土層断面図	175・176
第96図	SB080301錢貨出土状況図	177
第97図	中門基壇西側再建期整地層断面図・土層断面図	177
第98図	伽藍南限平面図	179・180
第99図	伽藍南限土層断面図1	181
第100図	伽藍南限土層断面図2	182
第101図	伽藍東限平面図	183・184

第102図	伽藍東限土層断面図 1	186
第103図	伽藍東限土層断面図 2	187
第104図	伽藍北方平面図 1	188
第105図	伽藍北方平面図 2	189・190
第106図	伽藍北方土層断面図 1	191
第107図	伽藍北方土層断面図 2	192
第108図	伽藍北方土層断面図 3	193
第109図	南門基壇平面図	197・198
第110図	南門基壇土層断面図 1	199
第111図	南門基壇土層断面図 2	200
第112図	寺域東限平面図	201・202
第113図	寺域東限土層断面図	203
第114図	寺域北限平面図 1	207・208
第115図	寺域北限平面図 2	209・210
第116図	寺域北限土層断面図 1	211
第117図	寺域北限土層断面図 2	212
第118図	寺域外北方平面図 1	213・214
第119図	寺域外北方平面図 2	215・216
第120図	寺域外北方土層断面図 1	219
第121図	寺域外北方土層断面図 2	220
第122図	興道寺廐寺出土土器実測図	222
第123図	興道寺廐寺出土軒瓦実測図(1)	226
第124図	興道寺廐寺出土軒瓦実測図(2)	227
第125図	興道寺廐寺出土軒瓦実測図(3)	228
第126図	興道寺廐寺出土軒瓦実測図(4)	229
第127図	興道寺廐寺出土軒瓦実測図(5)	230
第128図	軒丸瓦瓦筋模式図	232
第129図	興道寺廐寺出土丸瓦実測図(1)	236
第130図	興道寺廐寺出土丸瓦実測図(2)	237
第131図	興道寺廐寺出土平瓦実測図(1)	238
第132図	興道寺廐寺出土平瓦実測図(2)	239
第133図	興道寺廐寺出土熨斗瓦・隅落とし瓦・鶴尾実測図	241
第134図	高善庵遺跡出土瓦実測図	243
第135図	興道寺廐寺出土仏器模倣土器・灯明皿実測図	244
第136図	興道寺廐寺出土塑像螺髪実測図	245
第137図	興道寺廐寺出土土壁実測図	247
第138図	興道寺廐寺出土錢貨拓影	248
第139図	興道寺廐寺出土金属製遺物実測図	249
第140図	興道寺廐寺伽藍域・寺域遺構平面模式図	255・256
第141図	興道寺廐寺伽藍模式図	259
第142図	北陸地方・山陰地方の古代寺院伽藍配置図(1)	262
第143図	北陸地方・山陰地方の古代寺院伽藍配置図(2)	263
第144図	興道寺廐寺遺構消長模式図	268
第145図	興道寺廐寺遺構変遷模式図	269
第146図	若狭国郷里推定図	273
第147図	城縄手遺跡出土須恵器実測図	280
第148図	若狭国における古代遺跡分布図	280
第149図	若狭国周辺の交通路	281

表 目 次

第1表	興道寺廃寺周辺遺跡一覧	19
第2表	福井県教育委員会試掘調査出土遺物・興道寺廃寺採集遺物観察表	44
第3表	個人寄贈瓦・興道寺廃寺採集瓦観察表	44
第4表	福井県教育委員会試掘調査出土瓦観察表	45
第5表	興道寺遺跡・興道寺古墳群・興道寺廃寺における既往の調査一覧	48
第6表	興道寺廃寺における既往の調査一覧	49
第7表	興道寺遺跡第14～16次調査概要一覧	51
第8表	学識者会議の経過一覧	53
第9表	興道寺廃寺調査開通普及啓発事業実施一覧	56
第10-1表	興道寺廃寺遺構構成表(1)	65
第10-2表	興道寺廃寺遺構構成表(2)	66
第11表	興道寺廃寺第14～16次調査出土瓦観察表	145
第12表	興道寺廃寺第14～16次調査出土遺物観察表	145
第13表	興道寺廃寺軒瓦出土点数表	233
第14表	丸瓦・平瓦の成形・凸面凹面調整の推移	240
第15表	興道寺廃寺出土塑像螺髪一覧表	246
第16表	興道寺廃寺出土錢貨一覧表	248
第17表	興道寺廃寺出土金属製遺物一覧表	250
第18表	SD160202埋土検出花粉・胞子化石一覧	252
第19表	興道寺廃寺基壇建物一覧	257
第20表	木簡にみえる三方郡の氏族名	273
第21表	三方郡における古代郷里名	273
第22表	仏教政策史年表	276

写 真 目 次

卷頭図版 1	上 興道寺廃寺周辺空中写真	
	下 興道寺廃寺空中写真	
卷頭図版 2	再建期金堂基壇北辺・西辺	
卷頭図版 3	上 再建期金堂基壇北辺	
	下 再建期金堂基壇北面段階	
卷頭図版 4	上 創建期金堂基壇東辺土層断面	
	下 創建期金堂基壇版築	
卷頭図版 5	上 再建期塔基壇西辺	
	下 創建期講堂基壇北辺	
卷頭図版 6	上 再建期中門基壇	
	下 SD110101・再建期整地面	
卷頭図版 7	上 再建期南門基壇北東隅部石積み	
	下 寺域西限溝 (SD160202)	
卷頭図版 8	上 興道寺廃寺周辺古代景観復元イラスト図	
	下 興道寺廃寺出土軒丸瓦 I～III型式	

本文写真 1	耳川流域空中写真 (北から)	4
本文写真 2	興道寺廃寺周辺空中写真	5
本文写真 3	興道寺廃寺周辺字境写真	8
本文写真 4	興道寺廃寺周辺環境写真	10
本文写真 5	興道寺廃寺空中写真 (北から)	11
本文写真 6	興道寺遺跡土井ノ上1区空中写真	25
本文写真 7	興道寺遺跡中ノ丁1区堅穴建物跡SB1	25

本文写真8	福井県教育委員会実施試掘調査（西から）	30
本文写真9	福井県教育委員会実施試掘調査（南から）	30
本文写真10	第7回興道寺廃寺調査会議	53
本文写真11	第9回興道寺廃寺調査会議	53
本文写真12	第7回興道寺廃寺等調査指導委員会	53
本文写真13	文化庁近江文化財調査官現地指導	54
本文写真14	第10次調査現地説明会	56
本文写真15	第12次調査現地説明会	56
本文写真16	古代寺院史研究会遺跡見学	56
本文写真17	平成23年度歴史フォーラム	56
本文写真18	平成24年度歴史フォーラム	56
本文写真19	平成26年度歴史フォーラム	56
本文写真20	軒丸瓦II型式の瓦傷の進行段階	225
本文写真21	SD160202埋土から検出された花粉化石	251

写 真 図 版 目 次

- 写真図版1 興道寺廃寺周辺空中写真（真上から撮影）
- 写真図版2 第14次調査1トレンチ全景、第14次調査1トレンチ東壁土層断面、第14次調査1トレンチ東端搅乱、SH140101、SK140101、SK140103、SK140104
- 写真図版3 P140101・P140102、P140104、P140105、P140111、P140122～P140124
- 写真図版4 P140126、P140128、P140130、第14次調査2トレンチ東壁土層断面、第14次調査2トレンチ全景、地山面の落ち込み
- 写真図版5 SK140201・SK140202、SK140201、SK140203、第14次調査3トレンチ全景、第14次調査3トレンチ北壁土層断面（西側・東側）
- 写真図版6 地山面の落ち込み、SB140301、SB140301貼床、SB140301土層断面、SB140301南辺・SB140301-P1、SB140301-P1
- 写真図版7 SB140301-P2、第14次調査4トレンチ調査前現況、第14次調査4トレンチ全景、第14次調査4トレンチ北壁土層断面、SK140401、SK140401遺物出土状況、SK140402遺物出土状況
- 写真図版8 SK140403土層断面、SK140404土層断面、P140409、第14次調査5トレンチ調査前現況、第14次調査5トレンチ全景
- 写真図版9 第14次調査5トレンチ南壁土層断面、第14次調査5トレンチ断削土層断面、SK140501・SK140502・P150504・P150505、SK140501土層断面、SK140503・P150501・P150502・P150503、SK140503土層断面、P140501土層断面
- 写真図版10 第14次調査6トレンチ全景、第14次調査6トレンチ東壁土層断面・断削土層断面、第15次調査1トレンチ全景
- 写真図版11 第15次調査1トレンチ北壁土層断面、SK150101、SK150102、SK150103・SK150105、SK150104、SK150104土層断面・遺物出土状況、P150101・P150102、P150111～P150114
- 写真図版12 P150130・P150131、第15次調査2トレンチ全景1・2、第15次調査2トレンチ、第15次調査2トレンチ南壁土層断面、SK150201、SK150204、SK150204・SK150205
- 写真図版13 SK150204土層断面、SK150205土層断面、SK150206・P150234・P150235・P150236、P150230、P150232、第15次調査3トレンチ全景、第15次調査3トレンチ西端
- 写真図版14 第15次調査3トレンチ東端、第15次調査3トレンチ南壁土層断面、SD150301・SK150305・SK150306、SK150303・SK150304、SK150303土層断面、SK150304土層断面、SK150305土層断面、SK150306土層断面
- 写真図版15 SK150307、SK150307土層断面、第15次調査4トレンチ全景、第15次調査4トレンチ南側、第15次調査4トレンチ東壁土層断面

- 写真図版16 SD150401・SD150401土層断面、SD150402・SD150402土層断面、SD150402縫・遺物出土状況1・2、SK150401・SK150402・P150401～P150406、第15次調査5トレンチ全景
- 写真図版17 第15次調査5トレンチ東壁・断割土層断面、整地層・SB150501、整地層断割土層断面、SB150501、SB150501焼土検出状況、SB150501-P1、SB150501-P1土層断面
- 写真図版18 SB150501-P2・SB150501-P3、SD150501・P150508、SD150501土層断面、SK150501、SK150502遺物出土状況、第16次調査1トレンチ全景、第16次調査1トレンチ南側、第16次調査1トレンチ東壁土層断面
- 写真図版19 SK160101、SK160104土層断面、SK160106土層断面、SK160107土層断面、SK160108土層断面、SK160109土層断面、P160105土層断面、P160106土層断面
- 写真図版20 P160130土層断面、第16次調査2トレンチ全景、第16次調査2トレンチ北壁土層断面、SD160201・SD160202、SD160201、SD160202-1、SD160202-2、SD160202-3
- 写真図版21 SD160202-4、SD160202土層断面1～4、SD160202上層、P160201、P160204・P160205～P160207
- 写真図版22 P160208、第16次調査3トレンチ全景、第16次調査3トレンチ西側、第16次調査3トレンチ南壁土層断面、第16次調査3トレンチ北壁土層断面、P160301・P160302、P160304
- 写真図版23 水田畔1、水田畔2
- 写真図版24 SK140101出土須恵器杯、P140106出土遺物、第14次調査3トレンチ堆積層出土遺物、SB140301出土遺物、SK140401出土遺物、SK140403出土遺物、P140409出土遺物、SK140402出土遺物
- 写真図版25 SK150104出土須恵器杯、SK150104出土遺物、SK150102出土遺物、P150115出土遺物、P150117出土遺物、P150118出土遺物、P150130出土遺物、SD150201出土遺物、SK150201出土遺物、SK150203出土遺物
- 写真図版26 SK150204出土須恵器杯、SK150204出土遺物、SK150205出土遺物、SK150206出土遺物、P150223出土遺物、P150225出土遺物、P150227出土遺物
- 写真図版27 P150229出土遺物、SD150402出土遺物、SB150501焼土出土遺物、SB150501-P3出土遺物、SB150501出土遺物、SB150501-P4出土遺物
- 写真図版28 SK150501出土遺物、SK150502出土遺物、第15次調査5トレンチ整地土(断割)出土遺物、P150503出土遺物、SK160109出土遺物、P160130出土遺物
- 写真図版29 SD160201出土遺物、P160207出土遺物、SD160202出土遺物
- 写真図版30 第1次調査2トレンチ全景、第1次調査2トレンチ西壁土層断面、第1次調査3トレンチ全景、SB010201、SB010201床面、SB010201床面出土製塙土器
- 写真図版31 創建期塔基壇南東隅部・SK010201、創建期塔基壇南東隅部・創建期塔基壇外装、創建期塔基壇縁辺溝土層断面、SA010201、SK010201土層断面、SK010201遺物出土状況
- 写真図版32 SD010301、SD010301土層断面、第2次調査2トレンチ全景、SK020101・SK020102検出状況
- 写真図版33 創建期塔基壇西辺検出状況、創建期塔基壇西辺瓦出土状況1・2、再建期塔基壇西辺整地層、再建期塔基壇西辺整地層・堆積層
- 写真図版34 SK020103、P020204、SD020202・SD020204、第2次調査2トレンチ東側全景、第2次調査3トレンチ東側全景
- 写真図版35 SK030201(SK030401)、P030303・P030305・P030306、SD030401、P030305、第4次調査4トレンチ全景
- 写真図版36 P030306、第4次調査4トレンチ東壁土層断面、第4次調査5トレンチ西側、P040601～P040607、第4次調査7トレンチ全景
- 写真図版37 再建期塔基壇西辺・整地層、創建期塔基壇東辺瓦溜まり・再建期塔基壇整地層、創建期塔基壇西辺瓦溜まり・再建期整地層土層断面、創建期塔基壇西辺瓦溜まり、SK040801・P040801・P040802、第4次調査10トレンチ全景
- 写真図版38 SD041001、SD041001土層断面、P041001、P041005、第5次調査区調査区全景、第5次調査区南壁土層断面、第5次調査区北壁土層断面

- 写真図版39 第6次調査1トレンチ全景、SK060103、SK060103縫出土状況、SK060103土層断面、再建期金堂基壇東辺、再建期金堂基壇東辺瓦溜まり
- 写真図版40 再建期金堂基壇東辺外装、創建期金堂基壇東辺瓦溜まり1・2、再建期金堂基壇東辺整地層除去状況、再建期金堂基壇西辺1・2、再建期金堂基壇西辺外装
- 写真図版41 再建期金堂基壇西辺瓦溜まり1～3、再建期金堂基壇北辺削平痕跡1・2、再建期金堂基壇北辺断ち割り、第6次調査4トレンチ全景、第6次調査5トレンチ全景
- 写真図版42 第6次調査6トレンチ全景、SD060601土層断面、SH060701、P060701土層断面、第7次調査1トレンチ土層断面、第7次調査2トレンチ全景、SD070202
- 写真図版43 SK070201、SD070201瓦出土状況、第7次調査3トレンチ全景、創建期塔基壇北辺瓦溜まり土層断面、創建期塔基壇北辺瓦溜まり1・2、再建期金堂基壇東辺瓦溜まり
- 写真図版44 再建期金堂基壇東辺外装抜きき、再建期金堂基壇東辺削平痕跡、瓦出土状況、第8次調査3トレンチ全景、再建期中門基壇南辺外装
- 写真図版45 再建期中門基壇南辺遺物出土状況1・2、再建期中門基壇西辺遺物出土状況、再建期中門基壇南辺西辺錢貨出土状況
- 写真図版46 再建期中門基壇北辺、P080302、再建期中門基壇南辺断ち割り、再建期中門基壇北辺断ち割り、瓦出土状況、再建期中門基壇西側堆積層遺物出土状況、再建期中門基壇西側整地面
- 写真図版47 再建期中門基壇西側整地面断削土層断面、第9次調査2トレンチ全景、SK090204、再建期中門基壇北東隅部、再建期中門基壇北東隅部東辺石積み、第9次調査3トレンチ全景
- 写真図版48 第9次調査4トレンチ全景、SB090401、SB090401土層断面、SB090401遺物出土状況、SA090401、SK090401土層断面、第9次調査5トレンチ全景、SK090601
- 写真図版49 第9次調査7・8トレンチ全景、第9次調査8トレンチ全景、SB090801、SB090802、SB090802-SK1・SK2、SK090801～SK090805
- 写真図版50 SK090801土層断面、SK090802土層断面、SK090803、SK090803縫検出状況、SK090804土層断面、SK090805土層断面、第9次調査9トレンチ南側、SK090901遺物出土状況
- 写真図版51 第9次調査11トレンチ西側、東側、第10次調査1トレンチ北側、SB100101・SB100201、SB100201・SB100101土層断面
- 写真図版52 SB100201-SD1、SB100201床面、SB100102、SK100101・SK100102・SK100106、SK100103土層断面、SK100104土層断面、第10次調査3トレンチ全景、第10次調査4トレンチ全景
- 写真図版53 SD100401、再建期金堂基壇南北整地面断削(SD100401)南北土層断面1・2、再建期金堂基壇東辺1・2、創建期・再建期金堂基壇断削東西土層断面1・2
- 写真図版54 再建期金堂基壇北西整地面、再建期金堂基壇北西石列、第10次調査7トレンチ全景、SH100901・SA100901、SD100901・SD100902、第10次調査10・11トレンチ東側、第10次調査10トレンチ南側、SH101001・SH101101
- 写真図版55 SH101101柱穴並び、P101035、再建期中門基壇西側搅乱坑、SD110101・SD110101・SD110101・再建期整地面断削南北土層断面、再建期南門基壇西側整地面断削南北土層断面
- 写真図版56 第11次調査2トレンチ西側、第11次調査2トレンチ南側、再建期中門基壇北側南北土層断面、再建期中門基壇北側東西土層断面、SH110201、SK110202、SK110202遺物出土状況、第11次調査3トレンチ全景
- 写真図版57 SD110301南北土層断面、SK110301土層断面、再建期塔基壇西辺1・2、創建期・再建期塔基壇
- 写真図版58 再建期塔基壇西辺3、P110402・P110406、P110409、SK110401、創建期・再建期塔基壇東辺、再建期塔基壇東側堆積層土層断面、創建期・再建期塔基壇東西土層断面1・2
- 写真図版59 創建期・再建期塔基壇東西土層断面3、第11次調査5トレンチ全景、再建期金堂基壇北側堆積層遺物出土状況1～4、再建期金堂基壇北側堆積層土層断面・遺物出土状況5、再建期金堂基壇北側堆積層像螺髮出土状況1

- 写真図版60 再建期金堂基壇北面階段、再建期金堂基壇北側整地面断割南北土層断面、
第11次調査6トレンチ全景、再建期金堂基壇西辺、第11次調査7トレンチ全景、
SD110701、SD110701土層断面
- 写真図版61 SD110701遺物出土状況、第11次調査8トレンチ全景、第11次調査10トレンチ
全景、第11次調査11・12トレンチ全景
- 写真図版62 再建期南門基壇1・2
- 写真図版63 再建期南門基壇礎層、再建期南門基壇検出状況、再建期南門基壇北側攪乱坑、
再建期南門基壇断削南北土層断面、再建期南門基壇北西隅部石積み1
- 写真図版64 再建期南門基壇北西隅部石積み2・3、SD111201土層断面、創建期講堂基壇
東辺、創建期講堂基壇西辺付近
- 写真図版65 創建期講堂基壇南辺、SD111101土層断面、第12次調査1トレンチ全景、再建期
中門基壇北西側整地面断削南北土層断面、第12次調査2トレンチ全景、再建期
南門基壇北西隅部検出状況、再建期南門基壇南西隅部
- 写真図版66 再建期南門基壇西辺1(第12次調査2~4トレンチ)、再建期南門基壇北西隅部、
再建期南門基壇西辺2(第12次調査2トレンチ)、再建期南門基壇北西隅部
石積み1~3、再建期南門基壇西辺断割東西土層断面
- 写真図版67 再建期南門基壇南東側整地面断削東西土層断面1・2、P120406土層断面、
第12次調査5トレンチ全景、SK120501土層断面、第12次調査6トレンチ全景、
再建期金堂基壇北面階段、再建期講堂基壇南辺位置関係、第12次調査
7トレンチ全景
- 写真図版68 再建期金堂基壇北側堆積層塑像螺髮出土状況、再建期講堂基壇南辺、再建期
講堂基壇南辺断削南北土層断面1・2、創建期講堂基壇北辺、創建期講堂
基壇北辺断削南北土層断面1・2、SD120901出土状況
- 写真図版69 第12次調査9トレンチ全景、SD120901、SD120901土層断面、再建期南門基壇
南方整地面断削南北土層断面、再建期南門基壇南方整地面断削東西土層断面、
第13次調査2トレンチ全景
- 写真図版70 第13次調査1トレンチ全景、再建期講堂基壇南西隅部
- 写真図版71 再建期講堂基壇西辺土層断面、創建期・再建期講堂基壇西辺断削東西土層断面、
創建期・再建期講堂基壇西辺断削、第13次調査3トレンチ全景、SD130301、
SD130301土層断面
- 写真図版72 第13次調査4トレンチ全景、第13次調査6トレンチ全景
- 写真図版73 第7次調査2トレンチ整地層出土軒丸瓦、再建期金堂基壇(SB110501)北側
堆積層出土軒丸瓦、再建期塔基壇(SB040702)西辺整地層出土軒丸瓦、
再建期金堂(SB060201)東辺瓦溜まり出土軒丸瓦、第6次調査5トレンチ表土
出土軒丸瓦、再建期塔基壇(SB020201)西辺堆積層出土軒丸瓦、再建期金堂
基壇(SB110501)北側堆積層出土軒丸瓦、再建期金堂基壇(SB120601)北側堆積層
出土軒丸瓦
- 写真図版74 再建期金堂基壇(SB100502)東側堆積層出土軒丸瓦、第2次調査2トレンチ表土
出土軒丸瓦、再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層出土軒丸瓦、再建期塔基壇
(SB020201)西辺堆積層出土軒平瓦、SK060103出土軒平瓦、再建期金堂基壇
(SB100402)南西側堆積層出土軒平瓦、再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層
出土軒平瓦、再建期金堂基壇(SB100402)南西側堆積層出土軒平瓦
- 写真図版75 再建期金堂基壇(SB060201)東辺瓦溜まり出土軒平瓦、再建期金堂基壇北西側
堆積層出土軒平瓦、再建期中門基壇(SB090101)西側整地層(断割部分)出土
軒平瓦、再建期金堂基壇(SB100402)南西側堆積層出土軒平瓦
- 写真図版76 再建期中門基壇(SB090101)西側整地層出土丸瓦、再建期金堂基壇(SB110501)
北側堆積層出土丸瓦
- 写真図版77 再建期塔基壇(SB020201)西辺堆積層出土熨斗瓦、再建期金堂基壇(SB110501)
北側堆積層出土鷦尾、興道寺廐寺出土塑像螺髮、再建期金堂基壇(SB110501)
北側堆積層出土土壁表面
- 写真図版78 興道寺廐寺出土銭貨、再建期塔基壇(SB110201)整地面出土須恵器蓋、
SD120901出土須恵器杯蓋、SD110701出土須恵器杯
- 写真図版79 興道寺廐寺出土軒丸瓦(第28図1~4)、興道寺廐寺出土軒平瓦(第29図6)

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 美浜町の地勢と地形・地質概況

第1項 若狭地方と美浜町の地勢

美浜町は福井県三方郡に属し、若狭地方の中では最東端に位置する。

若狭地方は北陸地方の最西部にあり、現在の行政単位では東から美浜町、若狭町（旧三方町・旧上中町）、小浜市、おおい町（旧名田庄村・旧大飯町）、高浜町の5市町からなる。美浜町の東側に位置する敦賀市を含んで、江戸時代の小浜藩にはほぼ相当する地域を嶺南とも言う。これらの自治体は東西に連なり、いずれも北に海岸部を臨み、南に山地を控え、滋賀県、京都府と府県境をなしている。北陸地方は総じて積雪量の多い地域であるが、若狭地方は比較的温暖で積雪量もさほど多くない。

令制下の若狭は御食国の一であったとされており、高浜町域に所在した青郷を中心とした地域から多くの海産物が貢として国家に貢納されたことが都城出土木簡から知られている。鳥浜貝塚に見るように、海、河川、湖沼を対象とした漁業は繩文時代までさかのぼり、古墳時代から古代においては海浜部での土器製塙が盛行した。近現代にいたっては海水浴による観光業に力を入れていた。

昭和45年（1970）には美浜原子力発電所1号機が運転を開始し、以後、敦賀市、美浜町、旧大飯町、高浜町に計14基の原子力発電所が建設されたように、今日では電力事業が若狭地方の経済、産業の中心となった。東日本大震災以後、原子力発電所の発電停止により地域経済に暗い影を落としているが、一方で平成26年（2014）には舞鶴若狭自動車道が全線開通したこと、中京地域や京阪神地域から多くの観光客が若狭に訪れており、福井県立恐竜博物館をはじめ、福井県立の博物館や美術館でも入館者数が増加しているなど、文化財を活かした観光、地域づくりの取り組みが進められている。

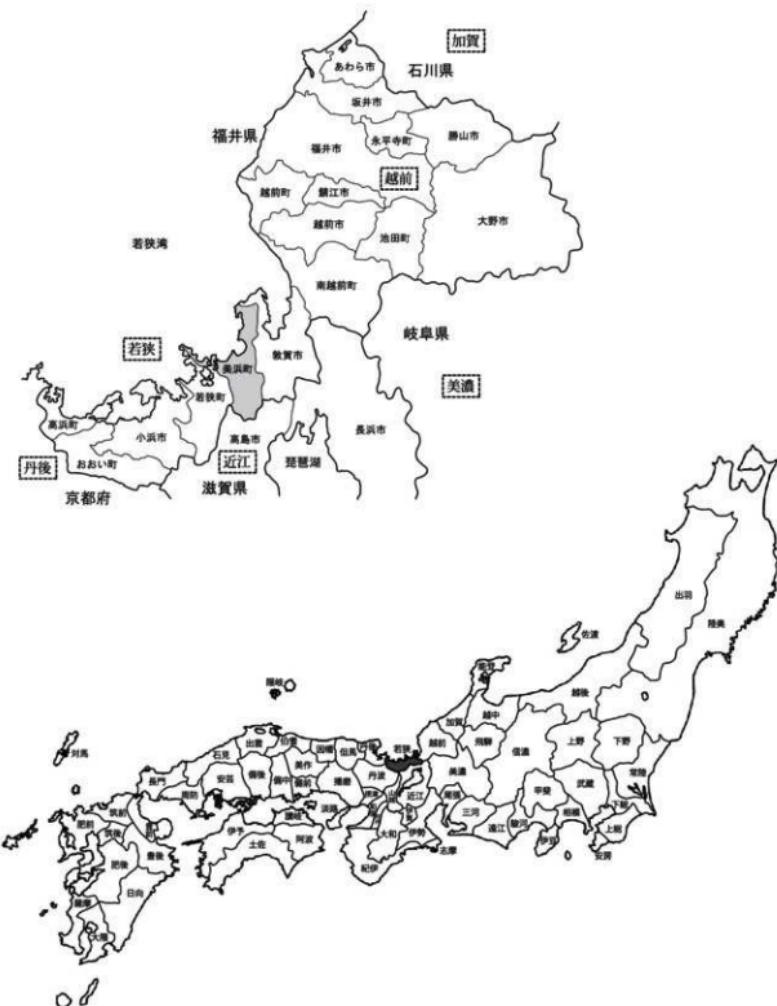
美浜町の規模は、南北約27km、東西約17km、町の面積は約152.32平方kmを測り、町域の東側を占める敦賀半島と、西側を占める常神半島が北に突き出るため、上空から見れば鶴が羽を伸ばした形を呈している。町域の北は日本海（若狭湾）を臨み、南は滋賀県高島市、東は敦賀市、西は若狭町と接している。

東側の敦賀市域は令制下には越前国の一帶にあり、若狭国に位置した美浜町域とは事実上の国境をなしたが、木の芽峠を境に嶺北、嶺南と区分している今日の行政域からみれば敦賀市は若狭地方の市町と同じく嶺南地域に属しており、例えば現在の美浜町に住む人々にとって敦賀市は通学、通勤を含む同一の生活圏であり、地理的な親近性も相まって現代まで密接な交流が続いた。美浜町の西側は若狭町のうち旧三方町域と接する。令制下以後、ともに若狭国三方郡に属した地域である。南側の高島市とは標高800m級の山地帯を挟むが、美浜町と接していた旧マキノ町と旧今津町の山間部には7世紀以後、大規模な製鉄遺跡が展開したことから、塩生産を行っていた若狭との密接な関係があったことが想定される。

美浜町の土地利用形態は、平成22年1月1日現在の統計で水田952.6ha、畑129.8ha、宅地265.8ha、山林4,236.0ha、原野87.0haである。統計上、町域の大部分を山林や丘陵地が占めるとおり、町の中央部の一部は急峻な野坂山地帯が広がり、町の東部、西部においても敦賀半島、常神半島の山間部が連なっている。市街地や農地などが広がる平野部は、町の中央域を北に貫流する耳川の中下流域、東部域の敦賀半島西岸の基部の付近、西部域の久々子湖周辺など、若狭湾に面する町域の北側に限定的

に見られるに留まる。美浜町の原始・古代遺跡が分布するのは、これらの平野部がほとんどであり、その中でも興道寺廃寺は美浜町で最も広い平野を占める耳川流域に所在する。

美浜町の人口は、昭和 29 年(1952)8 月 31 日に 14,826 人を数えたが、平成 28 年 3 月 1 日現在で 10,003 人(外国人含む)となっており、半世紀を経て大幅な人口減少を迎えている。



第 1 図 美浜町位置図



第2図 興道寺廃寺位置図〔国土地理院発行 数値地図 25000「鳥取」を元に作図〕

第2項 美浜町の地形・地質概況

美浜町の山地部の地質は、山地を構成する基盤岩類に丹波帯のジュラ系と、これに貫入する白亜紀から古第三紀の花崗岩類がある。丹波帯のジュラ系は、砂岩、泥岩などの陸源性細屑岩と、それより古い緑色岩、石灰岩、チャートなどの海洋性岩石類が混合、変形して形成されたと考えられている。美浜町では、主に山間部の新庄に分布する。

敦賀半島域と耳川左岸域には花崗岩類が主体的に分布している。敦賀半島域の花崗岩類は敦賀半島および敦賀市黒河川上流にも露頭する江若花崗岩で、耳川左岸域のものは雲谷山の周辺に露出する雲谷山花崗岩と飯切山に分布する久々子花崗岩である。雲谷山花崗岩は中粒の黒雲母花崗岩、白雲母花崗岩、両雲母花崗岩で、年代は約9千万年前（白亜紀後期）、また江若花崗岩は中粒から粗粒の黒雲母花崗岩で、約6千万年前（古第三紀）、雲谷山花崗岩はこれより新しいとされている。

一方、敦賀半島の基部の周辺、耳川右岸域、常神半島域ではわずかに花崗岩の分布が見られるのみで、総じて砂岩、チャートが多く分布している。耳川右岸上流部と常神半島基部から西の若狭町にかけては緑色岩の占める割合が高くなる。

美浜町の中央域では北に向かって耳川が直線的に流れる。耳川流域では、中流域の新庄村付近で高位河岸段丘が発達し、河道に沿ってこの段丘面が下流に向かって細長く延びている。標高約40mの美浜町野口付近から北に向かっては下流域となり、扇状地性の沖積地が標高約6mのあたりまで約0.9%の傾斜をもって標高が低くなる。一方で、野口から興道寺にかけての左岸の下流域には興道寺面と呼ばれる低位河岸段丘が、中流域の高位河岸段丘から連続する形で北に向けて細長く延びており、耳川に対して比高差5~10mの段丘崖を向けている。この低位河岸段丘の構成層は第四紀堆積物にあたる花崗岩、緑色岩などの砂礫層からなり、最上部に約29,000年前の広域テフラのAT（姶良TN火山灰）を挟んでいる。この段丘の年代は後期更新世の後半から完新世と考えられている。この低位段丘は郷市付近でラグーン（潟湖）状の低地面と交差して埋没し、洪水山まで至っている。

耳川下流域の右岸には御岳山から洪水山に向けて舌状に河岸段丘地形が分布していたものと考えられるが、基本的には埋没段丘であるため、現地形から把握しがたい。しかし、下流域では河川が両岸の低位河岸段丘に挟まれ、結果として完新世以降の河川氾濫はこの低位河岸段丘に遮られたことで限定的となり、耳川に沿って小規模な自然堤防、後背湿地、旧河道が分布するに留まっている。古い空中写真を見ると、かつては耳川旧河道の痕跡も多く見られたが、昭和期の土地改良事業によってその多くが消失している。



写真1 耳川流域空中写真（北から） 福井県埋蔵文化財調査センター提供

耳川河口部の左岸には2条の浜堤が食い違う形で南北に並列して位置するが、南側の浜堤には7世紀の土器製塙遺跡、松原遺跡が所在し、原始古代のこの浜堤背後には久々子湖と連続する湖沼性環境、すなわちラグーン（潟湖）が展開したものと考えられる。

美浜町の西部域には矢筈山北端の丘陵部から派生する気山層と呼ばれる中位段丘が久々子湖の東側にある。この段丘の構成層は、下部は粘性土、上部が礫層である。三方五湖や若狭湾に面して小規模の海岸段丘が分布するが、御岳山と天王山を隔てた美浜町の東部域には敦賀半島西岸の基部付近の佐田から菅浜にかけて礫層からなる低位海岸段丘が面的に広がっている。なお、耳川低位河岸段丘、町の西部域の中位段丘、同じく東部域の低位海岸段丘は、町域の平野部の中でも面的な広がりをもつ主要な段丘面であり、弥生時代後期以後、遺跡の展開を促し、各時代の遺跡を積層して現在の集落形成まで至るという特性がある。

敦賀半島西岸では海岸部に沿って砂洲、浜堤が形成され、後背湿地、ラグーンが発達した小沖積地が分布する。

第2節 興道寺廃寺周辺の地理的環境

第1項 興道寺廃寺の位置と周辺の地形

興道寺廃寺（福井県遺跡番号 30071）は福井県三方郡美浜町興道寺4号小字観音1番地ほかに所在する（第2図・写真2）。遺跡のおおよその中心は北緯 35 度 35 分 52 秒、東経 135 度 56 分 39 秒。

最寄りの鉄道駅から遺跡までの道程は、JR小浜線美浜駅から南に100mほど歩き、美浜駅前の「美浜駅」の交差点を左折して国道27号に合流する。左手に関西電力株式会社若狭支社、獅子塚古墳を見ながら220mほど東に進み、「役場口」の交差点を右折する。美浜町役場、美浜町生涯学習センターや美浜町保健福祉センターなどの町の公共施設を右手に見ながら町道金安線を800mほど南進すると、左前方に茶畠などからなる微高地と1軒の民家が見えてくる。信号がない里道との交差点を左折し、100mほど歩くと、興道寺廃寺が所在する畑地が南北に広がっており、1軒の住宅の向かいの土地の高まりが金堂基壇である。

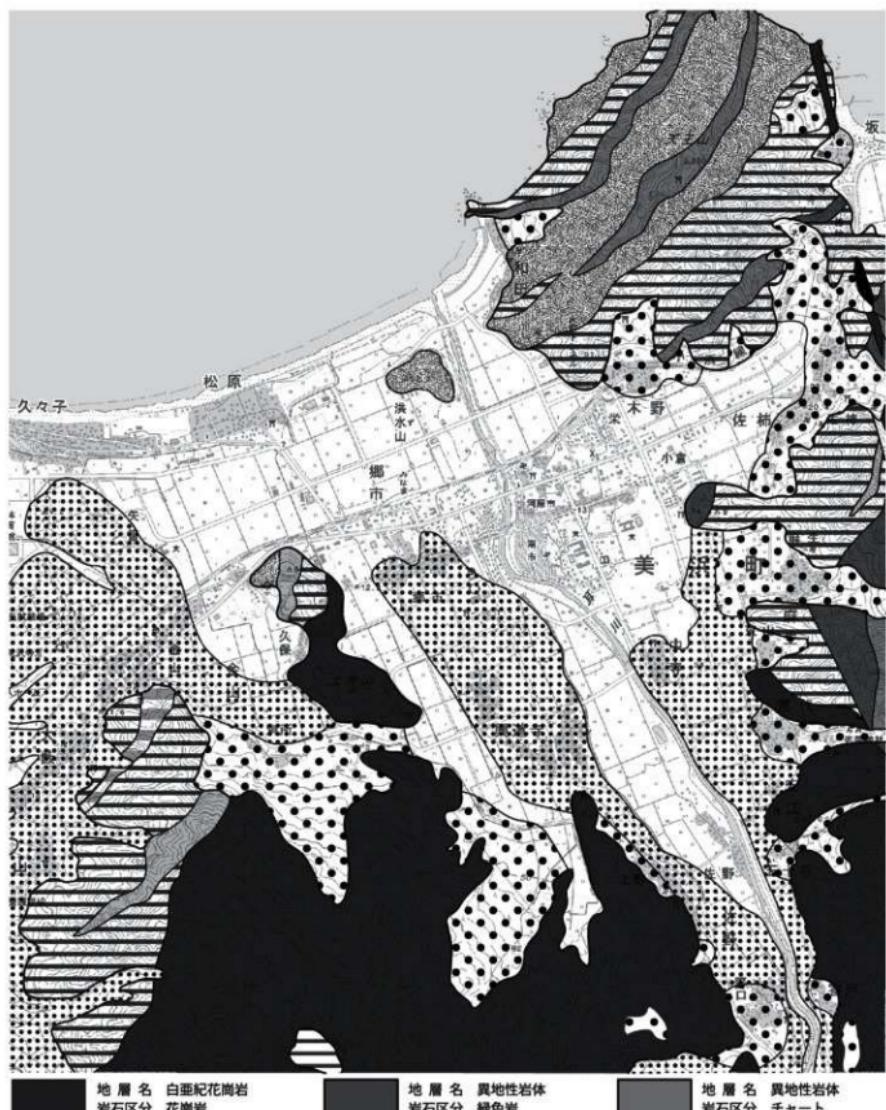
興道寺廃寺は耳川下流域の左岸に広がる低位河岸段丘のうち、標高約23~25m付近、東縁の微高地に立地する。前節で概述したが、この低位河岸段丘は美浜町野口の付近を起点として、下流に向けて雲谷山系の支尾根の東斜面に沿うように細長く延び、興道寺の日吉神社が所在する最北部の支尾根からさらに下流に向けて段丘面が東西にやや広がりをもつ。



写真2 興道寺廃寺周辺空中写真 [国土地理院 米軍撮影空中写真使用]



第3図 興道寺廃寺周辺地形分類図（縮尺 1/25,000）[国土地理院発行 数値地図 25000「鳥取」を元に作図]



地層名 白亜紀花崗岩
岩石区分 花崗岩

地層名 古屋層
岩石区分 貝岩

地層名 古屋層
岩石区分 メランジ

地層名 异地性岩体
岩石区分 緑色岩

地層名 古屋層
岩石区分 砂岩

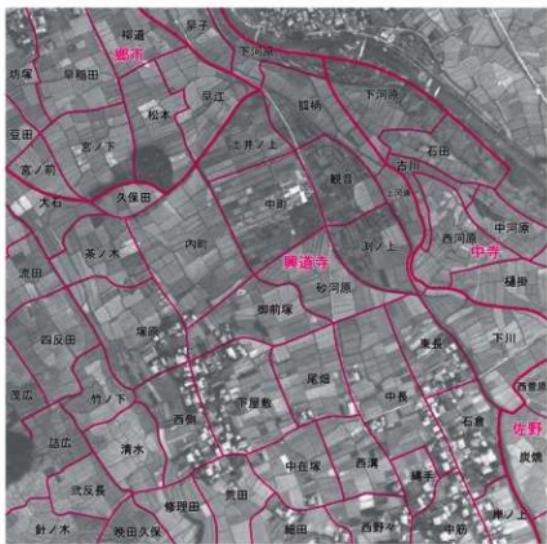
地層名 扇状地、崖錐堆積物
岩石区分 礁、砂、および泥

地層名 异地性岩体
岩石区分 チャート

地層名 古屋層
岩石区分 貝岩・砂岩互層

地層名 段丘、砂丘堆積物
岩石区分 礁、砂、および泥

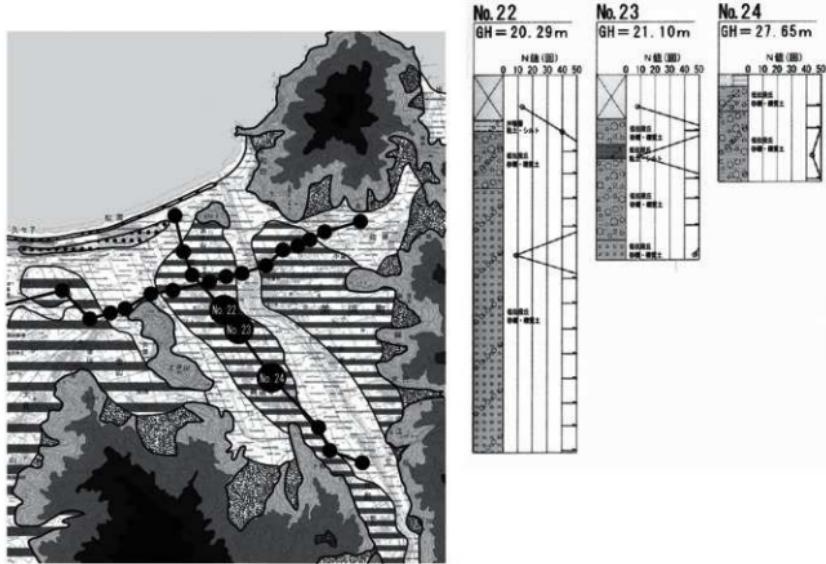
第4図 興道寺廃寺周辺地質分類図（縮尺1/25,000）（国土地理院発行 数値地図25000「鳥取」を元に作図）



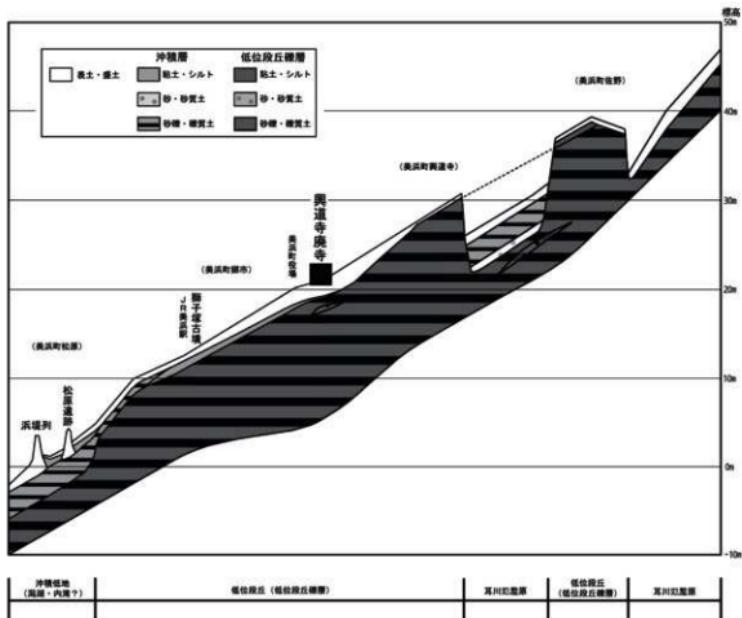
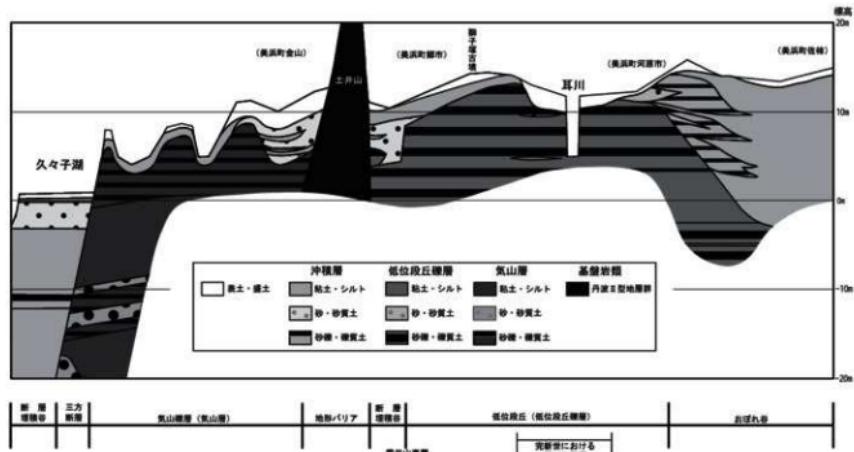
凡例

- ・米軍撮影空中写真を使用した。
- ・昭和50年代の土地改良時以前の小字図を参考に耳川左岸域の字名・字境を赤文字・赤線で示した。

写真3 興道寺魔寺周辺字境写真 (国土地理院 米軍撮影空中写真使用)



第5図 興道寺魔寺付近におけるボーリング調査の柱状図 [国土地理院発行 数値地図 25000 「鳥取」を元に作図]



第6図 興道寺廟寺周辺地形横断図

第4図は美浜町が実施した公共事業で得られたボーリング調査のデータをもとに作成した耳川流域の地質分類図である。断面図作成時にデータが得られたボーリング地点と興道寺廃寺付近でのボーリング調査の柱状図を示したもののが第5図であるが、柱状図No.22とNo.23が興道寺廃寺北側の美浜町役場付近、No.24が興道寺廃寺の南方のデータにあたる。巨視的にみれば、興道寺廃寺の周辺では河岸段丘の構成層にあたる砂礫層が分布し、安定地盤であったことが分かる。第6図は地形断面図で、東西方向の断面図は興道寺廃寺の北方、獅子塚古墳が所在する国道27号付近に沿ったものである。厳



凡例

- ・米軍撮影空中写真を使用した。
- ・耳川左岸域は、昭和50年代の土地改良時以前の小字図を参考に字名・字界を赤文字・赤線で示した。
- ・数字の凡例は以下のとおりである。
 - ①興道寺廃寺所在地
 - ②耳川(現河道)
 - ③低位河岸段丘に伴う段丘崖
 - ④河岸段丘上の低地帯
 - ⑤興道寺古墳群所在地(図中に古墳の箇所を○で示した)
 - ⑥伊牟移神社
 - ⑦耳川旧河道
 - ⑧明治時代の交通路
 - ⑨土地改良時の畑地削平箇所

写真4 興道寺廃寺周辺環境写真〔国土地理院 米軍撮影空中写真使用〕

密に興道寺廃寺付近の断面図を示すものではないが、獅子塚古墳は耳川下流域の中で標高の高位に立地しているように、興道寺廃寺も流域の中で高位に造営されたことがうかがえる。同図の南北方向の断面図に明らかなように、興道寺廃寺の立地は河岸段丘の砂礫層の直上にあり、北に向けて標高を減じる段丘の中でも比較的緩やかな地点に選地していることも理解できる。

写真3の空中写真是、美浜町興道寺付近を撮影したものに小字名と小字の字界を重ねたものである。写真4に遺跡周辺の特徴的な地形を示した。興道寺廃寺の位置が写真4-①、耳川の流れ（現河道）が写真4-②、左岸に広がる低位河岸段丘の範囲は写真4-③、段丘崖に挟まれた範囲である。段丘崖は白破線で示した。現在の興道寺集落が所在するあたりでは比較的安定した段丘面をもつが、段丘の中央部付近を自然流路が開析したようで、町道金安線付近、その中でも特に興道寺集落改善センターから美浜町役場をつなぐあたりが低地帯（写真4-④）となり、その東西が微高地状に安定した河岸段丘面が残る地形となっている。この東西の微高地のうち、東側の小字観音、測ノ上、中町、土井ノ上の付近に興道寺廃寺や6世紀以後の集落が、西側の小字御前塚、塚原、内町、茶ノ木、大石、宮ノ下の付近に興道寺古墳群（写真4-⑤）が立地し、小字松本、宮ノ下に式内社の伊牟移神社（写真4-⑥）が所在する。

興道寺廃寺が立地する地点を起点として東西に横断する形で微地形を見ると、まず興道寺廃寺が所在する興道寺小字測ノ上・観音付近に、現在の地表面の標高が約24~26mからなるまとまった微高地（段丘東縁微高地）が広がる。興道寺廃寺の東縁部は河岸段丘の東側段丘崖（写真4-③）と面し、標高差3mほどの崖下から現在の耳川河道面に向かっては耳川の扇状地性の沖積地が広がっているが、中寺小字古川・中河原に時期不明の旧河道の痕跡（写真4-⑦）が少なくとも昭和50年代前半の土地改良時までは遺存したようである。

一方、興道寺廃寺から西側にかけては興道寺小字中町・土井ノ上の付近で標高が緩やかに低下し、現在の町道金安線付近の興道寺小字中町・内町・御前塚の境界付近で段丘東縁微高地面から標高1mほどの比高差をもつ低地帯が南北方向に延びる。さらに西側、興道寺小字内町・塚原・茶ノ木・御前塚の付近で興道寺古墳群が立地する段丘西縁の微高地（段丘西縁微高地）と緩やかに続き、河岸段丘面西側の段丘崖を経て興道寺小字四段田・流田の付近で後背湿地の低地帯へと至る地形となっている。

第2項 興道寺廃寺の現況と土地利用の変遷

興道寺廃寺の現況は数軒の民家が建っているが、基本的には畑地である。巻頭図版1上段、写真図版1の写真是平成19年冬にそれぞれ興道寺廃寺の南方、真上の上空から撮影した遺跡の現況空中写真で、写真5は北方から撮影したものである。水田に囲まれ、寺院跡がそのまま畑地として残されている状況が確認できる。土地改良時に畑地の東縁と南縁が削平され（写真4-⑨）、水田へと姿を変えたことが写真2の米軍撮影写真との対比から分かる。

第7図、大日本帝国陸地測量部が明治26年測図、同28年に製版した地形測量図「三方」（縮尺1/20,000）を見ると、遺跡の周囲は水田で、一方で遺跡が所在する部分は空白となっているため、明治年間には遺跡の場所が畑地であったことがうかがえる。また、後の国道27号となる東西の基幹道路から南方へと向かう道路の一つが遺跡のすぐ西側を通過して興道寺の集落へと至ることが分かる。この南北道路は写真4にも明瞭に表れており（写真4-⑧）、こ



写真5 興道寺廃寺空中写真(北から)

の南北道路が古代までさかのぼる根拠は全くないが、耳川左岸下流域の基幹的な南北道路の一つであったことは遺跡の立地を考える上で興味深い。

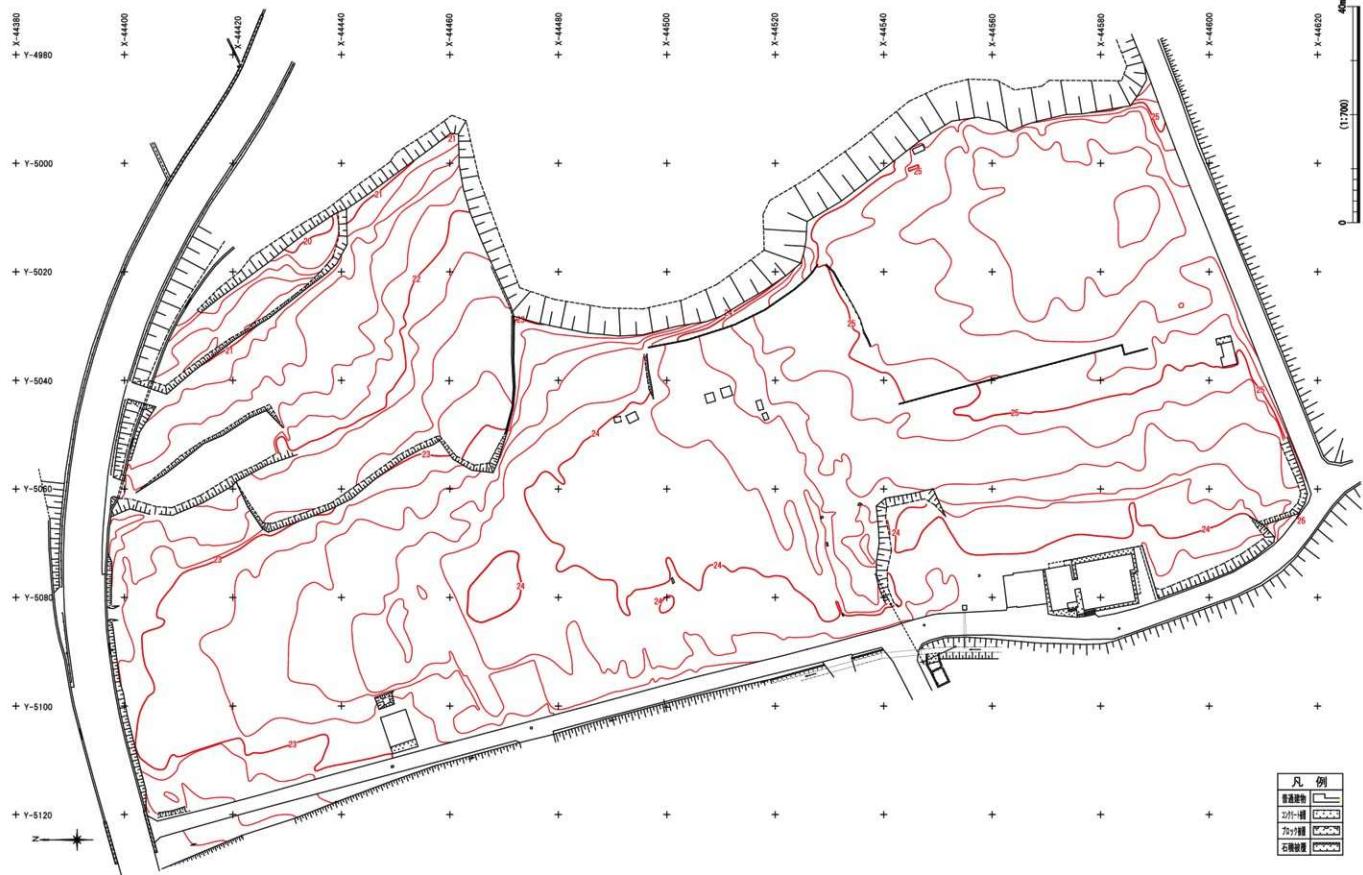
第8図は、美浜町税務課が保有する明治時代の興道寺の地籍図のうち、興道寺廃寺が所在する小字およびその周辺の小字の地籍図を合成し、縮尺をおよそ1千5百分の1に調製した上で、模式図として使用できるようトレースしたものである。この図からは水路、細い道、耕地の部分と畔の部分をだいたい読み取ることができる。興道寺廃寺が所在する小字観音、渕ノ上では、前述した南北方向の道路に付随して水路があり、地形からみて北に向かって流れている状況が分かる。また、ほぼ寺域と重複する部分の土地は広くなく、周囲と比べてまとまりを欠く。土地の形状も細長いものが多く、畔にあたる部分もかなり少ない。寺域を南北に大きく分断する形で東西方向の道が存在しているが、これは金堂基壇、塔基壇の南側に現在も残る幅1m程度の道にあたるものと考えられる。



第7図 興道寺廃寺周辺地形図（縮尺1/10,000）〔国土地理院 明治26年測図・同28年製版1/20,000地形図「三方」〕



第8図 興道寺周辺地籍図【明治期の地籍図を合成し、トレース】(縮尺約1/1,500)



第9図 聰道寺廃寺現況地形測量図（縮尺1/700）

この地図でみると、東西に長く通じる道となっているよう、この道が踏襲されて、遺跡から西側の道は幅員も広くなり、表面がアスファルト敷きの道路となっている。逆に、現在は残っていないが、寺城の東縁付近では段丘崖に沿って南北方向の水路が寺城の南側に通じていたようであり、また段丘崖下には比較的幅の広い旧河道が存在していたようである。これらに見るように、興道寺廃寺の寺城が所在した範囲においては土地の形状や大小にまとまりがなく、畔も少ないなど、周辺とは異なる明治以前の土地利用をうかがうことができる。

なお、興道寺廃寺の西側には、昭和初期の頃から福井県農事試験場（園芸試験場）があったことが知られていたが、写真2を見ると、現在は更地となっている場所に建物群が写り込んでおり、施設の一部であったことが分かる。逆に、遺跡西側の南北道路にT字形に合流する東西道路の交差点のところには現在、居住者がいない家屋が1軒建っているが、写真を見ると耕作地として写っているので、この家屋が建ったのは戦後の米軍撮影以後ということになる。

第9図は、平成19年冬に興道寺廃寺が所在する畠地を現況地形測量した際の測量図である。図中、畠地の南西あたりに道路に面して1軒の住宅が建つが、この建物の東側で中門基壇が確認されており、ここから北側に向かって伽藍があり、基壇の微起伏を反映した等高線の乱れが確認できる。これまで、標高24~25m付近に認められる地形の微起伏によって金堂や塔などの主要堂塔の建物基壇が遺存し、寺院が所在する可能性が漠然と指摘され、このあたりが寺院推定地として認識されてきたのが、一連の調査に着手する前の状況である。付近では畠地の境界として大石が配置され、また石積みされている状況も認められる。寺院の建物基壇の高まりが比較的地面に表出していると言えよう。なお、土地改良事業実施時に礎石状の大石が運び出されたことを伝え聞くが、詳細は不明である。

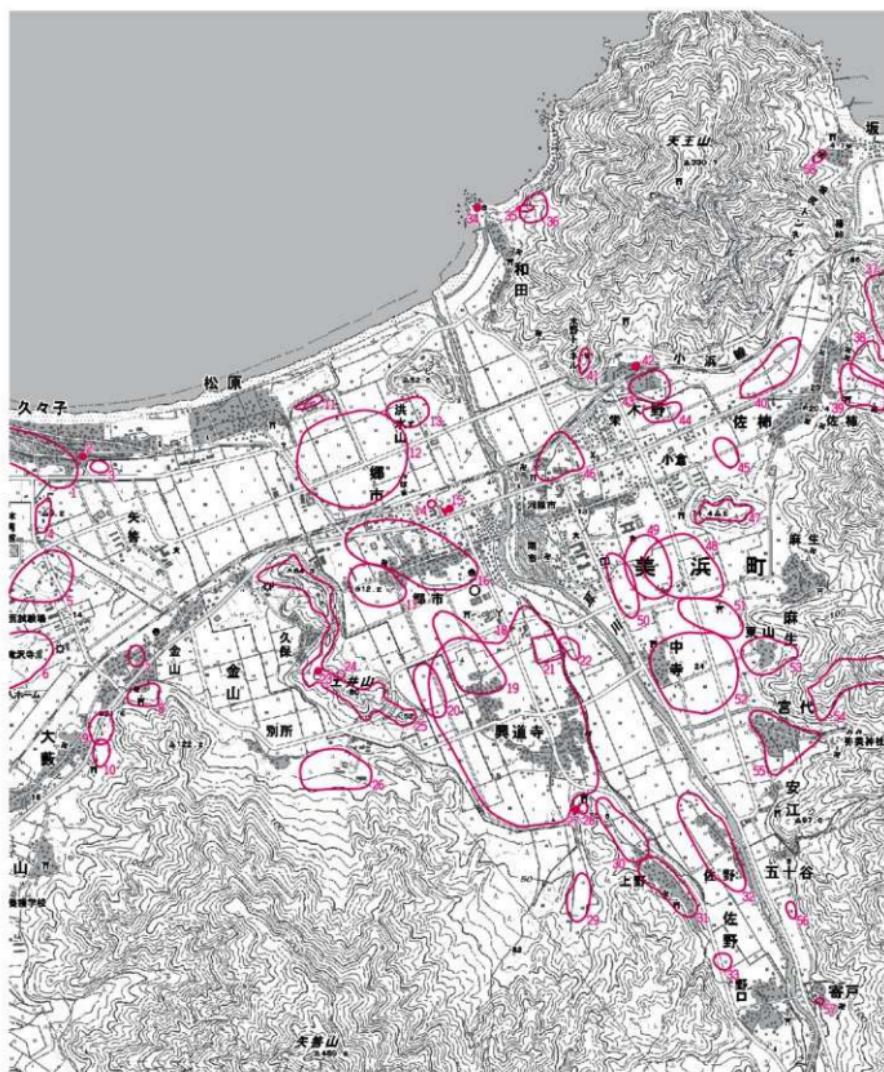
第3節 興道寺廃寺周辺の歴史的環境

第1項 興道寺廃寺周辺の遺跡分布

次項以後、興道寺廃寺が所在する耳川下流域を中心とした地域の遺跡分布、概要を通史的に述べる（第10図・第1表）。

前述のとおり、耳川下流域は河川の両岸に低位河岸段丘があり、その段丘に挟まれた扇状地などの低地帯に耳川の河川活動が制約されるため、遺跡の立地はこの段丘面、あるいは扇状地の中で旧河道に沿って島状、舌状に分布する自然堤防面に偏る傾向がある。特に弥生時代後期以後はこの傾向が顕著で、古墳時代後期から古代にかけては耳川の左岸低位段丘に主な遺跡が集中している。

特に律令期の集落遺跡に関する傾向としては、弥生時代、古墳時代から続く遺跡が多く、河岸段丘、あるいは自然堤防などの微高地といった安定基盤を選地した集落形成が進んだものと考えられる。発掘調査の事例が乏しく、どこまでの事実を示しているか心もとない現状もあるが、遺跡から採集される土器の年代を見ると、耳川下流域で古墳時代後期から奈良時代まで継続した集落が平安時代、さらに中世へと継続していくという消長のパターンと、古墳時代後期以後に廃絶していた集落が平安時代以後、再び集落形成されるというパターンとがあるようで、特に後者は耳川下流域の右岸に見られ、付近に式内の弥美神社、和爾部神社、木野神社が所在することが特徴でもある。



- 1 久々子遺跡 2 耳塚遺跡 3 野添遺跡 4 西堂林遺跡 5 口背添遺跡 6 電沢寺遺跡 7 岩遺跡 8 坊の谷遺跡 9 大殿古墳群 10 上田遺跡
 11 松原遺跡 12 煙市遺跡 13 洪水山前遺跡 14 良序古墳 15 麗子塚古墳 16 鹿ノ木遺跡 17 馬作遺跡 18 興道寺遺跡 19 興道寺古墳群
 20 西沢遺跡 21 興道寺発寺 22 鶴音遺跡 23 土井山古墳 24 南伊夜山遺跡(羽根出土地) 25 土井山砦跡 26 金山八幡神社跡 27 興道寺窯跡
 28 高遠古墳群 29 谷ノ口遺跡 30 高善庵遺跡 31 上野遺跡 32 鶴ノ下遺跡 33 西野遺跡 34 和田并天台壇跡 35 和田田壇跡 36 和田古墳群
 37 国吉城址 38 葉屋勝久居館跡 39 佐柿奉行所跡 40 佐柿流田遺跡 41 木野古墳群 42 木野神社古墳 43 木野遺跡 44 穴田遺跡
 45 斎田遺跡 46 葉屋ノ上遺跡 47 麻生軒跡 48 秋名古遺跡 49 麻生古墳群 50 鶴橋遺跡 51 末国遺跡 52 麻生流田遺跡 53 七反田遺跡
 54 宮代古墳跡 55 宮代古墳群 56 五十谷遺跡 57 寄戸遺跡 58 反尻遺跡

第10図 興道寺発寺周辺遺跡分布図(縮尺1/25,000)〔国土地理院発行 数値地図25000「鳥取」を元に作図〕

No	遺跡名	種別	時期						遺構・遺物	備考 (指定・現況・文献など)
			弥生	古墳	平安	鎌倉	室町	戦国		
1	久々子遺跡	製塙							須恵器、土師器、製塙土器	
2	耳塚遺跡	経塙							不明	消滅
3	野添遺跡	散布地							須恵器、土師器	
4	西堂林遺跡	散布地							須恵器、土師器、陶器	
5	口青湖遺跡	集落跡							堅穴住居址、土師器、砥石	一部が町史跡
6	竜沢寺遺跡	集落跡							堅穴住居址、土坑、小穴、土師器	
7	砦遺跡	散布地							陶器	
8	坊の谷遺跡	寺院跡							不明	
9	大森古墳群	古墳							風景製造物?	
10	上田遺跡	散布地							土師器	
11	松原遺跡	製塙							石焼炉・土器縁まり・配石帯 須恵器・土師器・製塙土器・土製模造品	一部消滅
12	郷市遺跡	散布地							須恵器・土師器	
13	洪水山前遺跡	散布地							須恵器・土師器・陶器	
14	長塚古墳	古墳							円墳(横穴式石室)・須恵器・石製紡錘車	消滅
15	獅子塚古墳	古墳							前方後円墳(横穴式石室)・須恵器・鉄器・玉・埴輪	
16	藤ノ木遺跡	集落							堅穴建物・溝・土坑・須恵器・土師器・製塙土器	
17	馬作遺跡	散布地							不明	
18	興道寺遺跡	集落							堅穴建物・掘立柱建物・土坑・溝 須恵器・土師器・製塙土器・鉄器	
19	興道寺古墳群	古墳群							円墳(横穴式石室)・須恵器・土師器・製塙土器・鉄器	十数基の内、2基現存
20	西沢遺跡	散布地							須恵器・土師器	
21	興道寺寺廟	寺院							基礎・堅穴建物・掘立柱建物・溝・土坑 須恵器・土師器・製塙土器・瓦・塑像・鉄器	
22	鏡音遺跡	散布地							須恵器・土師器・製塙土器	
23	土井山古墳	古墳							前方後円墳か	
24	南伊夜山遺跡	埋納地							六区段裝擗御門	消滅
25	土井山古墳	城郭							曲輪・堀切	一部消滅
26	金山八幡神社跡	寺院跡							不明	
27	興道寺窓跡	窓							須恵器窓・灰原・須恵器・埴輪・土鉢	
28	高達古墳群	古墳群							基礎・埴形・埋葬施設不明	
29	谷ノ口遺跡	散布地							須恵器・製塙土器・陶器	
30	高善庵遺跡	散布地							須恵器・土師器・瓦	
31	上野遺跡	散布地							須恵器・土師器・製塙土器	
32	殿ノ下遺跡	散布地							須恵器・土師器	
33	西野遺跡	散布地							須恵器・陶器	
34	和田牟天台跡	台場							石塁み	
35	和田台場跡	台場							土壘・台座	
36	和田古墳群	古墳群							横穴式石室	半壌
37	国吉城址	城郭							木束・曲輪群・伝二ノ丸(土壘・虎口・堀切) 土師器・陶器・石仏・墓石	一部が町史跡
38	要届久居館跡	城館							礎石建物・石垣・虎口・石組水路・陶磁器・土師器・鉄器	一部が町史跡
39	佐拂奉行所跡	城館							礎石・石垣・石組水路・敷石・土壘・瓦・土師器・陶磁器	
40	佐拂淀田遺跡	散布地							須恵器・製塙土器・陶器	
41	木野古墳群	古墳群							埴生状盛土	
42	木野神社古墳群	古墳群							円墳(横穴式石室)	
43	木野遺跡	散布地							須恵器・土師器・製塙土器・陶器・鉄器	
44	穴田遺跡	散布地							須恵器・土師器・陶器	
45	町田遺跡	散布地							土師器	
46	茶屋ノ上遺跡	散布地							須恵器・土師器・製塙土器	
47	麻生寺跡	城郭							不明	
48	秋名古遺跡	散布地							弥生土器・須恵器・土師器・製塙土器・陶器	
49	麻生古墳群	伝承地							不明	全壌
50	猿橋遺跡	不明							須恵器・土師器・陶器	
51	末木遺跡	散布地							須恵器・土師器・陶器	
52	麻生淀田遺跡	散布地							須恵器・土師器・陶器・土鉢	
53	七反田遺跡	散布地							須恵器・土師器・陶器・土鉢	
54	宮代寺跡	城郭							希少輪群・堅壠・土壘・虎口 五重塔・石仏・宝鏡印塔	
55	宮代遺跡	墓地							須恵器・土師器・陶器	
56	五十谷遺跡	散布地							須恵器・土師器	
57	寄戸遺跡	出土地							石劍	
58	板尻遺跡	散布地							不明	

第1表 興道寺寺廟周辺遺跡一覧

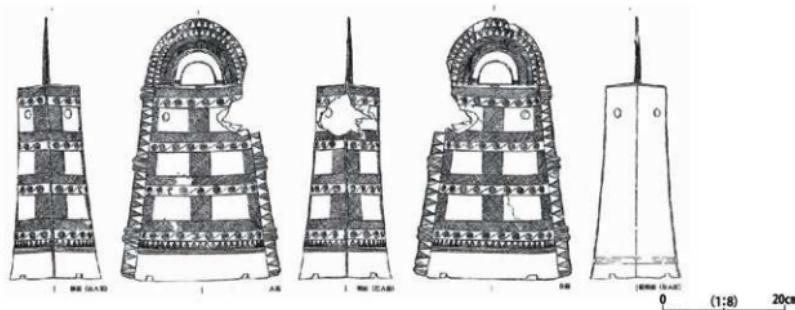
第2項 旧石器時代から古墳時代中期までの遺跡

旧石器時代、縄文時代の遺跡は、これまで確認されていない。若狭地方では旧石器時代の遺跡自体が確認されておらず、隣接の敦賀市では野坂山の一ノ巣(頂上付近)で茂呂型のナイフ形石器1点が採集されているのみであるので、周辺での旧石器時代の様相は全く不明である。縄文時代については、若狭町の鳥浜貝塚、ユリ遺跡や北寺遺跡、美浜町の浄土寺遺跡など、近くに湖沼や海浜を控える山麓から山裾にかけての地域に縄文集落が形成される傾向がある一方で、美浜町東部、敦賀半島西岸の基部に展開する海岸段丘に所在する下田遺跡では縄文時代後期末の土器が採集されており、美浜町西部、久々子湖を望む湖岸段丘に所在する竜沢寺遺跡では縄文時代に属する打製石斧、磨製石斧、敲き石、石製装飾品などが採集されているので、耳川流域において最も安定した河岸段丘をもつ興道寺廃寺周辺に縄文時代の遺跡が潜在している可能性もないわけではないが、その存在をうかがわせる痕跡は全く確認されていない。

弥生時代の遺跡は、南伊夜山遺跡(銅鐸出土地)(14)、寄戸遺跡(46)、興道寺遺跡(8)などがある。

海拔約30mの山麓に立地する南伊夜山遺跡からは總高42.6cmの扁平鋤式六区袈裟襟文銅鐸(第11図)が一口、不時発見された。弥生中期後半の所産で、緑青の進行や鋸の磨耗から銅鐸が横位に埋納されていたこと、鋤孔の擦れた痕跡や内面下部の突帯に舌が当たった痕跡がなく、いわゆる見る銅鐸であったこと、型式・文様構成から瀬戸内から南近畿の広範囲に分布する銅鐸と同グループに属し、製作地は瀬戸内地方東部にあった可能性が高く、香川県善通寺市出土多和神社銅鐸と類似すること、X線撮影によって鋤に鉄掛け(足掛かり穴)による修理痕が確認されたことなどが判明している〔福井県埋蔵文化財調査センター2005、仁科2009など〕。

南伊夜山出土銅鐸とほぼ同時期の所産と考えられるものに、寄戸遺跡から出土し、個人が所有するとされる石劍がある。全長19.1cmで、粘板岩質で両面に鏽が見られる。高浜町小和田や若狭町大鳥羽から出土の石劍、若狭町向笠や向山出土の銅鐸などを例に見るように、若狭地方では小河川の流域単位において銅鐸と、銅劍形石劍などの武器形青銅器模倣品が祭器としてセットで存在し、その具体的な使用方法は流域単位ごとに選択されていたという様相が指摘されており、南伊夜山出土銅鐸と寄戸出土石劍を用いた祭祀を執行した拠点集落が耳川中下流域に存在した可能性が指摘されている〔廣嶋1986など〕。



第11図 南伊夜山遺跡出土銅鐸実測図〔福井県埋蔵文化財調査センター2005〕

若狭地方では弥生時代中期まで低湿地地帯に集落が形成されることが多く、弥生時代後期以後に山裾などの微高地に集落が進出することが指摘されているので、丹後系の甕、壺、高杯、器台など弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土する興道寺遺跡の例〔福井県埋蔵文化財調査センター2003、山口1984など〕は後者の事例にあたり、前者にあたる集落は未発見であるが、国道27号以北の低地帯に弥生時代中期に伴う集落が存在する可能性も指摘されている〔美浜町教育委員会2004など〕。

それ以後、古墳時代前期から中期にかけての遺跡動向は不明で、興道寺遺跡で古墳時代中期の土師器壺・椀がわずかに出土するに留まる〔美浜町教育委員会2003〕。尾根上に5基の墳丘状の盛土が並ぶ木野古墳群(30)、尾根上に前方後円墳の墳丘状の盛土をもつ土井山古墳(13)が古墳時代前期・中期に伴う古墳の可能性がある。

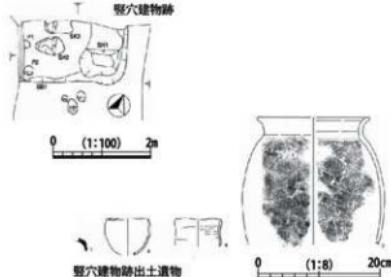
第3項 古墳時代後期の遺跡

興道寺遺跡、藤ノ木遺跡(6)、上野遺跡(20)、秋名古遺跡(37)などは古墳時代後期の集落遺跡である。

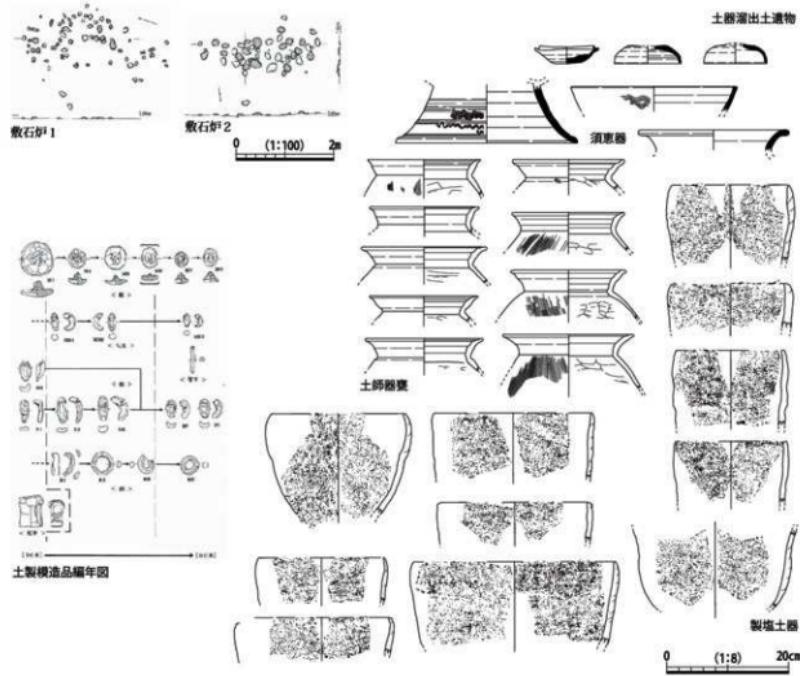
興道寺遺跡では、興道寺庵寺周辺からTK43～TK209型式並行期の竪穴建物跡2棟がこれまでに検出されていたが、平成19年度(2007)以後の興道寺庵寺の一連の調査の中で、6世紀前半、TK10～TK209型式並行期の掘立柱建物跡、竪穴建物跡を検出し、興道寺庵寺内外での検出数は掘立柱建物跡5棟、竪穴建物跡3棟に至った。藤ノ木遺跡は獅子塚古墳の南西に立地し、6世紀前葉、MT15～TK10型式並行期の竪穴建物跡1棟が断片的に検出され、須恵器杯蓋、甕、浜襦IIA式に類する製塩土器容器などが出土した〔美浜町教育委員会2003など〕。これらの集落は耳川下流域の在地小首長層であった獅子塚古墳の被葬者層に関わる集団の一集落と評価される。

耳川流域での土器製塩の開始は浜襦IIA式の並行期である5世紀後半から6世紀前半頃と考えられ、土器製塩遺跡自体は未発見であるが、内陸部の興道寺遺跡や藤ノ木遺跡(第12図)から浜襦IIA式に類する製塩土器が出土する。古墳時代後期の土器製塩遺跡として松原遺跡(1)などがある。松原遺跡は耳川左岸河口部の浜堤に立地し、敷石炉2基、土器窯3ヶ所9基、配石帯1基、土製模造品集中分布域などが検出され、土器窯から須恵器、土師器とともに器壁1cm前後の厚手の浜襦IIB式新段階に類する深碗丸底状の製塩土器容器が出土している(第13図)。7世紀前半、TK209～TK217型式並行期が主体の時期であり、8世紀前半まで続くものと考えられる〔網谷1995など〕。

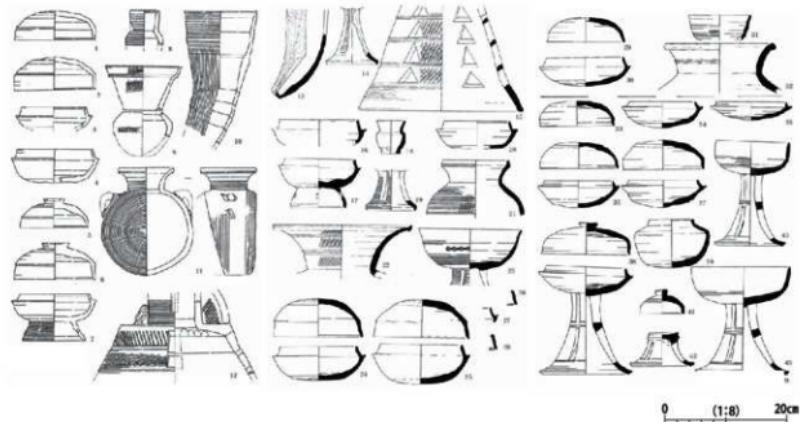
興道寺窯(16)は耳川流域唯一の古墳時代後期の須恵器窯である。地下式の窯窓1基が検出され、窯床面から7世紀前葉、TK209型式並行期の杯、杯蓋、高杯、短頸壺などが、灰原からMT15型式並行期以後の杯、杯蓋、高杯、甕、提瓶、短頸壺、器台、筒形器台、装飾付台付壺、角杯形須恵器、円筒埴輪、土錐などが出土した(第14図)。興道寺窯産須恵器・埴輪が獅子塚古墳や興道寺古墳群に供給されたことは、須恵器胎土の肉眼観察や蛍光エックス線分析によって指摘されている。6世紀前半に開窯し、7世紀前葉まで断続的に操業されたことが判明している〔美浜町教育委員会1978、入江2009など〕。



第12図 藤ノ木遺跡竪穴建物跡・出土遺物実測図



第13図 松原遺跡製塙炉・出土遺物実測図



第14図 興道寺窯出土須恵器実測図



第15図 獅子塚古墳填丘・石室・出土遺物実測図

古墳、古墳群として、獅子塚古墳（5）と、これを盟主墳とする群集墳の興道寺古墳群（9）がある。獅子塚古墳は全長 32.5m、後円部径約 17m、前方部幅約 15m、前方部が西面する前方後円墳で、周濠をもち、墳丘に円筒埴輪を備える。全長 6.0m、玄室長 4.5m、奥壁幅 2.5m、不整形な羽子板状の平面形態を呈し、北部九州に系譜をもつ横穴式石室を埋葬施設にもつ。石室内から MT15 型式並行期の須恵器杯、杯蓋、高杯、翫、蓋、台付子持壺、筒形器台、角杯形須恵器、装身具の勾玉・管玉・ガラス製小玉、工具の金鉗・鹿角装刀子・鉄斧、武器の鹿角装鉄劍・鉄鐵、武具の盛矢具、馬具の鉄地金銅張の剣菱形杏葉・梢円形鏡板、これ以外にも三環鈴、二条線引手、兵庫鎖、雲珠、鉸具、農具の曲刃鎌が出土した（第 15 図）。6 世紀前葉における耳川下流域の在地小首長墳であり、『古事記』開化天皇条に記述がある若狭耳別の祖とされる室毘古王を被葬者に充てる伝承がある〔入江 1986 a、入江 2009 など〕。

獅子塚古墳の北西に長塚古墳（4）など 7 基の古墳の存在が伝えられており、獅子塚古墳を盟主墳として南方の興道寺古墳群と同一の古墳群を形成していたものと考えられる。長塚古墳は横穴式石室を埋葬施設にもち、須恵器杯、高杯、堤瓶、翫、蓋、勾玉、滑石製紡錘車などが採集されている。6 世紀中葉から 7 世紀前葉、TK10～TK209 型式期の造営である〔入江 2009 など〕。

興道寺古墳群は 10 基以上からなる群集墳で、昭和 50 年代の土地改良事業で周溝を伴う墳底部や横穴式石室が複数基発見されており、また近年の発掘調査によって 6 世紀後葉、TK43 型式並行期の、周溝を伴う円墳 2 基と小石室を埋葬施設にもつ小円墳 1 基が検出された〔美浜町教育委員会 2002 など〕。竪穴式小石室の検出は土地改良時にもあったようで、これ以外にも箱型石棺の検出が伝わるなど、三方郡内の他の後期群集墳と比べて基數も多く、古墳の構成にも特色がある。古墳群出土採集とされる須恵器などの伝世品は多く、3 号墳には MT15 型式並行期の装飾付台付壺の出土が伝わるなど、古墳群内に獅子塚古墳と同時期の古墳が存在した可能性も残る。また、出土須恵器は在地の興道寺窯産のみでなく、陶邑窯跡群産、あるいは尾張地方産のものと考えられるものも混在する。須恵器の年代から 6 世紀前葉から 7 世紀前葉、MT15～TK209 型式並行期の古墳造営が考えられる〔入江 2009〕。興道寺古墳群は農耕地開発が可能な平野部に墓域を占め、古墳群に円筒埴輪が伴うなど太興寺古墳群（小浜市）と共に通し、後に付近に白鳳寺院が建立されるなど地域の中心として古代に継続することが特徴である。

古墳時代後期の祭祀遺跡として松原遺跡がある。7 世紀前葉、TK209 型式並行期に土器製塩の場に転用される以前、海上を前面に臨む浜堤上で土製模造品による継続的な祭祀が行われている。土製模造品の分布は、製塩土器が出土した土器溜と一部重複し、その下層から鏡、管玉、勾玉、船、鉋、容器、短甲という 7 器種総数 148 点が出土した。土師器類の年代から 5 世紀後半、TK23 型式並行期に在地小首長である獅子塚古墳被葬者層の管掌下で祭祀が開始され、その背景として開始期の模造品の組成が鏡・船・短甲であることから、軍事的行動を伴う海上活動に関わる祭祀として始まり、土器製塩開始直前の 6 世紀末葉には旧来の地域首長権の表象としての伝統的祭祀を放棄することになったものと評価されている〔網谷 2009 b など〕。

古墳時代後期、6、7 世紀の耳川下流域、特に左岸段丘域においては、集落形成、土器製塩や須恵器生産などの生産部門の掌握、海上祭祀の執行、古墳造営など、流域を支配領域とした在地小首長層の動態の痕跡が色濃く残っており、後の白鳳寺院、興道寺廃寺（11）建立の素地は既に養われていたものと理解できる。

第4項 奈良・平安時代の遺跡

興道寺廃寺周辺の律令期の集落遺跡として、興道寺遺跡、上野遺跡（20）、秋名古遺跡（37）などがある。

興道寺遺跡では興道寺廃寺の北方から北西方にかけて8世紀前半を主体とする堅穴建物跡、掘立柱建物跡などが検出され、須恵器・土師器の食膳具・煮炊具、製塩土器、鉄釘や鉄製紡錘車などの鉄器、繩羽口や鉄滓などの鍛冶関連遺物などが出土する。興道寺廃寺の北方にあり、寺院附属集落としての性格が想定されてきたが、特に土井ノ上1区、中ノ丁1区の調査地では、堅穴建物や土坑などに伴って、海岸部から離れた内陸地にしては特異な製塩土器の出土量があり、塙（製塩土器）の移動という問題のみでなく、焼き塩生産の様相、集落の性格を考える上でも、重要な遺跡である。また、土井ノ上1区では、堅穴建物と掘立柱建物が組となり、建物小群を構成することが特徴で、若狭地方でも数少ない畿内産（系）土師器の出土遺跡としても注目される（松葉2009）。

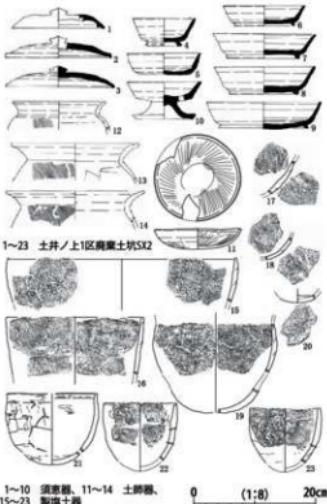
上野遺跡は8～9世紀の須恵器、土師器、製塩土器が採集され、秋名古遺跡は8世紀中葉の須恵器、9～10世紀の須恵器、土師器などが採集されている。秋名古遺跡では蛇行する旧河川も確認されており、近くから須恵器が出土するなど、付近の微高地に集落が立地する可能性が高い。



写真6 興道寺遺跡土井ノ上1区空中写真



写真7 興道寺遺跡中ノ丁1区堅穴建物跡SB1



第16図 興道寺遺跡土井ノ上1区
廃棄土坑SX2 出土器実測図

第5項 耳川下流域の条里復元

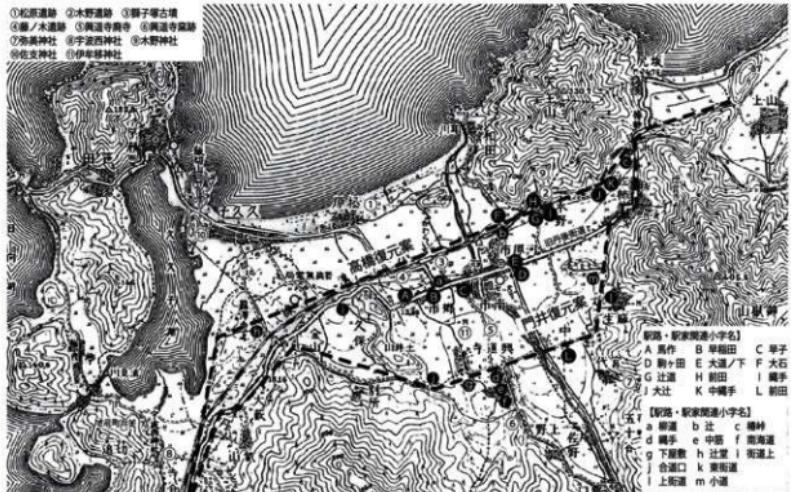
耳川下流域の条里復元は『福井県史』の絵図・地図編に詳しい〔田中・大森 1992、田中 1992〕。耳川下流域の条里地割は、北 20 度西の方位を基本として美浜町木野から官代にかけての沖積地や、東山、麻生、中寺、佐柿などの微高地や自然堤防などの右岸に約 55 町と比較的よく遺存している。

左岸では郷市から松原にかけての低位河岸段丘末端から浜堤背後のラグーンにかけて約 60 町の地割が残っているが、古代のどの段階にラグーンなどの低地帯を水田として整備したものか、検討の余地がある。

第6項 耳川流域の交通路

古代の交通関係施設として弥美駅家がある。弥美駅家は『延喜式』、『和名類聚抄』に記載が見られ、『延喜式』兵部式 81 北陸道条駅伝馬条には、「若狭国駅馬〈弥美。濃飯各五疋。〉」とある。駅名が示すとおり耳川下流域を占める三方郡弥美郷に所在が考えられている。これまで、特に歴史地理学研究の立場から郷市の「馬作」「早子」、河原市の「大道ノ下」「駒ヶ田」など駅、駅路をイメージさせる小字地名が遺存することを根拠に美浜町郷市、河原市の付近に駅の所在が想定され、旧丹後街道、あるいは国道 27 号の付近に駅路復元がされてきた〔真柄 1978〕。

しかし、耳川流域の駅路復元に関して、近年、高橋美久二氏によって新たな見解が示され、小字図や古地図を基に耳川下流域の条里地割を復元し、その基軸と考えられる東西線を駅路に想定した。すなわち佐柿の椿峰から木野の南、そして土井山の北端に沿って西進し、久々子湖東岸の段丘の切り通しを抜けたのち、久々子湖に沿って南々西に折れて宇波西神社の前へと至るラインを古代の駅路に想定したものである。この場合、駅路が耳川流域を何の障害もなく東西に突き抜けることができ、目的地を最短距離で結ぶ直線道であったという駅路の実態と合っている。美浜町木野の近くに計画道路の痕跡と思われる「大石」「綱手」「辻」などの小字が残ることもこの説を強めている〔高橋 2000、松葉 2009 など〕。



第17図 耳川流域における駅路復元図 〔『福井県史』条里編収録図を元に作図〕

その後、門井直哉氏は高橋説の駅路が耳川下流域の中でも地形的に低湿地域、ラグーン付近を通過しなければならないこと、ロケーション的に興道寺廃寺背後を駅路が通過することになることに考慮し、あるいは美浜町興道寺に見られる「縄手」「南街道」「東街道」「前田」など駅路に關係する小字地名に注目して、高橋説よりさらに南方に東西に延びる地方主要道として駅路の可能性を指摘した。弥美駅の所在について、高橋説に立った場合、駅路復元線に面する2つの律令期遺跡が弥美駅の候補となる。藤ノ木遺跡は9世紀の須恵器杯が採集され、木野遺跡は式内木野神社に近接し、8世紀の須恵器、製塙土器、鉄塊が採集されている。門井氏は、駅田からの転訛地名としての「前田」という小字が所在する美浜町中寺付近の微高地に弥美駅の所在を推定し、自身の駅路説の可能性を強めている〔美浜町教育委員会 2011〕。

耳川流域を南北に延びる交通路に関して言えば、白鳳寺院の興道寺廃寺、式内の弥美神社や伊牟移神社などの所在を考えれば、南方の近江へと向かう道、つまり江戸期に粟柄越えと呼ばれた美浜町新庄から近江（旧マキノ町）へと山間部を抜けていく南北の道が存在した可能性は高い。また、8世紀以後、若狭国の主要な津として繁栄したとされる氣山津が三方郡家推定地の城縄手遺跡の東方約2km付近に位置するものと考えられており、若狭湾から久々子湖を経由して氣山津に至る水上ルートの存在も想定されるなど、多様な地域交通の実態が考えられる〔美浜町教育委員会 2006、松葉 2009など〕。

第7項 中世の遺跡

興道寺廃寺や興道寺古墳群で13世紀の遺構、遺物が断片的に確認されている。13世紀代の掘立柱建物跡2棟、土坑、小穴、旧河道に沿う柱列が検出され、柱穴から土師器皿4枚が積み重なって出土するなど、建物廃棄に伴う地鎮痕跡も確認されている。掘立柱建物の周辺や古墳の周溝内、興道寺廃寺寺域内の溝から越前焼の甕や土師器皿・甕・鍋などが出土するなど、興道寺古墳群、興道寺廃寺などの古代遺跡は埋没し、集落形成を促したものと推測される〔美浜町教育委員会 2002など〕。

第4節 興道寺廃寺における既往の調査研究

第1項 大正年間から昭和年間の中頃までの調査研究

興道寺廃寺における既往の調査研究に関しては、平成19年(2007)3月に発行した『美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(以後、『2007年報告』という。) 第2章第2節で概述したが、遺漏点、新知見を含めて本節に再度、整理する。興道寺廃寺に関する調査研究を振り返ると、いくつかの時期に整理できる。

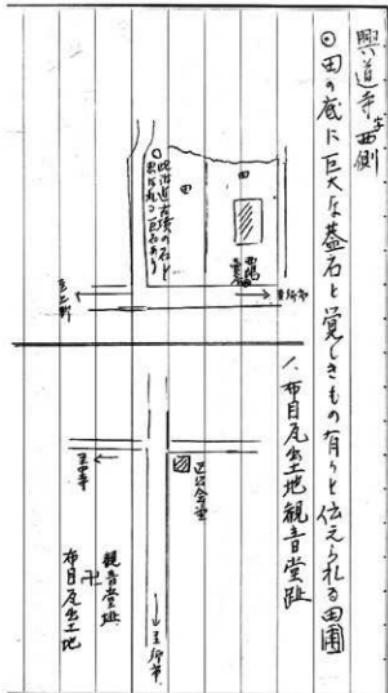
継続的に古代瓦が採集され、興道寺廃寺の存在が内外に周知された時期である。

昭和初期、興道寺廃寺の西側で行われた福井県園芸試験場(福井県農事試験場)建設に伴い、四面に布目が残る瓦片が多く出土し、初めて遺跡の存在が明らかとなった。興道寺廃寺に関する調査研究の初見は、昭和8年(1933)、上田三平氏が『越前及若狭地方の史蹟』後篇、「三 廃寺跡 若狭地方の古瓦及礎石」の項において、「三方郡耳川沿岸の興道寺地籍の觀音畠と稱する地域には多數の古瓦を出土し蓮華紋のものも發見されて居る。其一個は十瓣にて瓣間に契状凸起を挿み中房に蓮子九個を有し、一般に原料は粘質過多、紋様は鈍重、著しく地方色を帶びたものである。」と「觀音畠」からの瓦片の出土を紹介し、素弁十葉蓮華文軒丸瓦の写真を掲載しながら簡単な資料報告を行つたことであろう〔上田 1974〕。

これ以前の報告としては、『耳村誌（稿）』に記述がある。長く未刊のまま今日まで残されてきた書籍で、「第三章 大字誌」、興道寺の項には「（前略）。名称の興道寺の事今は全く微すべきものなし。口碑に云、往古小字観音の地に廣堂観音堂あり、靈験殊に著しくして衆庶の信仰厚く、門前自ら市を成したりしが、平安朝の頃、朝廷の帰依に由りて京都に移されたり。今の西国三十三所の札所の一なる革堂観音はなり。村名も此に起ると。革堂は京都にありて行願寺と称す。寛弘元年、革上人の創立なり。上人は鎮西の人、其靈像は上人が加茂の靈木にて刻する所なり。されば此地の伝説は誤なるべし。但し此地に仏刹の存したるは事実なるべし。今尚同小字附近の土中より瓦の破片、大なる礎石等を発見する事あり。（附近の小字に中町、内町、御前塚、塚原、下屋敷等あり。）此地中古時代にありては、天台四王殿の領地たり。詳くは第六章沿革参照すべし。（中略）。明治四十四年四月、河原市より興道寺に至る里道、水害の為めに破損せしを以て、之を変更して興道寺より郷市に達する村道を設けたり。該工事中小字観音の近接地小字狐塚の地より刀剣の破片等を発掘せり。是古墳なりしなるべし。（後略）」とある。

この記述に従えば、由来、來歴についても誤りであることを暗に認めながらも、瓦の出土例を根拠に古代寺院の存在を記している。ただし、「第五章」の記述が全く見られないことは、古代寺院が確実に存在するというよりも口碑として存在する可能性を示したく留まつたようである。本稿の例言は大正12年4月に耳村役場が記しており、記述にあたっては地元から提出された原稿によることが記されているので、これよりさほど遠くない以前の興道寺廢寺に対する地元での認識をうがうことができよう。ちなみに、遺跡の西側を南北に延びる町道の敷設時期がこの頃であることも知ることができる。なお、この『耳村誌（稿）』は平成26年（2014）3月31日に美浜文化叢書刊行会から『美浜文化叢書9 耳村誌』として復刻出版されている。

昭和33年（1958）、興道寺8号中町26番地から出土の素弁九葉蓮華文軒丸瓦が美浜町教育委員会で保管されている。このように継続的な古瓦の出土採集があったにも関わらず、昭和38年（1963）発行の『福井県遺跡台帳目録』を確認すると、美浜町所在遺跡として10か所が数え挙げられているが、興道寺廢寺にあたる遺跡は掲載されていない。しかし、昭和39年（1964）4月発行の『美浜町文化財調査台帳』には、「観音堂址（布目瓦出土地）」の所在地がメモ書きされている（第18図）、地元の愛好家、郷土史家の間では古代寺院遺跡としての存在が認識されていたものと考えられる。



第18図 昭和39年4月発行『美浜町文化財調査台帳』

古跡名勝附墳墓の章では古代寺院遺跡としての記述が全く見られないことは、古代寺院が確実に存在するというよりも口碑として存在する可能性を示したく留まつたようである。本稿の例言は大正12年4月に耳村役場が記しており、記述にあたっては地元から提出された原稿によることが記されているので、これよりさほど遠くない以前の興道寺廢寺に対する地元での認識をうがうことができよう。ちなみに、遺跡の西側を南北に延びる町道の敷設時期がこの頃であることも知ることができる。なお、この『耳村誌（稿）』は平成26年（2014）3月31日に美浜文化叢書刊行会から『美浜文化叢書9 耳村誌』として復刻出版されている。

No. 17

埋蔵文化財包蔵地調査カード

都県名 群馬県

種別	史跡	名称	生駒市日向	参照地図	
所在地	三方市・郡美浜町	町村大学	西条寺小学	観音寺大同	
地目	山林・畠・水田・宅地・墓地	土地所有者	国有	公有	民有
包 藏 地 の 概 要	御市より近道寺部落に右方台地にし 近世郷水とし小川と流れし大正頃開墾 第3次試験場を運んだ多くの布目瓦出土す 近年此の近辺ナン出土せし瓦百々写真 付シテリ			出土	現地で出土する
				品	
				の	
				有	
				無	所蔵(保管)箇所
包蔵地の価値	きわめて重要	比較的重要	普通		発掘の必要性
文	なし				
解					
備考					
調査年月日	昭和 年 月 日	調査者	班長		班員

第19図 昭和54年4月発行の『美浜町文化財調査台帳』

第2項 昭和40年代から平成年間初期までの調査研究

学会に興道寺廃寺の存在が発信されたのは、昭和45年(1970)、『飛鳥白鳳の古瓦』に古瓦関係遺跡の地名表の一覧に「興道寺」の名称が収録されたことによる〔奈良国立博物館編 1970〕。地元では美浜町文化財保護委員会の委員職にあった武田久二氏が興道寺廃寺での古瓦採集を精力的に進め、昭和51年(1976)、地城誌に遺跡の概要を紹介した〔武田 1976〕。この報告には、興道寺廃寺出土瓦が美浜原子力発電所PRセンターに展示されていた瓦があり、それは昭和初期に旧三方町三方在住の館熊吉氏が美浜町興道寺の西小学校(西分校のことか)に奉職中に興道寺廃寺で採集したものであること、その瓦は瓦当面が完形である素弁九葉蓮華文軒丸瓦2点である可能性が高いことが記されている。ただし、この瓦の所在は不明である。なお、武田久二氏が採集し、所蔵されてきた資料の一部は福井県立歴史博物館に永く寄託されていたが、武田久二氏がお亡くなりになられた翌年の平成22年(2010)にご令息の武田豊氏のご厚意によって、その寄託資料とご自宅で所蔵されていた興道寺廃寺採集資料を一括して美浜町教育委員会に寄贈いただいた。

武田久二氏らによる遺跡の周知化、公開に伴い、昭和54年(1974)4月発行の『美浜町文化財調査台帳』(埋蔵文化財包蔵地カード)には、興道寺廃寺のことを記載したと思われる頁(史跡布目瓦と記載されている)には、概要として「郷市より興道寺部落にかけては右方台地にして近世郷水とし小川と流れし大正の頃、県農事試験場を建てし頃、多くの布目瓦出土す近年此の近辺より出土せし瓦あり(以下、判読不能)」と記されており(第19図)、また文化庁が昭和55年(1980)に発行した『全国遺跡地図 福井県』によれば、「福井15」の地図に35 観音寺廃寺跡、種別が寺院跡、所在地は美浜町興道寺観音畠として収録されている。この遺跡地図の凡例には、昭和49・50年度(1974・1975)

写真8 福井県教育委員会実施試掘調査（西から）
福井県立若狭歴史博物館提供

写真9 福井県教育委員会実施試掘調査（南から）
福井県立若狭歴史博物館提供

に福井県教育委員会が実施した分布調査をもとに作成されたことが記されているので、この頃には古代寺院としての周知が広く図られたものと推察され、結果として昭和50年代前半の土地改良事業から遺跡を守ることにつながったものと考えられる。

興道寺廃寺で初めて掘削を伴う発掘調査が実施され、またそれまでの出土採集瓦に対していろいろな研究が進められたのは土地改良（圃場整備）事業が町内各所で始められた昭和50年代以後、平成8年頃までの約20年間の時期である。

昭和52年(1977)、興道寺廃寺周辺の土地改良事業に伴い、福井県教育委員会による試掘調査が実施された。興道寺廃寺における初めての掘削調査である。調査時の写真記録を確認すると、過去に軒丸瓦が出土した美浜町興道寺8号中町26番地の西側と北側で部分的なトレント調査が実施されたよう、軒瓦を含む多量の瓦片が出土し、基壇の一部と思われる地面の高まりが確認されたとのことで寺院遺構が良好に遺存する可能性が指摘されたという伝聞も伝わっているが、それ以上の詳細は不明である。後述するとおり、この時に出土した瓦は福井県立若狭歴史民俗資料館と美浜町教育委員会が所蔵している。

その後、幸いなことに土地改良事業が興道寺廃寺の中核部まで及ぶことなく、遺跡の大部分が茶や野菜の畑地としてそのまま残されたことから近年まで目立った開発事業が及ぶことなく、遺跡をほぼ現状のまま伝えている。

ただし、興道寺廃寺が立地する微高地では過去、中学校、病院などの建設候補地となつたことも伝え聞くが、遺跡に観音という小字地名が残り、郷土史研究者らを中心に観音畠（廃寺）と呼ばれ、比較的早くから古代寺院の存在が認識されてきたこと、あるいはおそらく行政内の当時の文化財保護担当者および内外の文化財保護関係者の手によって保護のための協議や措置が図られたことなどで、結果として開発計画が浮上しながらも遺跡の現状保存を促してきたと言えよう。

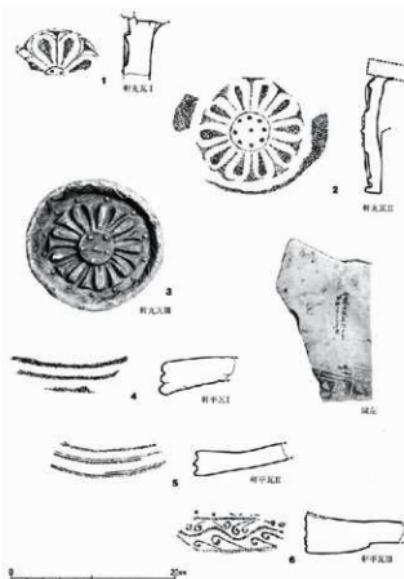
福井県教育委員会が平成5年(1993)に発行した『福井県遺跡地図 平成4年度』では、46図の地図に遺跡番号30071 観音畠廃寺、種別 寺院跡、所在地 興道寺・観音、現況 畑地、出土遺物 軒丸瓦として掲載されているが、基本的には『全国遺跡地図 福井県』に収録された内容を踏襲した内容となっている。ちなみに、『全国遺跡地図 福井県』では興道寺廃寺の所在が誤って収録されていたが、『福井県遺跡地図 平成4年度』においても誤りが修正されなかった。昭和52年に福井県教育委員会が興道寺廃寺において試掘調査を実施していることを考えると、この時に遺跡所在地の誤りが修正されていない点は残念である。

興道寺廃寺出土瓦に関する基本的研究として、軒瓦を資料紹介し、軒丸瓦、軒平瓦とともに3型式に分類の上、それぞれの対応関係と年代観を示した水野和雄氏の研究が挙げられる〔水野 1987〕。瓦の帰属年代から7世紀第3四半期の建立、7世紀第4四半期までの存続という寺院の消長に踏み込んだ

もので、瓦の年代観については修正が必要な部分もあるが、型式分類に関しては興道寺廃寺の調査所見を勘案しても妥当な内容を備えている。

水野氏のこの研究は『北陸の古代寺院』に収録されたもので、北陸の古代寺院研究者などが行ったシンポジウムの内容を成文化して書籍として出版されたものである。この書籍には、北陸地方における古代寺院出土瓦の胎土分析を行った三辻利一氏らの論考も収録されており、おそらくは採集品を対象としたものであろうが興道寺廃寺出土瓦の胎土分析のデータ、属性の分布図などが基礎データとして掲載されている。

遺跡の概要に関するとして、大森宏氏によつて『福井県史』に興道寺廃寺が紹介されている〔大森 1992〕。



第20図 水野和雄氏資料紹介軒瓦実測図〔水野 1987〕

第3項 興道寺廃寺を取り巻く近年の調査研究

美浜町、美浜町教育委員会が平成18年(2006)2月に開催した歴史シンポジウム「興道寺廃寺の謎に迫る」、同じく美浜町教育委員会がその翌週に開催した歴史シンポジウム「興道寺遺跡の謎に迫る」では、内外の学識者を招聘し、興道寺廃寺第7次調査までの成果や興道寺廃寺北方の律令期集落の調査内容を踏まえ、耳川流域に留まらず、三方郡、あるいは若狭国全体に関する古代寺院、古代集落、土器製塩、官衙など若狭地方の古代社会全般に関する問題にまで波及した多角的な報告、議論が行われた。特に興道寺廃寺に関して言えば、初めて内外に遺跡の周知が大規模に行われるとともに、それまでの調査を総括し、遺跡に対しての価値づけが行われる場となった〔美浜町教育委員会 2006、美浜町教育委員会 2009〕。翌年、平成19年(2007)1月には興道寺廃寺第8次調査出土の古代銭貨をテーマに歴史シンポジウム「古代銭貨の謎に迫る」を開催するなど、興道寺廃寺を活用した調査研究、普及啓発の実施の兆しが見え始めた。

出土瓦に関する個別具体的な研究として、以下のものがある。

佐々木志穂氏らは興道寺遺跡から出土した丸瓦・平瓦を製作技法、焼成の諸属性を検討し、興道寺廃寺の軒瓦と丸・平瓦との対応関係の一例を提示した〔福井県埋蔵文化財調査センター2003〕。

興道寺廃寺出土軒瓦のうち、最古型式となる軒瓦I型式は従前から指摘があるように山田寺式の範疇にある資料である〔水野 1987、中原 2005、美浜町教育委員会 2006〕。滋賀県、湖東・湖北地域における山田寺式軒瓦の導入と展開を明らかにした北村圭弘氏は、湖東地域の山田寺式軒丸瓦は百濟大寺を祖型とし、7世紀第3四半期に曲線顎の重弧文軒平瓦を伴って摂津・四天王寺から近江・竹ヶ鼻廢

寺に創建瓦としてもたらされ、7世紀後半に竹ヶ鼻廃寺から三大寺廃寺などに、さらに7世紀末葉には大東遺跡や新庄馬場遺跡、8世紀初頭には八島廃寺などへと、湖東周辺の古代寺院・瓦窯に拡散したことを示したが、その中で、三大寺廃寺の創建瓦をモデルとして7世紀末頃に湖東地域に拡散した軒丸瓦と、興道寺廃寺出土の山田寺式軒丸瓦が酷似することは、竹ヶ鼻廃寺を起点に拡散した湖東地域の山田寺式軒丸瓦がさらに北上し、一方では興道寺廃寺の創建瓦として、一方で深草廃寺の補修用瓦としてほぼ同時期に導入されたことを示した〔北村 2007〕。

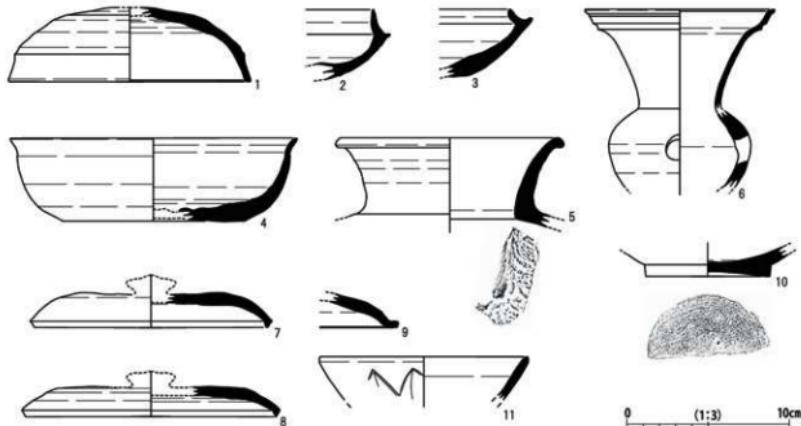
松葉は『2007年報告』において第8次調査までの出土瓦の制作技法などを検討し、水野和雄氏による軒瓦の分類を基本として丸・平瓦の対応関係、それぞれの年代観を示し、以前に佐々木氏が示した対応関係を概ね追認した〔美浜町教育委員会 2007〕。また、小林裕季氏と松葉は『2007年報告』に際して、興道寺廃寺出土丸瓦・平瓦の製作技法を概観し、軒瓦の3つの型式に対しての並行関係を提示し、それぞれの型式に伴う凸面の叩き目を明らかにした〔美浜町教育委員会 2007〕。

大脇潔氏は、瓦当を丸瓦四面の広端付近にはめ込むことで作られる軒丸瓦の分布と系譜を検討する中で、その1事例として興道寺廃寺出土軒丸瓦第II型式を取り上げた〔大脇 2007〕。

その他、興道寺廃寺に関する総論的な記述に関しては、『美浜町誌』における芝田寿朗氏の記述がある〔芝田 2005〕。

第4項 興道寺廃寺出土・採集瓦の資料紹介

美浜町教育委員会が所有、保管する興道寺廃寺出土・採集瓦として、昭和52年度に福井県教育委員会が実施した試掘調査で出土した資料、大正年間から昭和年間にかけて個人が採集し、美浜町教育委員会に寄贈したと考えられる資料、美浜町教育委員会が所蔵している採集資料がある。これ以外に、福井県立歴史博物館、敦賀郷土資料館などでも興道寺廃寺出土瓦が展示、収蔵されている。未公表の興道寺廃寺出土瓦を資料紹介し、周知を進め、活用を図ることも今回の総括報告書に課せられた使命であるので、本項で資料紹介を行う。



第21図 福井県教育委員会試掘調査出土土器実測図

第 21～27 図は、福井県教育委員会の試掘調査で出土した土器、瓦である。福井県立若狭歴史博物館に収蔵されているものでコンテナ 6 箱程度あり、三重孤文軒平瓦 1 点（第 22 図 13）を含む多量の丸瓦、平瓦、土器などがコンテナに密に詰め込まれた状態で保存されている。これ以外に、美浜町教育委員会で所蔵している瓦が 20 数点ある。もともとは上記の試掘調査時に一括して出土した資料であり、おそらく当時は福井県立若狭歴史民俗資料館で一括して収蔵されてきた資料と考えられる。どのような経緯で今日、美浜町教育委員会が一部の資料を所蔵することになったのかはっきりしないが、試掘調査当時、美浜町教育委員会は美浜町中央公民館内にあり（この施設は現在存在しない）、公民館内の一室に展示ケースに入れて町内出土の考古資料が陳列されていたことから、当時、福井県立若狭歴史民俗資料館に勤務され、美浜町ご出身の森川昌和氏のご配慮によって軒瓦を中心とした見栄えがする資料が美浜町で展示公開され、そのまま継続的に美浜町が所蔵することとなったという経緯を考えられる。ただし、当時の資料の貸し借りに関する行政文書が保存されていないため、このことも推測の域を出ない。

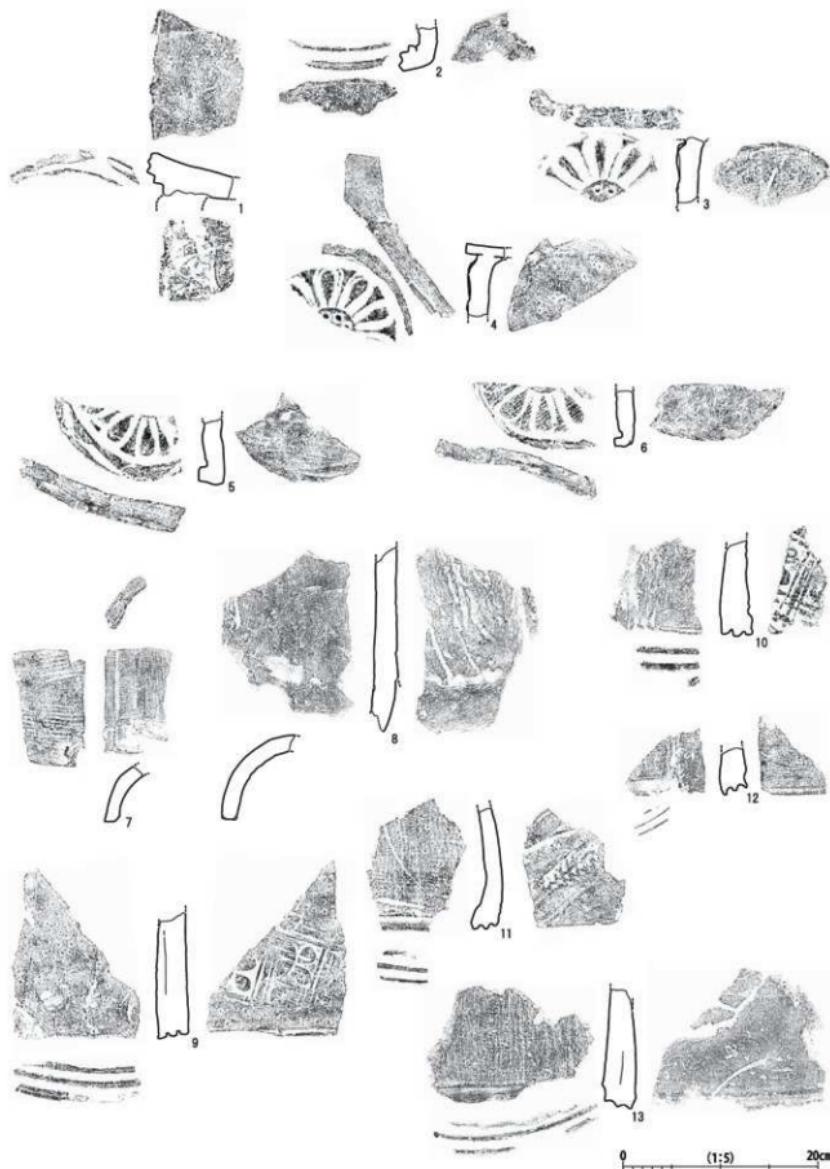
いずれにしても、両機関において試掘調査時出土資料を収蔵する状態であっても、現在において、ほとんどの資料が展示公開に供されることなく保管されている状況であるので、以下、軒瓦については網羅的に、丸瓦、平瓦、土器については大ぶりな資料、特徴的な資料を抽出して図化し、紹介する。

土器は古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての須恵器、土師器、製塙土器がほとんどである。須恵器は杯類が、土師器は甕類が多い。製塙土器は薄手で、從来の製塙土器編年で言うところの浜禪 II A 式と呼称されるものが一定量みられ、内陸地からの浜禪 II A 式製塙土器出土例として興道寺魔寺（観音畑）が挙げられている根拠資料となっている。第 21 図に出土土器の一部を報告。1 から 6 の須恵器の杯蓋、杯、甕、甕が古墳時代後期、6 世紀後半以後に伴うもので、7～9 の 8 世紀に伴う須恵器杯蓋、10 の底部にヘラ切りを伴う平高台をもつ皿も見られる。11 は青磁碗で、外面に蓮弁文が見られる。施釉され、深緑色を呈する。13 世紀前後の所産と考えられる。興道寺魔寺からは綠釉陶器の出土が報告されているが、出土資料を見る限りこれ以外に該当する土器はないので、青磁碗が綠釉陶器と誤認されたものと考えられる。

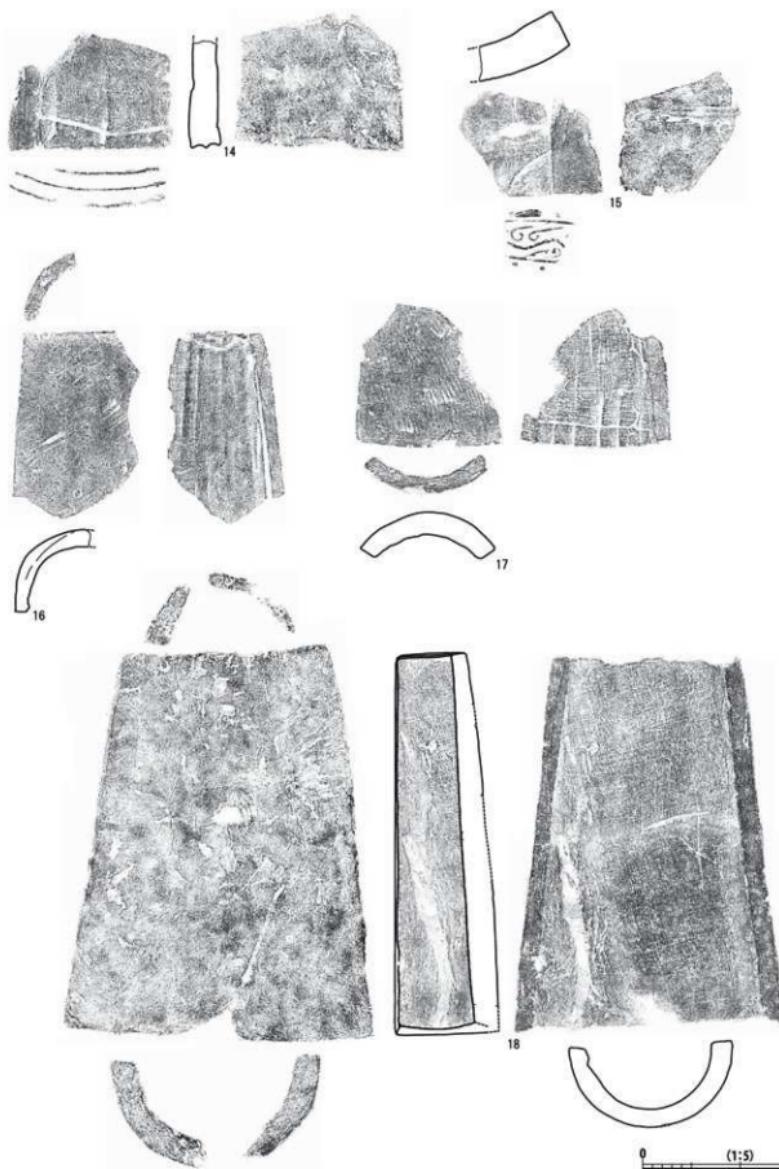
軒瓦は 16 点。軒丸瓦、軒平瓦とともに 8 点ずつが出土している。軒丸瓦は興道寺魔寺における I 型式と II 型式がみられる。單弁八葉蓮華文軒丸瓦は三重圓線が廻る瓦当外縁がある。素弁十葉蓮華文軒丸瓦は 4 点あり、いずれも瓦当で、縦じて薄く作る。第 22 図 6 は瓦当面に糸切り痕を残す。同図 8 は瓦当面が剥離した丸瓦部。軒平瓦は I、II、III、全ての型式がみられる。I 型式は凸面の広端付近に花弁叩きを施す三重孤文の瓦当、II 型式は孤線を鋭く作る三重孤文の瓦当、III 形式は瓦当が偏行唐草文である。

無段式丸瓦 1 点、有段式丸瓦 1 点、平瓦 16 点、隅落とし平瓦 1 点、熨斗瓦 1 点を報告。丸瓦、平瓦とともに、これまでの瓦分類の範疇に収まるが、興道寺魔寺では最も古い時期にあたる凸面に平行叩きを施す丸瓦の凹面には横骨痕を伴う傾向があることを新たに確認するとともに、丸瓦を加工したもの（第 23 図 17）、隅落とし平瓦（第 26 図 32）、熨斗瓦（同図 33）の凸面には平行叩きを残すことから、道具瓦は寺院造営初期に用いられている可能性が高いことが確認できる。

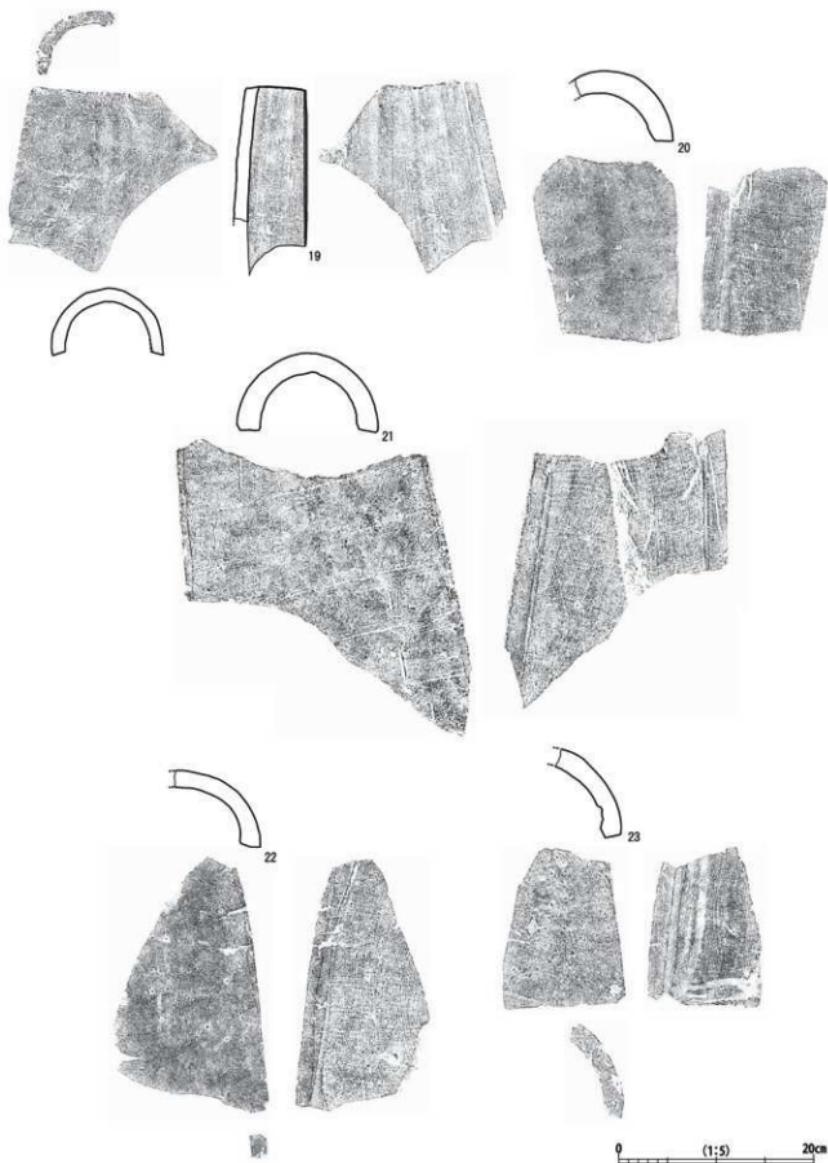
第 28～30 図は、美浜町教育委員会が所蔵する寄贈資料で、大正年間から昭和年間の中頃までに出土したと考えられる瓦である。昭和 30 年代の墨書きがある瓦のほとんどは、武田久二氏が所蔵した資料と考えられる。これ以外にも昭和 3 年の墨書きがあるものもあり、継続的な出土採集瓦の寄贈があつたようである。



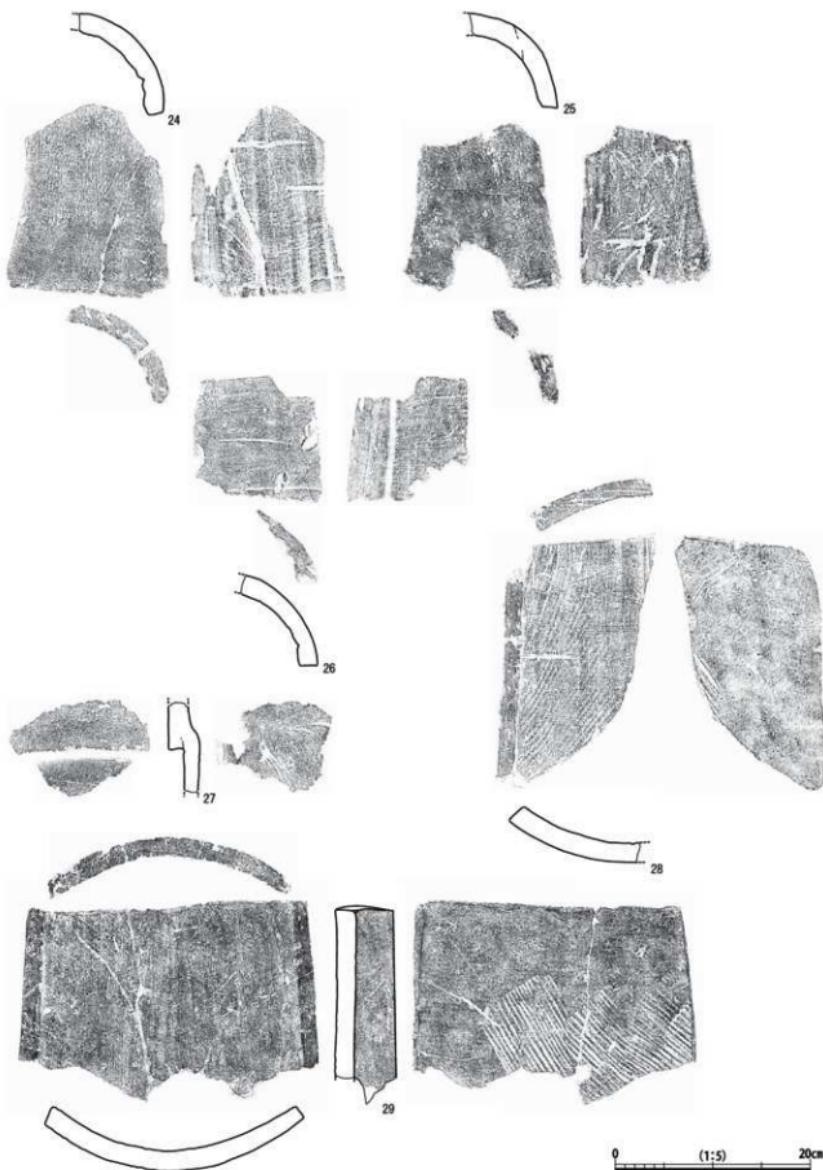
第22図 福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(1)



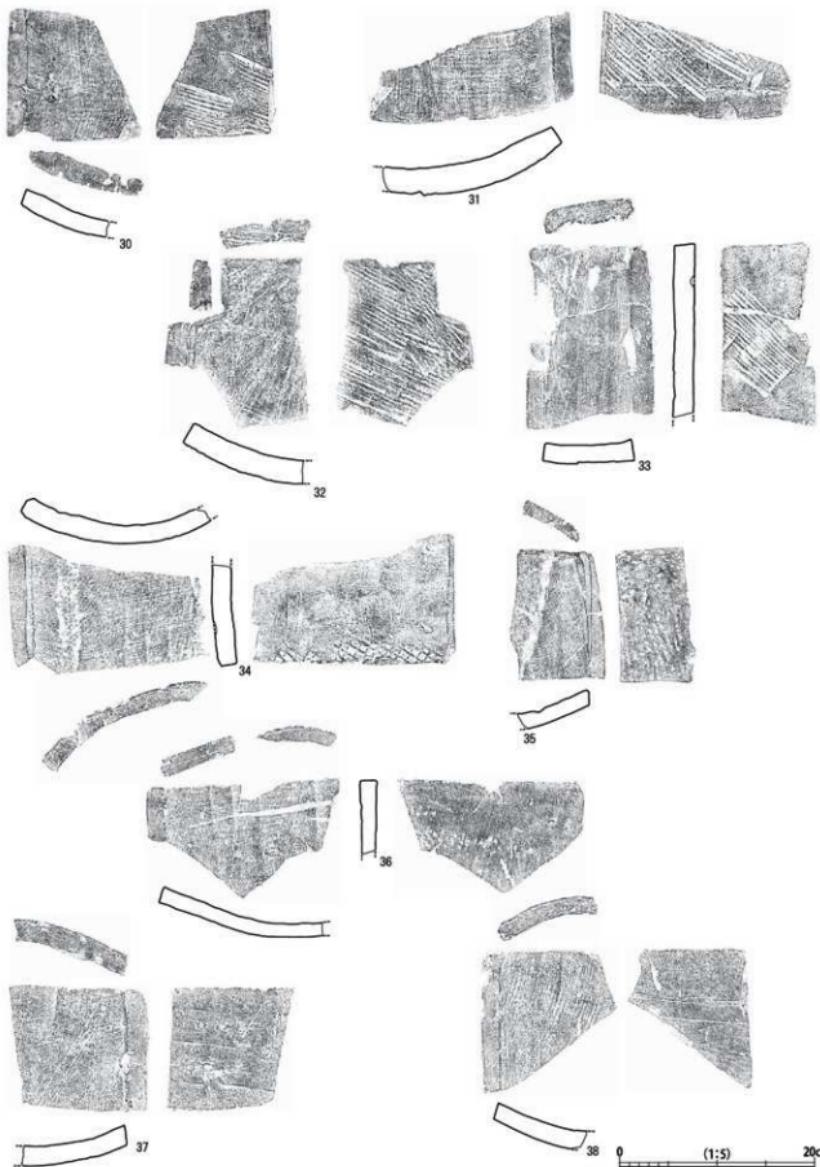
第23図 福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(2)



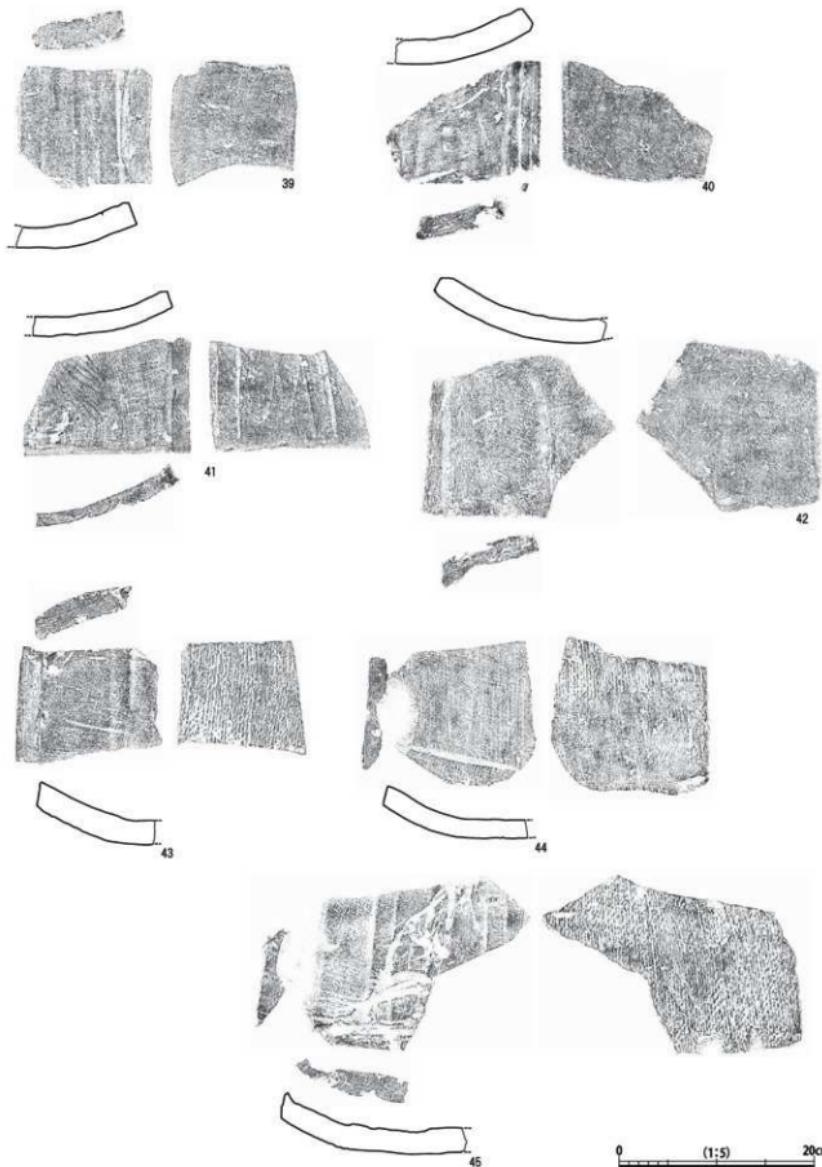
第24図 福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(3)



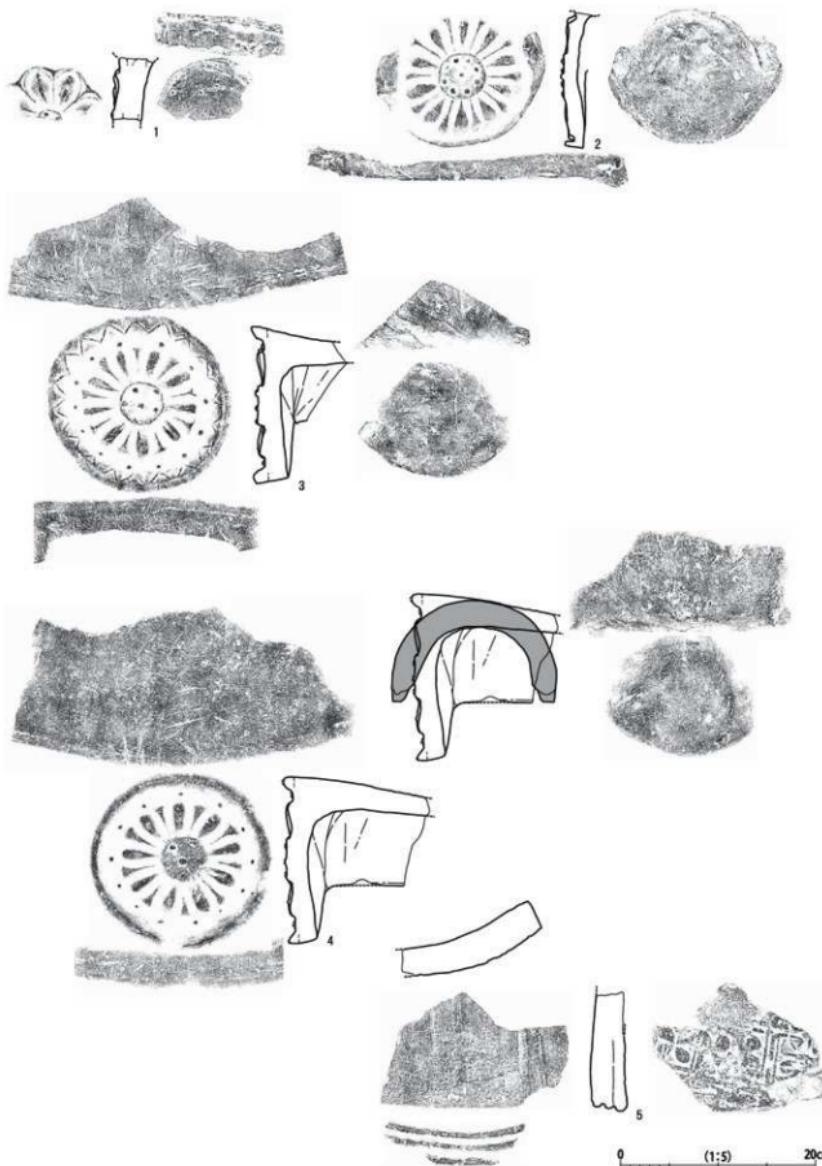
第25図 福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(4)



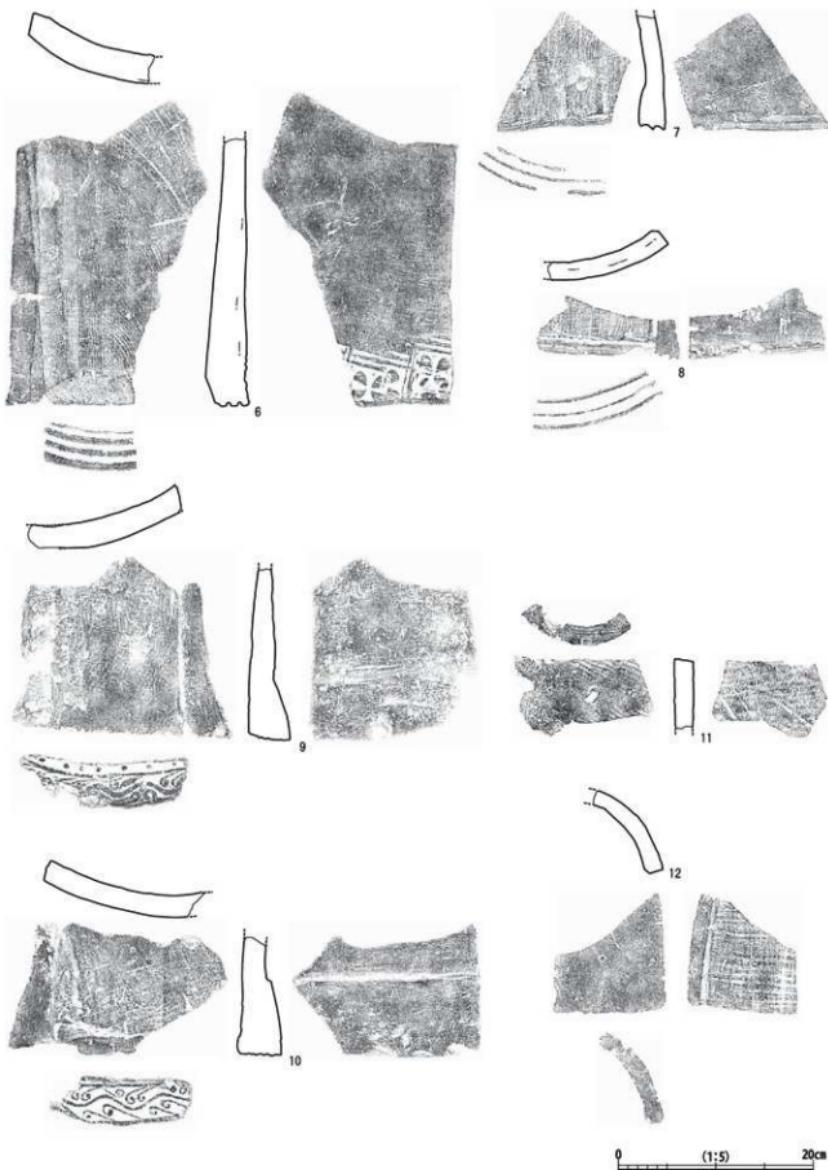
第26図 福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(5)



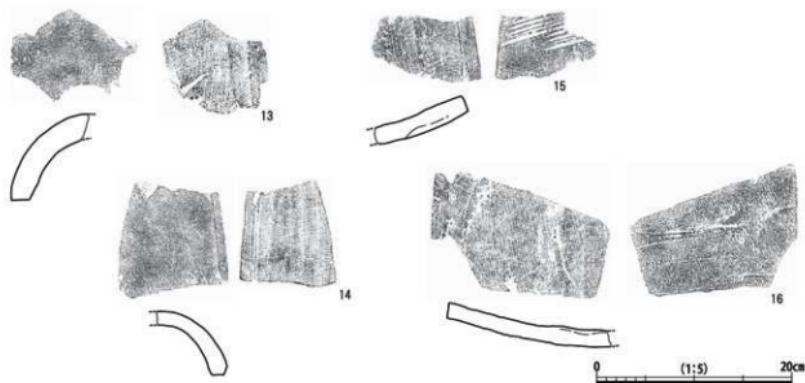
第27図 福井県教育委員会試掘調査出土瓦実測図(6)



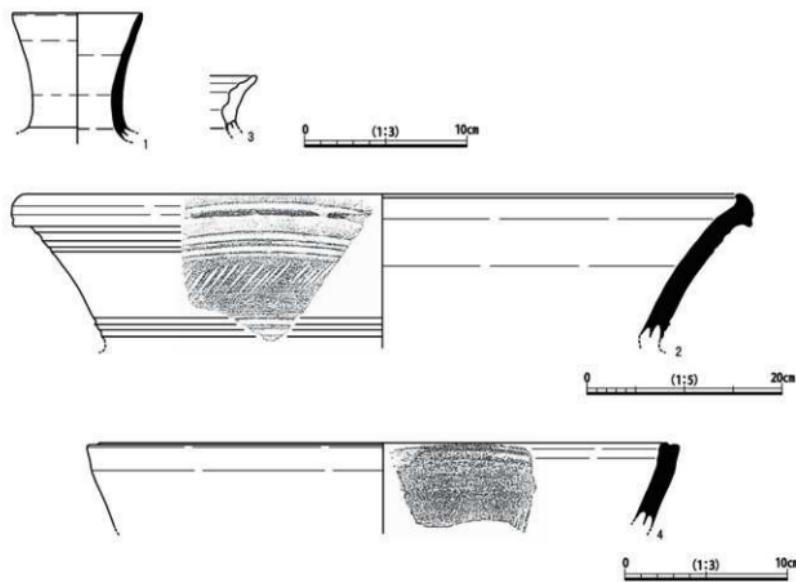
第28図 個人採集瓦実測図(1)



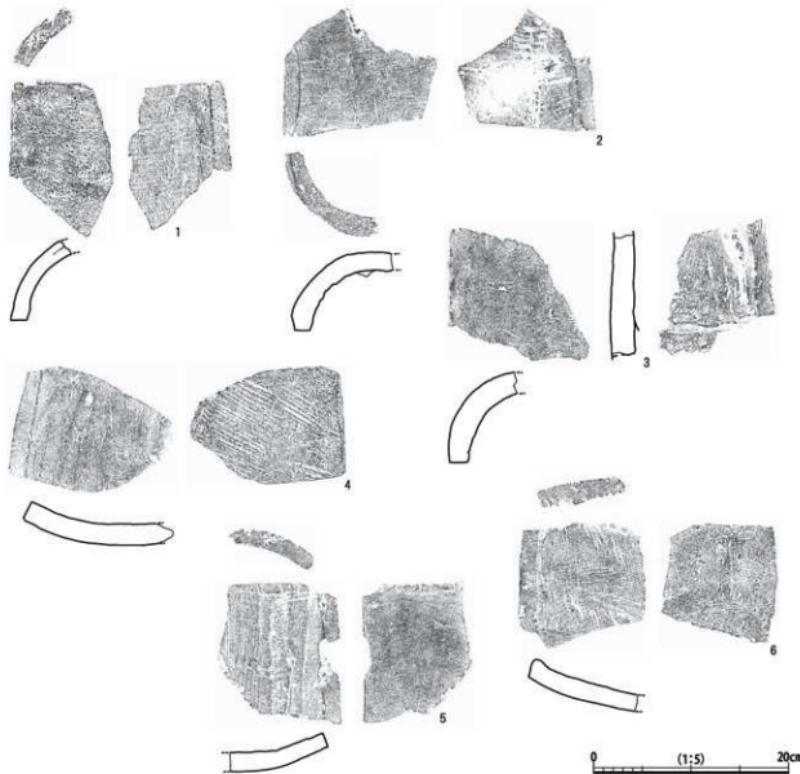
第29図 個人採集瓦実測図(2)



第30図 個人採集瓦実測図(3)



第31図 興道寺廃寺採集土器実測図



第32図 興道寺廃寺採集瓦実測図

軒瓦は10点。軒丸瓦4点、軒平瓦6点が出土している。軒丸瓦、軒平瓦とともに興道寺廃寺におけるI～III型式がみられる。第28図1の単弁八葉蓮華文軒丸瓦は瓦当の一部が残り、この型式の瓦としてはめずらしく堅固に焼き締まっている。同図2の素弁十葉蓮華文軒丸瓦は丸瓦から剥脱した瓦当である。第28図5・第29図6は凸面広端に花弁叩きを施す三重孤文軒平瓦。第29図7・8の孤線の鋭い三重孤文軒平瓦は凹面の模骨痕が顕著で、同図9・10の偏行唐草文軒平瓦は段頸をもつ。

第31・32図は、美浜町教育委員会が所蔵する来歴不明の採集資料で、瓦と土器でコンテナ2箱ほどある。土器には須恵器、土師器、製塙土器がある。第31図1は須恵器長頸壺。復元口径7.8cm、口縁端部は鋭く收める。同図2は須恵器甕。復元口径73.0cmと大型で、口縁部外面は2条の凹線に挟まれてヘラ書きの斜行文を施す。同図3は土師器甕。口縁部の内面は段をなし、4つの凹面が見られる。同図4は須恵質の擂鉢で、復元口径35.1cm。口縁部付近の内面に擗目を施す。瓦は、大半が図化に耐えない細片資料であるが、無段式丸瓦3点、平瓦3点を図化した。第32図3の無段式丸瓦は凹面に瓦当の剥離面と思われる部分が確認できる。同図4の平瓦の凸面は平行叩きを施し、凹面は布目のナデ消しを縱方向に加えるもので、興道寺廃寺では初期の平瓦である。

第2表 短挂职教育委员会試擬調查出土遺物：賈道李廣志捐贈物相容者

標本名	植物 番号	標本名 番号	標本名 番号	標 引	現存部位 (mm)	法 量	公玉川付近 の位置 (山頂-大谷)	剖面正日 (アラマツ L.)	剖面調査	断面・剖面調査	色調	重 量
第2504	1	ササガシモウセンソウ	1	五.5	瓦片225	●	●	208	●	●	灰色	219
第2505	2	ササガシモウセンソウ	2	五.5	瓦片220	●	●	208	●	●	灰色	655
第2506	3	高木外山桑寄生	3	瓦.9	瓦片220	●	●	208	●	●	灰色	1.76%
第2507	4	高木外山桑寄生	4	7.6.9	瓦片222	●	●	208	●	●	乳白色	2.16%
第2508	5	三種類文芋草	5.9	瓦片225	瓦片225	●	●	211	●	●	灰色	965
第2509	6	三種類文芋草	4.9	瓦片225	瓦片225	●	●	211	●	●	灰色	2.36%
第2510	7	三種類文芋草	8	瓦片226	瓦片226	●	●	211	●	●	灰色	671
第2511	8	三種類文芋草	9	瓦片225	瓦片225	●	●	211	●	●	灰色	1.36%
第2512	9	三種類文芋草	9	瓦片225	瓦片225	●	●	211	●	●	灰色	1.119
第2513	10	高木外山桑寄生	7	瓦片220	瓦片220	●	●	211	●	●	灰色	2455
第2514	11	高木外山桑寄生	2	瓦片220	瓦片220	●	●	211	●	●	灰色	269
第2515	12	高木外山桑寄生	9	瓦片218	瓦片218	●	●	211	●	●	灰色	209
第2516	13	高木外山桑寄生	4	瓦片216	瓦片216	●	●	211	●	●	灰色	209
第2517	14	高木外山桑寄生	6	瓦片216	瓦片216	●	●	211	●	●	灰色	209
第2518	15	平木	6	瓦片214	瓦片214	●	●	211	●	●	灰色	209
第2519	16	平木	4	瓦片20	瓦片20	●	●	211	●	●	灰色	209
第2520	1	赤松	1	瓦片18	瓦片18	●	●	211	●	●	灰色	253
第2521	2	赤松	7	瓦片18	瓦片18	●	●	211	●	●	灰色	253
第2522	3	赤松	3	瓦片16	瓦片16	●	●	211	●	●	灰色	560
第2523	4	赤松	4	瓦片16	瓦片16	●	●	211	●	●	灰色	615
第2524	5	赤松	9	瓦片19	瓦片19	●	●	211	●	●	灰色	690
第2525	6	赤松	9	瓦片19	瓦片19	●	●	211	●	●	灰色	690

第3表 個人寄贈瓦・興道寺廐寺採集瓦觀察表

種別	樹冠 高さ m	葉片 葉序 数	種 別	枝序部位	径 幅 (cm)	小葉の葉脈 と葉身の大きさ (ナメル)	葉面調査 木板・2cm	葉面調査 木板	葉面調査 紙
常緑 喬木	2	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉20 内葉12				乳白色	215 乳白色 乳白色
常緑 喬木	2	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉18 内葉10				乳白色	165 乳白色 乳白色
常緑 喬木	4	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉19 内葉11				乳白色	205 乳白色 乳白色
常緑 喬木	5	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉17 内葉10				乳白色	220 乳白色 乳白色
常緑 喬木	6	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉13 内葉9		●13 無ナデ	無調査	乳白色	160 乳白色 乳白色
常緑 喬木	7	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉7 内葉6		●13 無ナデ	無調査	乳白色	171 乳白色 乳白色
常緑 喬木	8	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉6 内葉5		●13 無ナデ	無調査	乳白色	169 乳白色 乳白色
常緑 喬木	10	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉20 内葉19		●13 無ナデ	無調査	乳白色	176 乳白色 乳白色
常緑 喬木	11	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉27 内葉25		●13 無ナデ	無調査	乳白色	215 乳白色 乳白色
常緑 喬木	12	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉25 内葉23		●13 無ナデ	無調査	乳白色	200 乳白色 乳白色
常緑 喬木	13	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉25 内葉23		●13 無ナデ	無調査	乳白色	115 乳白色 乳白色
常緑 喬木	14	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉29 内葉26		●13 無ナデ	無調査	乳白色	875 乳白色 乳白色
常緑 喬木	15	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉30 内葉29		●13 無ナデ	無調査	乳白色	205 乳白色 乳白色
常緑 喬木	16	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1 内葉0		●13 無ナデ	無調査	乳白色	86 乳白色 乳白色
常緑 喬木	17	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉17 内葉17		●13 無ナデ	無調査	乳白色	475 乳白色 乳白色
常緑 喬木	18	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉17 内葉17		●13 無ナデ	無調査	乳白色	3,215 乳白色 乳白色
常緑 喬木	19	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉14 内葉14		●13 無ナデ	無調査	乳白色	205 乳白色 乳白色
常緑 喬木	20	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉6 内葉5		●13 無ナデ	無調査	乳白色	85 乳白色 乳白色
常緑 喬木	21	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉6 内葉5		●13 無ナデ	無調査	乳白色	1,260 乳白色 乳白色
常緑 喬木	22	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉9 内葉8		●13 無ナデ	無調査	乳白色	1,100 乳白色 乳白色
常緑 喬木	23	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉9 内葉8		●13 無ナデ	無調査	乳白色	620 乳白色 乳白色
常緑 喬木	24	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉9 内葉8		●13 無ナデ	無調査	乳白色	765 乳白色 乳白色
常緑 喬木	25	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉9 内葉8		●13 無ナデ	無調査	乳白色	835 乳白色 乳白色
常緑 喬木	26	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉9 内葉8		●13 無ナデ	無調査	乳白色	450 乳白色 乳白色
常緑 喬木	27	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉8 内葉7		●13 無ナデ	無調査	乳白色	310 乳白色 乳白色
常緑 喬木	28	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1,4 内葉1		●13 無ナデ	無調査	乳白色	1,030 乳白色 乳白色
常緑 喬木	29	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1 内葉0		●13 無ナデ	無調査	乳白色	475 乳白色 乳白色
常緑 喬木	30	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉7 内葉6		●13 無ナデ	無調査	乳白色	765 乳白色 乳白色
常緑 喬木	31	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉5,6 内葉5,6		●13 無ナデ	無調査	乳白色	835 乳白色 乳白色
常緑 喬木	32	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1 内葉1		●13 無ナデ	無調査	乳白色	450 乳白色 乳白色
常緑 喬木	33	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉7 内葉6		●13 無ナデ	無調査	乳白色	865 乳白色 乳白色
常緑 喬木	34	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉7,8 内葉6		●13 無ナデ	無調査	乳白色	210 乳白色 乳白色
常緑 喬木	35	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉3 内葉2		●13 無ナデ	無調査	乳白色	415 乳白色 乳白色
常緑 喬木	36	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1,2 内葉1		●13 無ナデ	無調査	乳白色	415 乳白色 乳白色
常緑 喬木	37	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1 内葉1		●13 無ナデ	無調査	乳白色	415 乳白色 乳白色
常緑 喬木	38	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1 内葉1		●13 無ナデ	無調査	乳白色	415 乳白色 乳白色
常緑 喬木	39	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1 内葉1		●13 無ナデ	無調査	乳白色	415 乳白色 乳白色
常緑 喬木	40	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1 内葉1		●13 無ナデ	無調査	乳白色	415 乳白色 乳白色
常緑 喬木	41	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1 内葉1		●13 無ナデ	無調査	乳白色	415 乳白色 乳白色
常緑 喬木	42	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1 内葉1		●13 無ナデ	無調査	乳白色	415 乳白色 乳白色
常緑 喬木	43	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1 内葉1		●13 無ナデ	無調査	乳白色	415 乳白色 乳白色
常緑 喬木	44	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉1 内葉1		●13 無ナデ	無調査	乳白色	415 乳白色 乳白色
常緑 喬木	45	無枝状葉序	常緑小葉被葉文丸葉 葉先	外葉5,7 内葉5,7		●13 無ナデ	無調査	乳白色	1,265 乳白色 乳白色

第4表 福井県教育委員会試験調査出土標本表

第2章 調査の経緯・経過と調査の概要

第1節 調査に至る経緯と経過

第1項 興道寺廃寺の発掘調査に至るまでの経緯

興道寺廃寺における発掘調査の主な要因は、平成9年以後に興道寺廃寺の北方、北西方で開発事業が増加したことによるものである。第7表で示すとおり、平成9年(1997)以後、興道寺遺跡の北縁部において記録保存のための発掘調査や開発計画に伴う事前の試掘調査が美浜町教育委員会、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターによって不定期ではありながら継続的に進められた状況があり、これらの開発事業自体が興道寺廃寺にまで及ぶ可能性が予見された。

『2007年報告』で概述したとおり、平成10年(1998)に浮上した興道寺廃寺を横断する農道敷設計画については、関係機関の努力によって計画路線が興道寺廃寺の北方に変更され、結果として中心伽藍が道路によって南北に分断されることなく、また興道寺廃寺の金堂と塔の基壇は現状保存することにつながったが、興道寺廃寺の将来的な現状保存が憂慮されたため、早急な存否・内容確認調査実施の必要に迫られることとなった。

第2項 興道寺廃寺発掘調査全体の目的と経過

興道寺廃寺の発掘調査は第16次調査まで実施している。第33図にこれまでの調査区を示した。

第1次調査から第8次調査までの調査は、興道寺廃寺の遺構や遺物の存否や遺構深度、遺存状況を確認し、古代寺院として認識されている遺跡の性格を明らかにすること、調査を蓄積することで興道寺廃寺に開発事業が波及した場合の保護のための基礎資料を収集することを目的として、存否・内容確認調査の一環として美浜町教育委員会が調査を実施した。興道寺廃寺における第1期調査にあたる。

第1期調査は、平成14年度(2002)の第1次調査以後、平成15~18年度(2003~2006)の4年間において第8次までの調査を実施し、金堂、塔、中門の基壇を部分的に検出し、古代寺院の存在を明らかにするとともに、伽藍配置を想定するに至るなど、一定の成果を上げ、当初の目的を果たした。

美浜町教育委員会は第8次調査を終えた段階で、金堂、塔、中門と考えられた伽藍中心部の建物のそれぞれの配置がうかがえるほどに興道寺廃寺の遺構、遺物が一定程度、残存することを把握し、『2007年報告』において、それまでの調査成果と課題を整理した。これを踏まえて、将来的な史跡指定を視野において現況保存を目的として、平成19年度から平成23年度までを興道寺廃寺の第2期調査として、さらなる継続的な内容確認調査を計画した。

第2期調査の主眼は、① 興道寺廃寺の伽藍域および寺域を確認し、内外の遺構分布、遺存度の様相を明らかにすること、② 寺院の建立から廃絶までの通史的な変遷を明らかにし、地域の古代史の中に位置付けることであった。①については、各次調査を通じて、a. 伽藍の様相確認、b. 寺域の様相確認という2つの調査目的が継続的に設定され、前年度の調査内容を踏まえて、調査次(年次)別に具体的な目標を掲げて、適宜、調査箇所、調査面積などを設定した。②については、各次調査の検出遺構、出土遺物の検討を通じて明らかになる事柄であるが、くしくも第9次調査着手前の平成19年5月1日、文化庁文化財部記念物課(以下、「文化庁」と言う。)、坂井秀弥主任文化財調査官の視察を受け、金堂基壇の後世の削平が激しく、地表面に見える遺構の遺存状況から判断すると寺院単体で

遺跡名(地区名)	主体	①調査地点 ②調査面積 ③調査事項 ④調査原因 ⑤特記事項	②調査面積 ③調査期間	主な時期	検出遺構・遺物の概要	文献
興道寺遺跡 (土井ノ上1区)	町教委	①美浜町興道寺9号土井ノ上9-9・9-10番地 ②1,087m ² ③1997(H10)年11月~1998(H11)年1月 ④町屋建設に伴う発掘調査(記録写真保存) ⑤事前に町教委が試掘調査を実施	7世紀末~9世紀	遺構…堅穴建物跡1棟、柱立柱建物跡5棟、土炕、築、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製埴土器、瓦、輪羽口、鉢底、鍛針、鉄製防護車など	町教委1998	
興道寺遺跡 (土井ノ上2区)	町教委	①美浜町興道寺9号土井ノ上8番地 ②56m ² ③2001(H13)年7月 ④土地造成に伴う確認調査	8世紀前半	遺構…土坑、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製埴土器	町教委2003	
興道寺遺跡 (土井ノ上3区)	町教委	①美浜町興道寺9号土井ノ上2番地 ②40m ² ③2001(H13)年5月 ④町木防食取締役に伴う確認調査	不明	遺構…小穴	—	
興道寺遺跡 (中町1区)	町教委	①美浜町興道寺8号中町37番地 ②461m ² ③2000(H12)年5~9月 ④診療所建設に伴う発掘調査(記録保存) ⑤事前に町教委が試掘調査を実施	8世紀前半	遺構…堅穴建物1棟、土坑、溝、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製埴土器、鍛針など	町教委2003	
興道寺遺跡 (A~C区)	県埋文	①美浜町興道寺3号孤塚・4号觀音・8号中町・9号土井ノ上 ②1,670m ² ③2001(H13)年4~8月 ④典道設工事に伴う発掘調査(記録保存) ⑤事前に県埋文が試掘調査を実施	6世紀後半~7世紀初頭 13世紀	遺構…堅穴建物跡1棟、柱立柱建物跡1棟、土炕、溝、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製埴土器、鍛針調査 無軸輪器、鉄製轍、土鋤、瓦、超前鋤など	県埋文2003	
興道寺古墳群 (内町1区)	町教委	①美浜町興道寺10号内町52番地、12号茶ノ木18番地 ②1,438m ² ③2000(H12)年10~12月 ④典道設工事に伴う発掘調査(記録保存) ⑤事前に県埋文が試掘調査を実施	6世紀 13世紀	遺構…円墳3基(2基は周溝を備え、1基は堅穴系小石室をもつ小円墳) 柱立柱建物跡1棟、柱穴列条、土坑、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製埴土器、耳環など	町教委2002	
興道寺古墳群 (内町2区)	町教委	①美浜町興道寺10号内町46番地 ②87m ² ③2002(H14)年4月 ④連排建物に伴う確認調査	不明	遺構…自然流路1条	町教委2003	
興道寺墓地 (第0次調査)	町教委	①美浜町興道寺3号孤塚33番、4号觀音23・28-1・47-3番、9号土井ノ上4番 ②77.5m ² ③1999(H10)年7~8月 ④典道設工事に伴う事前調査	6世紀後半	遺構…溝1条、土坑、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製埴土器など	町教委1999	

第5表 興道寺遺跡・興道寺古墳群・興道寺古墳群における既往の調査一覧

凡例 美浜町教育委員会=町教委、福井県教育行政組織文化財調査セクション=県埋文

調査次数	調査地点	調査面積	調査期間	特記事項	検出遺構・遺物の概要	文 献
第1次調査	①美浜町奥道寺6号洞 / 上15・26番 ②209m ²		④特記事項	主な時期	遺構…堅穴建物跡、塔基壇、溝、柱穴列、土坑、小穴など	町教委2007
第2次調査	①美浜町奥道寺4号洞音1-11・5・26番 ②202m ²			7世紀初頭 8・9世紀	遺構…堅穴建物跡、塔基壇、溝、柱穴列、土坑、瓦など	町教委2007
第3次調査	①美浜町奥道寺4号洞音30・35-1・38番 ③228m ²			6～9世紀	遺構…塔基壇、溝、土坑、柱穴、小穴など	町教委2007
第4次調査	①美浜町奥道寺4号洞音5・27-1・27-2番、6号洞 / 上 ②251m ²		③2004(H16)年-12月 ④2004(H16)年-7月	6世紀後半	遺構…堅穴建物跡、塔基壇、溝、土坑、柱穴、小穴など	町教委2007
第5次調査	①美浜町奥道寺4号洞音8号中町20番地 ②81m ²		⑤2004(H16)年12月 ⑥16番 / 上8番地	6～9世紀 (近世か)	遺構…堅穴建物跡、塔基壇、溝、土坑、柱穴、小穴など	町教委2007
第6次調査	①美浜町奥道寺4号洞音1-1・2・9・13番、 6号洞 / 上18番地 ②142m ²	③2005(H17)年7-8月	⑦2005(H17)年11月	6～9世紀 13世紀	遺構…堅穴建物跡、塔基壇、溝、土坑、瓦、鉄釘など	町教委2007
第7次調査	①美浜町奥道寺4号洞音3・7番、6号洞 / 上21番地 ②36m ²	③2006(H18)年11月-2006(H18)月	⑧2006(H18)年1月 ⑨一部、住家撤去に伴う事前調査	6～9世紀	遺構…堅穴建物跡、塔基壇、溝、土坑、瓦など	町教委2007
第8次調査	①美浜町奥道寺6号洞 / 上12・20・21番 ②55m ²	⑩2006(H18)年7-9月	⑪2006(H18)年7-9月	6～9世紀	遺構…塔基壇、土坑器、製埴土器、瓦、鐵釘、銅錢など	町教委2007
第9次調査	①美浜町奥道寺4号洞音15-1・17・36～38・45番、 6号洞 / 上15・16・18・21番 ②273m ²	⑫2007(H19)年8-11月	⑬2007(H19)年8-11月	6～9世紀	遺構…堅穴建物跡、堅穴建物跡、柱穴列、堅穴地層、土坑、瓦など	町教委2012
第10次調査	①美浜町奥道寺4号洞音1・2・5・6・14-1・15-1・16・18・ 25番地 ②552m ²	⑭2008(H20)年8-11月	⑮2008(H20)年8-11月	6～9世紀	遺構…堅穴建物跡、堅穴建物跡、柱穴列、堅穴地層、土坑、瓦など	町教委2012
第11次調査	①奥道寺4号洞音2・5・11-1・28-1番、6号洞 / 上19番地、 21番地 ②511m ²	⑯2009(H21)年6-9月	⑰2009(H21)年6-9月	6～10世紀	遺構…堅穴建物跡、塔基壇、溝、土坑、柱穴など	町教委2012
第12次調査	①美浜町奥道寺4号洞音2・5・11-1・12・28-1、 6号洞 / 上19・21番 ②192m ²	⑱2010(H22)年5-9月	⑲2010(H22)年5-9月	6～9世紀	遺構…堅穴建物跡、塔基壇、溝、土坑、柱穴など	町教委2012
第13次調査	①美浜町奥道寺4号洞音2・9・27-1・28-1番、 6号洞 / 上24-1番 ③2011(H23)年9月-9月	⑳2011(H23)年9月-9月	㉑2011(H23)年9月-9月	6～9世紀	遺構…堅穴建物跡、塔基壇、溝、土坑、柱穴など	町教委2012
第14次調査	①美浜町奥道寺4号洞音25・26番、6号洞 / 上12番 8号洞 / 上21番地 ②145m ²	㉒2012(H24)年8-10月	㉓2012(H24)年8-10月	6～9世紀	遺構…堅穴建物跡、塔基壇、溝、土坑、瓦など	本報告
第15次調査	①美浜町奥道寺4号洞音26・27-1・28-1・29-1番、 6号洞 / 上10-12番 ②325m ²	㉔2013(H25)年9-12月	㉕2013(H25)年9-12月	6～9世紀	遺構…柱穴列、堅穴建物跡、塔基壇、溝、土坑、瓦など	本報告
第16次調査	①美浜町奥道寺4号洞音28-1番、6号洞 / 上16番、 8号洞 / 上21番地 ②130m ²	㉖2014(H26)年10-11月	㉗2014(H26)年10-11月	6～9世紀	遺構…柱穴列、堅穴建物跡、塔基壇、溝、土坑、瓦など	本報告

第6表 奥道寺墓寺における既往の調査一覧



第33図 興道寺廃寺発掘調査位置図（縮尺1/1,000）

の国の史跡指定が現状では難しいものと判断され、周辺に存在するであろう瓦窯、官衙、古墳群、集落などの関連遺跡を含めた一括指定を考慮すべき旨の指導を受けた。このため、以後の興道寺廃寺の調査を通じて、寺院を核とした周辺の古代社会の様相を明らかにしていくという命題に意識を向けていかざるを得ない状況になったことと関係している。

第2期調査として、平成19～23年度(2007～2011)の5年間で第13次までの調査を実施し、第1期調査で検出した金堂、塔は2時期の基壇が重複して存在すること、同様に第1期調査で検出の中門基壇は8世紀後半まで降り、この時期に造営された基壇は再建段階の金堂基壇を例に見るように外装に石積みを伴い、正方位を意識して造られていること、南門、講堂の基壇を新たに確認したこと、伽藍北方には掘立柱建物群が展開していること、おおよその寺域が明らかとなり、南門と講堂基壇の位置から伽藍の範囲がほぼ明らかとなつたこと、伽藍の寺院建物の時期別変遷が一定程度把握されたこと、寺院建立以前の集落様相の一端が明らかとなつたこと、祭祀に用いられたと考えられる墨書き土器の年代観から寺院の廃絶年代が確認されたことなど、多くの成果を上げることができ、第2期調査の目的を達成することができた。

第13次調査までの調査成果と課題について、平成24年(2012)3月30日発行の『美浜町内遺跡发掘調査報告書Ⅲ』(以下、『2012年報告』と言う。)において整理した上で、興道寺廃寺の中心伽藍の様相とおおよその寺域を示した。この段階で、遺跡に対する学術的な評価はかなり高まっており、具体的に史跡指定を目指すことができる状況にあった。この段階での大きな課題としては、寺域が明確に把握されていないため、史跡として保護すべき範囲の根拠を示すことができないことがあった。このことから、平成24年度から平成27年度までの調査を興道寺廃寺の第3期調査として、継続的な内容確認調査を計画した。

【第14次調査】

調査箇所	福井県三方郡美浜町興道寺4号觀音25・26番、6号測ノ上12番、8号中町21番
調査面積	145.3m ² 1tr…45.0m ² 、2tr…15.2m ² 、3tr…20.65m ² 、4tr…29.9m ² 、5tr…16.75m ² 、 6tr…17.8m ²)
調査期間	平成24年8月20日～10月12日
備考	(来跡者)門井直哉氏、柴原永遠男氏、菱田哲郎氏、山口悦子氏、渡辺大彦氏

【第15次調査】

調査箇所	福井県三方郡美浜町興道寺4号觀音26・27-1・28-1・29-1番、6号測ノ上10～12番
調査面積	324.55m ² (1tr…48.2m ² 、2tr…73.6m ² 、3tr…66.3m ² 、4tr…38.1m ² 、5tr…98.35m ²)
調査期間	平成25年9月24日～12月20日
備考	(来跡者)近江俊秀氏、門井直哉氏、柴原永遠男氏、菱田哲郎氏、山口悦子氏、 渡辺大彦氏

【第16次調査】

調査箇所	福井県三方郡美浜町興道寺4号觀音28-1番、6号測ノ上16番、8号中町21-1番地
調査面積	130.05m ² (1tr…72.35m ² 、2tr…29.75m ² 、3tr…27.95m ²)
調査期間	平成26年10月1日～11月28日
備考	(来跡者)門井直哉氏、柴原永遠男氏、菱田哲郎氏、山口悦子氏、渡辺大彦氏

第7表 興道寺遺跡第14～16次調査概要一覧

第3期調査の主眼は、①興道寺廃寺の寺域を確認し、史跡として保護すべき範囲を示すこと、②遺跡の価値づけにあたって、これまでの興道寺廃寺の調査の不備を補うことであった。

第3期調査として、平成24~26年度(2012~2014)の3年間で第16次までの調査を実施し、大枠として寺域を押さえることが可能となり、第3期調査の目的を達成することができた。

第2節 調査に対する指導、評価

第1項 学識者会議の実施

『2012年報告』でも述べたとおり、興道寺廃寺の発掘調査が大きく進展し始めたのは、平成20年度の第10次調査以後のことである。平成20年5月23日、文化庁の清野孝之文化財調査官(当時)の現地指導を受けたことを契機とする。それまでの調査面積が限定的で、検出された建物基壇の構造、時期が不確かであることを踏まえて、面的調査の実施が難しい現在の土地利用形態であることを理解していただいた上で、外部有識者による調査委員会を設置し、指導、助言を得ながら可能な限りの面的調査を継続的に実施すべき旨の指導を受けたことによる。実際、それまでの興道寺廃寺の調査では、遺跡の現況が複数の個人所有の畠地で、その地割もかなり細分化されており、後の土地の境界紛争を考慮すれば畠地の境界部分を発掘調査で掘削することができなかつたため、調査面積が狭小にならざるを得なかつた事情があった。また、調査手法や遺跡に対する評価、今後の調査の方向性などに関して外部の学識経験者などによる適切な指導、助言を得る機会も限られていたなど、差し迫った調査上の課題も浮上していた。

清野文化財調査官の指導を受け、美浜町教育委員会では直ちに有識者会議の設置を検討し、将来的な興道寺廃寺の保存活用を考える上で計画的な発掘調査の実施が必要であることを再認識し、調査方針、調査計画の立案、調査指導による遺構、遺物に対する解釈、調査内容に関する検証や総括、遺跡の評価、価値づけについて、外部学識者、地域住民、文化財保護行政関係者などから指導助言を受けることを目的として、興道寺廃寺調査会議を設け、平成20年度から平成23年度までの4年間で、計9回の興道寺廃寺調査会議を開催した。

この委員会の外部学識者として、歴史学の立場から大阪市立大学大学院文学研究科 教授(当時)の榮原永遠男氏、考古学の立場から京都府立大学文学部歴史学科 教授の菱田哲郎氏、歴史地理学の立場から福井大学教育地域科学部 准教授の門井直哉氏に出席いただき、ご指導、ご助言を得た。また、地域住民の代表者として興道寺区の歴代区長(一瀬繁紘氏、田村泰三氏、澤田富士男氏、木村幹雄氏)に、また文化財保護行政関係者として福井県教育庁文化課文化財保護室(当時)の中川佳三氏、美浜町文化財保護委員会委員長の山口悦子氏に出席いただき、ご理解、ご援助を得た。

平成24年度以後は、史跡指定を含む遺跡の保存、活用を睨み、興道寺廃寺等調査指導委員会と名称を変え、榮原氏、菱田氏、門井氏、山口氏の各委員に加え、委員会の外部学識者として考古学の立場から文化庁文化財調査官経験者の奈良文化財研究所都城発掘調査部 主任研究員(当時)の渡辺丈彦氏を新たに委員に迎え(現在は慶應義塾大学文学部 准教授)、地域住民の代表者として興道寺区の歴代区長(高城和行氏、蔽ノ内太喜氏、上登野健一男氏、塚原優氏)と一瀬繁紘氏に、文化財保護行政関係者として福井県教育庁生涯学習・文化財課の中川佳三氏、本多達哉氏に出席いただき、ご理解、ご援助をいただいている。



写真 10 第7回興道寺廃寺調査会議



写真 11 第9回興道寺廃寺調査会議



写真 12 第7回興道寺廃寺等調査指導委員会

実施日	会議名 称	協議・検討事項
西暦 2008 年 7 月 29 日	第1回興道寺廃寺調査会議	1 興道寺廃寺調査会議会報の概要説明 2 興道寺廃寺調査会議会報に付する報告書 3 第10次調査計画について 4 今後の調査等の方向性について
西暦 2008 年 10 月 6 日	第2回興道寺廃寺調査会議	1 第10次調査 現地視察 2 第10次調査に関する評価について 3 第11次調査計画について
西暦 2009 年 3 月 16 日	第3回興道寺廃寺調査会議	1 第10次調査 現地視察報告書 2 第10次調査 現地視察報告 3 第11次調査計画について
西暦 2009 年 8 月 5 日	第4回興道寺廃寺調査会議	1 第11次調査についての経過報告 2 第11次調査 現地視察報告 3 第11次調査 現地視察 4 第11次調査に対する評価について
西暦 2009 年 9 月 14 日	第5回興道寺廃寺調査会議	1 第11次調査についての経過報告 2 第11次調査 現地視察報告 3 第11次調査 現地視察 4 第11次調査に対する評価について
西暦 2010 年 3 月 16 日	第6回興道寺廃寺調査会議	1 第11次調査 現地視察報告書 2 第11次調査に対する評価について 3 第12次調査計画について
西暦 2010 年 8 月 17 日	第7回興道寺廃寺調査会議	1 第12次調査 現地視察報告 2 第12次調査 現地視察 3 第12次調査 現地視察計画について
西暦 2011 年 3 月 24 日	第8回興道寺廃寺調査会議	1 第12次調査 現地視察報告書 2 第12次調査に対する評価について 3 第13次調査計画について
西暦 2011 年 8 月 24 日	第9回興道寺廃寺調査会議	1 第13次調査 現地視察 2 第13次調査 現地視察 3 第13次調査に対する評価について
西暦 2012 年 7 月 26 日	第1回興道寺廃寺等調査指導委員会	1 興道寺廃寺のこれまでの調査について 2 今後の調査、保存活用に関する方向性について 3 平成 24 年度の調査について(興道寺廃寺第 14 次調査、高善庵跡調査)
西暦 2012 年 10 月 9 日	第2回興道寺廃寺等調査指導委員会	1 第14次調査 現地視察 2 興道寺廃寺および開拓遺跡調査、保存活用計画(案)について 3 興道寺廃寺と開拓遺跡との併せて調査官現地指導について
西暦 2013 年 3 月 18 日	第3回興道寺廃寺等調査指導委員会	1 第14次調査 現地視察報告書 2 第15次調査計画について 3 興道寺廃寺の調査、保存等に関する文化庁協議
西暦 2013 年 12 月 6 日	第4回興道寺廃寺等調査指導委員会	1 第15次調査 現地視察報告書 2 第15次調査 現地視察
西暦 2014 年 6 月 8 日	第5回興道寺廃寺等調査指導委員会	1 第16次調査 現地視察報告書 2 文化庁調査官の現地指導について 3 第16次調査計画について
西暦 2014 年 11 月 10 日	第6回興道寺廃寺等調査指導委員会	1 第16次調査 現地視察報告書 2 第16次調査 現地視察
西暦 2015 年 7 月 5 日	第7回興道寺廃寺等調査指導委員会	1 興道寺廃寺第 16 次調査 現地視察報告書 2 興道寺廃寺史跡指定範囲の確認について 3 興道寺廃寺史跡指定範囲の確認について
西暦 2016 年 2 月 23 日	第8回興道寺廃寺等調査指導委員会	1 興道寺廃寺発掘調査報告書について

第 8 表 学識者会議の経過一覧

興道寺廃寺等調査指導委員会の開催は、平成 24 年度から平成 27 年度までの 4 年間で計 8 回を開催した。興道寺廃寺調査会議として開催した 9 回と合わせると、計 17 回の学識者会議を開催したことになる。その経過を第 10 表に示す。

第 2 項 興道寺廃寺をめぐる文化庁文化財調査官の指導

興道寺廃寺に関する文化庁文化財調査官の指導として、前述のとおり坂井・清野文化財調査官の現地指導があり、その後も興道寺廃寺調査会議の席上で出席者から調査に関する学術的な指導助言があり、会議を運営する中で評価を受けやすくなったりこと、調査上の課題抽出が容易となったりなどと併せて、従来、調査で表土置き場としていた部分を反転して調査を実施することで少しでも調査面積を確保するという調査方法に移行していったことで、特に平成 21 年度の第 11 次調査においては興道寺廃寺の既往の調査で過去最大の調査面積を確保し、主要堂塔部分を面的調査したこと多くの知見を得た。

この調査の終盤、平成 21 年 9 月 25 日には幸いにも文化庁の渡辺丈彦文化財調査官（当時）の観察、指導を受けることができ、遺跡の遺存度が低いのではないかというそれまでの低評価を払拭することとなった。渡辺丈彦文化財調査官の指導内容は、この数年の調査で中心伽藍に関して様相把握が進み、遺構の平面復元が可能となったことは望ましい反面、寺院の外郭施設などの様相把握が不十分であること、今後、中心伽藍や外郭施設などの様相把握が進めば、当然、寺院単体での史跡指定の可能性について再度検討されるべきであること、今後の調査は中心伽藍の様相把握を第一とし、それ以後、寺域を含めて広い範囲で考えていくべきことなどであった。

それまで興道寺廃寺の調査に取り組んできた町にとって今後の遺跡の保存活用を考える上で重要であり、また今後の継続的な調査と史跡指定に対して道筋を示唆するものであった。

第 2 期の調査を終え、第 3 期調査の目的が寺域の確認へと向かう中、興道寺廃寺の今後の調査保存の方向性について協議すべく、平成 24 年 11 月 6 日、美浜町教育委員会は調査担当者を文化庁記念物課に出張させ、福井県生涯学習・文化財課の中川主任（当時）とともに、補宜田主任文化財調査官、近江文化財調査官から指導を受けた。その中で、興道寺廃寺の評価、価値づけは興道寺廃寺等調査指導委員会に一任すること、史跡指定を進めるための人的体制を整備するとともに指定同意の作業に取り掛かること、平成 27 年度の意見具申を目指すこと、遺跡名の「興道寺廃寺」を書名に冠する総括のための発掘調査報告書を作成することなどの指導助言を得た。また、平成 25 年度実施の第 15 次調査時に近江文化財調査官が現地指導を行うことが併せて確認された。

第 15 次調査終盤の平成 26 年 12 月 14 日、今までの調査状況を確認し、史跡として保護すべき具体的な範囲を確認するために近江文化財調査官の来町を受けた。発掘調査現場にて第 15 次調査の状況を報告するとともに、以下の指導を受けた。

- ・興道寺廃寺のように遺存状況がよく、成立と展開が分かる寺院遺跡は、全国的にあまり例がない。地域の視点から飛鳥時代末期、奈良時代の政策の具体像を検討し、逆に日本史に投げ返していくことができる。

- ・発掘調査で寺院の周囲で前段階の 6 世紀後半の豪族居館跡などが検出されており、捨宅寺院的なあり方が 7 世紀後半の地方寺院でもなされている現象は、天皇の詔を具現化している。

- ・飛鳥時代末に各地域で活発化する造寺活動の一つの典型的なあり方を具体的に示し、天武朝の寺院造営を理解する上で重要な遺跡で、若狭や北陸における寺院造営だけではなく、天武朝における寺院造営まで踏み込める。

- ・寺院だけの評価ではなく、寺院成立の背景として前身の集落、古墳群、窯跡、官衙、交通路、港湾と豊富な遺跡群などを含めて評価する要素も必要である。

発掘調査報告書作成年度となる平成 27 年度には、平成 27 年 5 月 12 日に再び近江文化財調査官の現地指導を受け、発掘調査報告書作成、指定同意取得作業についての進捗についての確認が行われた。興道寺廃寺を史跡指定するにあたって地域の中心的寺院であることを周辺遺跡のあり方を含めて多角的な検討から示すこと、寺域や伽藍の事実関係を整理しながら一定程度の価値を引き出すこと、捨宅寺院のあり方について集落開始期を示すことで寺院成立前の様相を押さええること、国史跡の価値を客觀化できる機会が総括報告書の作成であり、価値の根拠となる客觀的データを誰が見ても分かる形で整理することなどについて、指導助言を受けた。



写真 13 文化庁近江文化財調査官現地指導

第3節 普及啓発事業の実施

第1項 興道寺廃寺調査に関わる普及啓発事業の実施

実施事業の概要を第9表に示した。まず興道寺廃寺に関することとして、これまでの発掘調査と平行して各調査時の段階で報道機関への情報提供や発掘調査現地説明会を通じて調査地の公開を行い、地域住民や内外の歴史愛好家に対しての周知を行ってきた。特に、平成20～22年度の第10～12次調査においては目覚ましい調査成果が挙がったため、報道機関の新聞紙面等への取り上げ方も大きく、遺跡が広く周知されることとなった。

前述したように、平成17年度の歴史シンポジウム「興道寺廃寺の謎に迫る」開催以後、同年度の歴史シンポジウム「興道寺遺跡の謎に迫る」、翌年度の歴史シンポジウム「古代銭貨の謎に迫る」と興道寺廃寺に関するシンポジウムを継続的に開催し、平成22年(2010)9月には、大きく進展した興道寺廃寺の第12次調査までの成果を踏まえて、「ここまで分かった！興道寺廃寺」と題した歴史フォーラムを2回開催し、考古学、文献史学、歴史地理学の観点から興道寺廃寺の価値づけを行った。その後、平成23年(2011)10月に、興道寺廃寺出土の塑像螺髪をテーマに、歴史フォーラム「耳川流域に造仏師がやってきた！」を開催し、考古学、美術史学の観点から興道寺廃寺の価値づけを行った。そして、本報告刊行年度の平成27年(2015)10月には興道寺廃寺を若狭の古代社会、とりわけ古代寺院の中に位置づけることを目的とした歴史フォーラム「再論、若狭の古代寺院」を開催し、総括報告書作成に向けての準備作業として議論を行っている。

これ以外には、地域を対象とした興道寺廃寺に関する報告会、講演会などに調査担当者が講師として出講しており、あるいは研修の場として平成25年4月12日は福井大学教育地域科学部の新入生の研修の一環として遺跡見学を受け入れた。また、平成26年度の第16次調査時ではインターネットの一環として美浜中学校3年生1名が発掘作業に1日従事した。

研究者有志の研究会の現地視察にも対応しており、例えば、平成25年3月29日に国造研究会10数名が若狭の古墳、寺院などを見学する一環として興道寺廃寺を見学し、平成25年9月8日には古代寺院史研究会の第26回例会として若狭の古代寺院遺跡を見学する一環で30名ほどが興道寺廃寺を見学し、同日に行われた研究報告の一環で調査担当者が興道寺廃寺の概要報告を行っている。

第2項 美浜町歴史フォーラムの開催

美浜町歴史シンポジウムは、平成15年度に南伊夜山出土銅鐸をテーマとして始まり、翌年度の2回目は石棚を備えた横穴式石室墳である淨土寺古墳群をテーマとした内容で講演報告、議論が行われた。その後、「興道寺廃寺の謎に迫る」、「興道寺遺跡の謎に迫る」、「古代銭貨の謎に迫る」と4年間続き、美浜町内の遺跡発掘調査の速報的な報告の場として、町内の原始・古代遺跡に対する価値づけの場として重要な役割を果たした。以後、3年ほど開催が休止となつたが、平成22年度に歴史フォーラムとして装いを新たに「ここまで分かった！興道寺廃寺」、翌年度には「耳川流域に造仏師がやってきた！」が開催され、興道寺廃寺についての理解を深め、価値づけを進める機会となつた。

平成24年度は「若狭国と三方郡のはじまり」と題して立國立評をテーマに、平成25年度は「古代若狭の交通、往来、地域社会」と題して古代交通をテーマに、平成26年度には「若狭の塩、再考」と題して古代の塩の生産と流通をテーマに、興道寺廃寺をとりまく地域の在地社会のあり方を問う歴史フォーラムを開催することで、逆に興道寺廃寺に対する付加価値を深めてきたと思われる。

興道寺廃寺、あるいは若狭の在地社会をテーマに扱った歴史シンポジウム、歴史フォーラムとして

10回が開催され、講演報告者等として延べ49人（実質37人）の内外の学識者、研究者、自治体職員などが登壇した。その顔触れも考古学、文献史学、文学、歴史学、歴史地理学、美術史、郷土史などと多岐に渡り、おおむね50代以下の若手研究者たちであったため、通説にない斬新な見解が披瀝され



写真14 第10次調査現地説明会



写真15 第12次調査現地説明会



写真16 古代寺院史研究会遺跡見学



写真17 平成23年度歴史フォーラム



写真18 平成24年度歴史フォーラム



写真19 平成26年度歴史フォーラム

実施日	実施内容	実施場所	人數等
2004 (H16) 8.6	第4次調査報道機関公開	興道寺魔寺	-
2006 (H18) 2.11~12	平成17年度美浜町歴史シンポジウム「興道寺魔寺の謎に迫る」開催	はまとびあ	130人
2006 (H18) 2.19	平成17年度美浜町生涯学習講座「シンポジウム」「興道寺遺跡の謎に迫る」開催	中央公民館	80人
2006 (H18).10	美浜町歴史シンポジウム記録集3「興道寺魔寺と興道寺道路」発行	-	-
2006 (H18) 9.22	第8次調査報道機関公開	興道寺魔寺	-
2007 (H19) 2.10	平成18年度美浜町生涯学習講座(シンポジウム)「古代銭貨の謎に迫る」開催	中央公民館	50人
2007 (H19).11.8	第9次調査報道機関公開	興道寺魔寺	-
2007 (H19).11.10	第9次調査現地説明会	興道寺魔寺	20人
2008 (H20).10.15~16	第10次調査報道機関公開	興道寺魔寺	-
2008 (H20).10.18	第10次調査現地説明会	興道寺魔寺	30人
2009 (H21).3.31	美浜町歴史シンポジウム記録集4「興道寺魔寺と古代銭貨」発行	-	-
2009 (H21).8.7	第11次調査(前期)報道機関公開	興道寺魔寺	-
2009 (H21).8.9	第11次調査(前期)現地説明会	興道寺魔寺	15人
2009 (H21).9.17~18	第11次調査(後期)報道機関公開	興道寺魔寺	-
2009 (H21).9.19	第11次調査(後期)現地説明会	興道寺魔寺	30人
2010 (H22).9.5	平成22年度美浜町歴史フォーラム 「ここまで分かった! 興道寺魔寺 -耳川流域に大伽藍が現る~」開催	美浜町役場	80名
2010 (H22).9.22	第12次調査報道機関公開	興道寺魔寺	-
2010 (H22).9.25	第12次調査現地説明会	興道寺魔寺	20人
2010 (H22).9.25	平成22年度美浜町歴史フォーラム 「ここまで分かった! 興道寺魔寺 -耳川別氏、耳川流域に起つ~」開催	美浜町役場	50名
2011 (H23).3.31	美浜町歴史シンポジウム記録集5「ここまで分かった! 興道寺魔寺」発行	-	-
2011 (H23).8.30	第13次調査報道機関公開	興道寺魔寺	-
2011 (H23).9.3	第13次調査現地説明会	興道寺魔寺	中止
2011 (H23).10.15	平成23年度美浜町歴史フォーラム 「古代、耳川流域に造出伽藍がやってきた! ~興道寺魔寺出土土塼をめぐって~」開催	美浜町役場	50名
2012 (H24).3.31	美浜町歴史シンポジウム記録集6「古代、耳川流域に造出伽藍がやってきた! 興道寺魔寺」発行	-	-
2012 (H24).5.20	ふれあいサロン(町生涯学習まちづくり出前講座)「興道寺魔寺と周辺の遺跡」	興道寺魔寺	30名
2012 (H24).11.24	平成24年度美浜町歴史フォーラム 「若狭国と三方郡のはじまり ~若狭の古代社会のあり方から考える~」開催	町生涯学習センター	80名
2013 (H25).3.15	美浜町歴史シンポジウム記録集7「若狭国と三方郡のはじまり」発行	-	-
2013 (H25).11.15	興道寺老人クラブ(町生涯学習まちづくり出前講座)「地域の遺跡に学ぼう(興道寺魔寺)」	興道寺	50名
2013 (H25).11.17	平成25年度美浜町歴史フォーラム「古代若狭の交通、往来、地域社会」開催	町生涯学習センター	100名
2014 (H26).3.14	美浜町歴史シンポジウム記録集8「古代若狭の交通、往来、地域社会」発行	-	-
2014 (H26).10.4	平成26年度美浜町歴史フォーラム 「若狭の塙、再考 -古代若狭の塙の生産と流れをめぐって~」開催	町生涯学習センター	80名
2015 (H27).3.20	美浜町歴史シンポジウム記録集9「若狭の塙、再考」発行	-	-
2015 (H27).10.25	平成27年度美浜町歴史フォーラム 「再論、若狭の古代寺院 -渡瀬郡の古代寺院、そして興道寺魔寺~」開催	町生涯学習センター	70名
2016 (H28).3.18	美浜町歴史シンポジウム記録集10「再論、若狭の古代寺院」発行	-	-

第9表 興道寺魔寺調査関連普及啓発事業実施一覧

ることも多かった。特に直近の数回のフォーラムでは講師陣は20代から40代までの若手研究者で占められ、座談では会場の地城住民、歴史爱好者、研究者など多彩な参加者を巻き込み、議論が深まるなど、毎年、熱心に脚を運ぶ参加者も多い。美浜町歴史シンポジウム、歴史フォーラムの継続と興道寺廃寺の発掘調査の進展は連動しており、興道寺廃寺の調査研究や遺跡の評価に対する総括的な内容を備えたものも多く、興道寺廃寺の調査研究を進める上での両輪となっていることが特徴である。遺跡の普及啓発の面から見ても効果的な活動であり、事業の継続性が求められる。

第4節 発掘調査の体制、方法

第1項 発掘調査、調査報告書刊行の組織、体制

『2007年報告』で述べたように興道寺廃寺の初期の調査時においては、建物基壇などの寺院遺構の位置が明らかでなく、また大半の畠地では耕作が行われていたことから調査地点の選定に苦慮し、休耕地の地割りに沿ったトレチ設定に終始したため、結果として建物基壇の方位に対して斜めにトレチを設定するなどの過失が発生した。また、表土直下に分布した基壇積み土や整地土を後世の堆積層、遺物包含層と誤認し、地山面まで掘削を行うなどの過失もあった。このことから、従来の調査方法について反省を踏まえて再検討し、第9次調査以後、第16次調査まで以下のとおり調査を進めた。

興道寺廃寺に関する発掘調査、整理作業、および発掘調査報告書のあたっては、全て美浜町教育委員会の直轄事業として実施してきた。美浜町教育委員会教育長が調査主体者となり、文化財保護執行事務局が興道寺廃寺の調査事務局となっている。以下に、興道寺廃寺の内容確認調査に関する体制を列記する。

調査主体者

- 浅妻 保 (美浜町教育委員会教育長、平成14~19年度)
大同 保 (同上、平成20~27年度)

調査事務局

- 田辺義郎 (美浜町教育委員会事務局長、平成15・16年度)
東田仁幸 (同上、平成17・18年度)
軍場保幸 (美浜町教育委員会事務局 学校教育課長、平成19年度)
西野民男 (同上、平成20・21年度)
石丸好通 (同上、平成22・23年度)
山口国重 (同上、平成24・25年度)
野原佐智夫 (同上、平成26・27年度)
東田仁幸 (美浜町教育委員会事務局 文化財保護・町誌編纂室長、平成14~16年度)
塩浜洋一 (同上、平成17~21年度)
窪 安和 (美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財保護・町誌編纂室長、平成22・23年度)
窪 安和 (美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財室長、平成24・25年度)
塩浜洋一 (同上、平成26・27年度)
松葉竜司 (美浜町教育委員会事務局 文化財保護・町誌編纂室 学芸員、平成14~18年度)
(美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財保護・町誌編纂室
主事(学芸員)、平成19~21年度)

(同上 主査(学芸員)、平成 22・23 年度)

(美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財室 主査(学芸員)、
平成 24~27 年度)

調査担当者 松葉竜司

調査作業員

(平成 14 年度)

上野山稔、川畑良樹、久保正、小林三雄、武田絵理、田村千賀子、道幸明、西田幸子、
原田美代子、吉本正治

(平成 15 年度)

秋山喜久枝、上野山稔、久保正、小林三雄、柴田文恵、田村千賀子、田辺涉、道幸明、
福山博章、丸杉美和、由田尚道、吉本正治

(平成 16 年度)

伊藤キヨ子、上野山稔、久保正、沢田三郎、田辺涉、道幸明、原田吉雄、福山博章、
丸杉美和、道下匠、山口遼介、吉本正治

(平成 17 年度)

秋山喜久枝、伊藤キヨ子、上野山稔、久保正、小林裕季、沢田三郎、沢田道子、高口博志、
竹阪卓、田中悟、田辺涉、道幸明、原田吉雄、福山博章、松田健一郎、道下匠、山口遼介、
由田尚道、吉本正治

(平成 18 年度)

秋山喜久枝、伊藤キヨ子、上野山稔、奥井新平、久保正、小林裕季、沢田三郎、沢田道子、
竹阪卓、田中悟、田辺涉、道幸明、西森啓洞、原田吉雄、道下匠、山口遼介、吉本正治

(平成 19 年度)

伊藤キヨ子、奥井新平、上野山稔、久保正、澤田三郎、澤田道子、竹阪卓、田邊涉、
原田吉雄、樋口雄也、道下匠、宗石祥一、吉本正治

(平成 20 年度)

伊藤キヨ子、奥井新平、小平真沙代、上野山稔、久保正、澤田三郎、澤田道子、竹阪卓、
田邊涉、原田吉雄、道下匠、吉本正治

(平成 21 年度)

伊藤キヨ子、大井幸一、奥井新平、上野山稔、澤田三郎、田邊涉、中井大揮、原田吉雄、
味噌井拓志、道下匠、山崎し央倫、吉本正治

(平成 22 年度)

伊藤キヨ子、大井幸一、小川絢子、奥井新平、上野山稔、澤田三郎、田邊涉、原田吉雄、
三田村沙織、道下匠、吉本正治

(平成 23 年度)

伊藤キヨ子、大井幸一、奥井新平、田邊涉、原田吉雄、道下匠、吉本正治

(平成 24 年度)

石丸晴夫、伊藤キヨ子、大井幸一、奥井新平、奥村憲昭、小林幸男、高木三千子、田邊涉、
桧木等、原田吉雄、平城美智子、道下匠、南裕味子、山口かおり

(平成 25 年度)

石丸晴夫、伊藤キヨ子、大井幸一、奥井新平、奥村憲昭、小林幸男、高木三千子、田邊涉、
桧木等、原田吉雄、平城美智子、道下匠、南裕味子、山口かおり

(平成 26 年度)

石丸晴夫、伊藤キヨ子、大井幸一、奥井新平、奥村憲昭、小林幸男、後藤敏広、坂田尚子、高木三千子、竹内美智江、田邊涉、榎木等、原田吉雄、平城美智子、備前儀一、町野和彦、道下匠、南裕味子、山口かおり、吉本正治

(平成 27 年度)

坂田尚子、高木三千子、平城美智子、南裕味子、山口かおり

なお、一連の発掘調査に際しては、以下の土地所有者の皆さまから調査の承諾を受けた。謹んで感謝申し上げる。

第1次調査	西野正一
第2次調査	奥井千代乃、奥井義弘、西島清美
第3次調査	田村泰三、田村正美、藏ノ内正和
第4次調査	井上ハルミ、澤田政一、奥井義弘、堀田みち子、鳥井秀樹
第5次調査	馬野一司
第6次調査	奥井精次、久保豊吉、澤田宣子、柴田鈴子、南眞琴
第7次調査	奥井義弘、河井久利、軍場保幸、久保豊吉、鳥居辰雄
第8次調査	奥井義弘、木村誠一、高木茂
第9次調査	奥井義弘、上登野稔、澤田茂次、澤田政一、田中忠三、中瀬久一、西野一夫、西野肇、山本キク
第10次調査	奥井健治、奥井精治、奥井義弘、久保豊吉、塙原勇、中川進、西野宏司、堀田みち子、松井宗由、向井佐登司、山本キク
第11次調査	奥井義弘、木子武雄、木村誠一、久保豊吉、澤田博、鳥居秀樹
第12次調査	奥井義弘、木村誠一、久保豊吉、澤田茂次、鳥居秀樹、南眞琴
第13次調査	木村誠一、久保豊吉、柴田鈴子、高城勲、鳥居秀樹、堀田みち子
第14次調査	馬野一司、高城秀子、中瀬久一、西島美智子
第15次調査	久保啓一、高城秀子、高城寛、鳥居秀樹、西島美智子、堀田みち子
第16次調査	馬野一司、澤田政一、鳥居秀樹

第2項 現地調査の方法

興道寺廃寺では第1期調査すでに金堂、塔、中門の基壇を部分的に検出し、特に金堂では地表面に基壇の高まりをそのまま残しているように、伽藍域では総じて表土（耕作土）から遺構検出面まで浅く、極端に言えば表土を除去した段階で基壇などの遺構が検出できるような遺構深度であった。このため、基本的には表土のある程度の深さまでは重機掘削を行い、地山面や遺構検出面付近では必要に応じて人力による表土掘削を行った。

調査区の設定にあたっては、土地の地割や一筆ごとの畠地などの土地面積に左右されるため、トレーニング調査を基本としたが、ある程度は東西、南北軸を意識したトレーニング設定を行い、また可能な限り調査区と排水置き場を反転させながら調査を進めるなど面的調査の実施に努めた。ただし、土地の地割の制約を受け、必ずしもそうならないことが多々あった。また、検出遺構の性格に応じて、必要に応じてトレーニングの拡張を行うことで遺構の全体像を把握することに努め、一部の遺構はその性格、構築および廃絶年代を把握するために必要最小限度の断ち割りを行った。調査の性質上、将来へ遺構を伝えることを考慮して、柱穴・小穴などの小規模遺構の掘削は半裁に留め、土坑、溝などもセクションベルトなどとして未掘部分を設けている。

調査終了時のトレーニングの埋め戻しは、後の畑地での耕作に影響が出ないように、地山面、遺構検出面などの掘削で発生した土砂を下位にそのまま戻し、耕土が最上位となるよう配慮したが、耕土下にあった拳大の礫が耕土に混じるなど、後の耕作に支障が出て、苦情を受けることもあった。

遺構平面図、遺物等出土状況平面図、遺構土層断面図、トレーニング土層断面図、遺構エレベーション図・立面図など調査図面の作成については、調査担当者と作業員が協力して進めた。トレーニング内の遺構検出面に杭を直線状に複数本設定し、それを図根点として造り方測量を基本として、一部は平板測量を併用して原則として1/20の縮尺の平面図の作成を行ったが、瓦溜まりなどの遺物等出土状況図の作成においては1/10、1/20の縮尺を併用した。土層断面図、エレベーション図などの断面図、遺構立面図などは1/10、1/20の縮尺を併用して作成した。

なお、平成19年度に美浜町事業として実施した興道寺廃寺現況地形測量業務で設置した世界測地系に基づく3級基準点、4級基準点が遺跡内外に10点ほど設置されているため、調査で作成した平面図の図根点に座標を割り付け、測量平面図に合成した。

写真は、記録用として35mmモノクロフィルム、35mmリバーサルフィルム、35mmデジタルカメラを併用しながら撮影した。基本的にはトレーニングごとに表土の除去段階、遺構の検出段階、遺構の掘削(半裁)段階、調査の最終段階で全景の写真撮影を行い、必要に応じて、個別遺構の詳細写真、遺構の土層断面、遺物等出土状況の写真撮影を行った。

第3項 遺構番号の割り付け

遺構の記号として、基壇遺構…SB、堅穴建物跡…SH、掘立柱建物跡…SA、土坑…SK、溝…SD、基壇礎石据え付け掘り方・柱穴・小穴…P、集石・性格不明遺構…SXなど、遺構種別ごとにそれぞれ略号を付した。本書収録の遺構図などは基本的に略号で表示した。

遺構番号については、現地調査時に検出順に遺構番号を付しているが、『2012年報告』刊行時に第1次調査から第13次調査までの全ての調査に関して遺構番号が振り直され、調査次数の2桁+トレーニング番号+遺構番号という6桁の遺構番号の表示とすることとなったため、第14次調査以後の遺構番号はこの原則に従っており、本報告においてもこれに基づく。『2012年報告』でも記したように、例えば平成16年度(2004)の第6次調査2トレーニングで検出した金堂基壇はSB060201という遺構番号となる。つまり、『2003年報告』(平成15年(2003)3月20日発行『美浜町内遺跡発掘調査報告書I』)、『2007年報告』に抄録されている第8次調査までに検出した遺構番号は『2012年報告』と本報告収録の遺構番号とは同一とならないので、留意されたい。

また、平成16年度(2004)の第6次調査2トレーニングで検出した金堂基壇SB060201が後の平成21年度(2009)の第11次調査5トレーニングで再建期金堂基壇SB110502として再検出されており、この場合、SB060201とSB110502とは同一の金堂基壇を指すこととなる。このように同一遺構に対して複数の遺構番号が割り振られることは煩雑であるが、本文および収録図に可能な限り併記することでお赦しいただきたい。

第4項 調査の手続き

文化財保護法に関する手続きについて、それぞれの調査の実施にあたっては文化財保護法第99条の規定に基づき、関係書類を添えて埋蔵文化財発掘調査通知書を福井県教育委員会に提出した上で調査に着手した。調査終了後は、遺失物法第13条の規定により敦賀警察署長に対して埋蔵文化財発見届を速やかに提出するとともに、福井県文化財保護条例第57条の2第1項の規定により福井県教育委員

会に対して埋蔵文化財保管証を提出した。福井県教育委員会から敦賀警察署長に対する文化財認定を経た後、隨時、福井県教育委員会から埋蔵文化財の譲与を受けている。

第5項 遺跡名称の統一

『2007年報告』でも記したとおり、遺跡名称に関しては、従来、遺跡地の小字地形が観音であることと、現況が畠地であったことから地元では観音畠（廃寺）と呼び親しまれ、地域住民、郷土史家には「観音畠廃寺」という名称が一般的であった。その後、昭和62（1987）年、水野和雄氏は興道寺廃寺出土瓦の報告に際して「興道廃寺」という名称を用いた。『福井県遺跡地図』に収録されていた遺跡名称は「興道廃寺」であり、水野氏による呼称が踏襲されている。

その後、福井県史、美浜町誌などの自治体史誌に収録された遺跡名称は「興道寺廃寺」であり、大字名を採用したオーソドックスな遺跡名称が使用される。近年、研究者を始め大方の関係者には「興道寺廃寺」という名称が定着しており、平成18年（2006）2月11日、12日に美浜町が開催した歴史シンポジウムではタイトルを「興道寺廃寺の謎に迫る」とするなど、興道寺廃寺という名称を統一的に使用した。

このように「観音畠廃寺」「興道廃寺」「興道寺廃寺」という遺跡名称が見られ、興道寺廃寺第1期調査当時、調査手続きを進める上で混乱を来たした。また、今後の遺跡の保存活用を進める上でも遺跡名称が混在することは相応しくないことから、名称を統一するために福井県教育委員会と協議を行い、平成18年6月26日付け、福井県教育委員会教育長通知により遺跡名称が興道寺廃寺として周知されている。興道寺廃寺という遺跡名称を設定するまでの根拠は以下のとおりである。

① 美浜町興道寺に所在する古代寺院は現在のところ1遺跡しかなく、今後さらに同大字内に古代寺院が確認される可能性も低いことから大字名を採用して興道寺廃寺とする。なお、古文書などで確認される天台系中世寺院、興道寺を構成する遺構が今後確認された場合は遺跡名称を「興道寺跡」と呼び分ける。

② 「興道寺廃寺」という名称は広く馴染みある遺跡名称になりつつあり、美浜町が開催したシンポジウムによって地域住民に対しても広く周知された。

なお、『2007年報告』以後、本報告に至るまで興道寺廃寺という名称を用いているが、平成18年6月25日以前の調査等に係る事務手続きにおいては、それまでの周知の埋蔵文化財包蔵地名「興道廃寺」を使用している。また、古い文献、論文等には観音畠廃寺と記されている場合もあり、注意を要する。

第5節 総括報告書の作成方針と作成方法

第1項 総括報告書の作成方針

興道寺廃寺の発掘調査が大きく進展したことで、調査成果について一定の評価が得られるようになり、史跡指定を含む遺跡保存を進める環境が整い出した。そのような中、美浜町教育委員会は平成26年度に第16次調査を終え、それまでの調査成果を網羅的にまとめて遺跡の普遍的価値を示し、世に問うため、平成27年度の事業として総括報告としての興道寺廃寺発掘調査報告書の作成を進めることとなった。

総括報告書の作成方針として、まず未報告にあたる第14～16次調査の内容を報告書に収録し、これまでの調査の概要も分かるよう、適宜、既往の調査成果を報告書に織り込みながら、遺跡の価値づ

けのための総括を的確に行うことを目指した。報告書の構成については、文化庁、近江文化財調査官に指導を受けるとともに、興道寺廃寺等調査指導委員会で検討を行なながら立案した。

本書は興道寺廃寺のこれまでの調査成果を踏まえ、興道寺廃寺発掘調査報告書の総括編としての位置づけとなる。総括報告としての構成としては、遺跡周辺の環境、既往の調査を概観し、これまで未報告である福井県教育委員会試掘調査時出土資料、個人採集資料などを資料紹介することで、遺跡の概要を示した。第14次調査以後の調査報告を収録した後、第1次調査から第16次調査において検出した主だった寺院関連遺構と出土した遺物について、『2007年報告』、『2012年報告』から適宜、抜粋、引用した上で報告記録を再編集の上、再録した。最終章の総括では、若干の遺跡の価値づけを行った。

総括調査となる性質上、『2012年報告』と本書において、遺構、遺物などに関する記述が重複する部分があり、また『2002年報告』、『2007年報告』、『2012年報告』で示した見解の一部を改める場合もあるが、本書が現時点での興道寺廃寺に関する公式見解であることを理解されたい。

第2項 整理作業の方法と総括報告書の作成

第14～16次調査の整理作業は、福井県三方郡美浜町金山14-1の美浜町学校教育課 文化財室で実施した。第14次調査以後の各次調査終了後、出土遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測、探拓の諸作業を随時、進め、平成27年度の調査報告書の作成に備えた。

遺物の実測図・拓影の収録にあたっては、以下のとおりとした。

・原則として一边が10cm以上残る資料で、表面の摩滅が見られない瓦を図化した。基本的には全ての瓦を観察し、各辺が5cm以上のものをを中心に（軒）丸瓦、（軒）平瓦に細別し、種別ごとにカウントした。それ以下の大きさの、種別を判別しかねる小片資料は瓦小片とする。

・瓦の報告に際して、「横ナデ」としたものは側縁間の方向にナデ調整を施すもの、「縦ナデ」としたものは狭端と広端の方向にナデ調整を施すものを示し、同様に瓦の凸面叩き調整に関して側縁部に平行、直交して施すものは「直交する」ものとし、側縁部に対して斜めに施すものは「斜交する」ものと記述した。また、瓦の側面、側縁、狭端・広端面の調整については煩雑になるため本文では逐一触れていない。遺物観察表を参照されたい。

・瓦の報告にあたっては、『2012年報告』までの収録実測図・拓影は縮尺1/6を基本としたが、本報告では第14～16次調査の報告に関する実測図・拓影は1/4の縮尺とし、福井県教育委員会試掘調査時出土資料・個人採集瓦などの実測図・拓影は1/5の縮尺とした。既報告の実測図等を再録する場合は縮尺を変更せずに縮尺1/6のまま収録した。

・土器、その他の遺物のうち破片資料は、口径、器形復元が可能な資料を極力抽出し、図化した。また、細片資料であっても遺構の構築および魔絶年代を示すと思われる資料についても極力図化した。なお、表土出土遺物については図化を行っていない。なお、これらの出土点数には同一個体を構成すると考えられるものを含んでいるが、接合関係にあるものは接合後の状態で、また肉眼観察上、明らかに同一個体と考えられるものはそれらを一括して1点とカウントした。

・実測図のうち、土器、塑像螺髪、土壁、金属製品は縮尺1/3(一部、変更)、銭貨は縮尺1/2とした。一部の土器、塑像螺髪、土壁、金属製品、銭貨は『2012年報告』から抽出し、縮尺を変えて採録した。

調査で出土した鉄製遺物については、調査後の錆の剥落等が著しく、対象遺物の文化財認定を受けた後、美浜町事業として専門業者に委託の上、随時、保存処理業務を行ってきた。

本書を作成するにあたり、遺構・遺物の製図(トレース図)および遺構・遺物などの図版作成はAdobe社 Illustrator.ver10を使用し、デジタルデータとして作成した。